経塚鼻遺跡発掘調査報告書

主要地方道安来伯太日南線新世紀道路（改良）工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2006年3月

島根県安来市教育委員会

経塚鼻遺跡発掘調査報告書

主要地方道安来伯太日南線新世紀道路（改良）工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2006年3月

島根県安来市教育委員会

序

安来市は、島根県東端部に位置し、民謡安来節とハガネのまちとして知られていますが、県下でも有数の埋蔵文化財が数多く所在するところでもあります。

ここに報告します経塚鼻遺跡は、島根県広瀬土木事務所の委託を受けて旧伯太町教育委員会が平成15年度に調査に着手した主要地方道安来伯太日南線新世紀道路（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査であります。調査は1市2町の合併により新生の安来市教育委員会が、平成16年10月1日より引き継ぎ実施してきたものであり、この度結果をまとめた報告書を刊行する運びとなりました。

本遺跡は丘陵先端にあり、前面には伯太川を眼下に、下流域には能義平野を見る眺望良好な場所に立地しています。調査の結果、弥生時代の環濠をはじめ各種の遺構と遺物が発見されましたが、特に環濠は島根県東部における貴重な発見例となりました。

この調査地はやむを得ず現状を失うことになりましたが、その記録や出土品は貴重な文化財として私達の郷土を知る一助となれば幸に存じます。

なお、調査にあたり地元の方にはご理解とご協力を頂くとともに、県教育委員会文化財課をはじめとする関係各機関、各位のご指導ご助言を賜りました。心から感謝し厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

安来市教育委員会

教育長　石　川　隆　夫

例　言

1．本報告書は、主要地方道安来伯太山南線新世紀道路（改良）工事に伴い、島根県広瀬土木事務所（及び組織改編により後に松江建築土木事務所）の委託を受け、伯太町教育委員会及び市町村合併により安来市教育委員会が実施した安来市伯太町東母里井戸地区内の地名「経塚鼻」の埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．本報告書に収載の経塚鼻遺跡は新発見の遺跡であり、地元の通称名から命名したものである。

3．本報告所に掲載の地形図は国土地理院発行の25,000分の１の地形図を使用した。

4．本書の作成は次のように行った。

報告書の本文については妹尾が執筆し、挿図のうち遺構実測図は大塚充・妹尾秀樹・舟木聡・清水初美・田中強志・是田和美・影山和雅・小立哲也・名和昌俊。浄書は清水初美・是田和美・山尾志保が行った。遺物の実測は清水初美・是田和美・今岡利江・山尾志保。浄写は清水初美・是田和美・山尾志保・松本美恵子が行った。

遺構写真は妹尾秀樹・田中強志・影山和雄が撮影した。遺物写真は影山和雄が撮影した。全体の編集は妹尾秀樹・清水初美が行った。

5．図面、写真類、出土遺物の保管は安来市教育委員会が行っている。

6．挿図中の方位は測量法による第Ⅲ座標系のＸ軸方向とした。

7．現地調査及び報告書作成にあたって、下記の方々に指導・助言をいただいた。記して謝意を表します。

《調査指導》

田中義昭　（島根県文化財保護審議委員）

大谷晃二　（島根県立松江北高等学校教諭）

《指導・助言》

丹羽野　裕　（島根県教育委員会文化財課）

宮本正保　（島根県教育委員会文化財課）

広江耕史　（島根県教育委員会文化財課）

東森　晋　（島根県教育委員会文化財課）

《協力》

中村唯史　（三瓶自然館指導員）

松本　哲

凡　例

1．本報告書に収載した遺物の記述は、本文中の観察表にかえ、遺物の一部について若干の考察を行った。

2．本報告書における挿図の縮尺は図中に明示した。

3．本報告書の上器実測図において、その断面はすべて白抜きとした。

4．本報告書における遺構略記号は次のように表す。

ＳＩ：竪穴住居跡　　ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＤ：溝状遺構　　ＳＫ：土坑

Ｐ：柱穴　　ＳＳ：段状遺構

5．本報告書における遺構略記号は次のように表す。

Ｓ：石器　　Ｆ：鉄器　　Ｊ：玉類

6．本報告書におけるピットの計測値は（長径×短径－深さ）cmで示した。

目　次

序　文
例　言・凡　例
目　次・挿図目次・図版目次

第1章　調査に至る経偉 …… 1
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　調査の経過 …… 2
　第3節　調査体制 …… 2
第2章　位置と歴史的環境 …… 3
　第1節　地理的環境 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 3
第3章　経塚鼻遺跡の調査 …… 6
　第1節　調査の概要 …… 6
　第2節　古墳 …… 10
　第3節　環壕 …… 25
　第4節　柵列跡 …… 40
　第5節　柱穴列 …… 41
　第6節　柱穴群 …… 43
　第7節　竪穴住居跡 …… 45
　第8節　段状遺構 …… 58
　第9節　溝状遺構 …… 70
　第10節　土坑 …… 74
　第11節　遺構外遺物 …… 84
第4章　まとめ …… 85
　第1節　遺構について …… 85
　第2節　遺物について …… 90

遺物観察表 …… 99
写真図版 …… 109

挿　図　目　次

挿図1　経塚鼻遺跡位置図 …… 1
挿図2　経塚鼻遺跡と周辺の遺跡分布図 …… 5
挿図3　周辺地形図 …… 6
挿図4　経塚鼻遺跡調査後地形測量図・遺構配置図 …… 7～8
挿図5　経塚鼻遺跡調査前測量図 …… 9
挿図6　1号・2号・3号墳遺構図 …… 11～12
挿図7　1号墳土層断面図 …… 13

挿図 8　1号墳主体部遺構図・1号墳出土遺物実測図 …… 14
挿図 9　1・2号墳出土遺物実測図 …… 15
挿図10　2号墳土層断面図 …… 15
挿図11　2号墳土層断面図 …… 16
挿図12　3号墳土層断面図 …… 17
挿図13　3号墳主体部出土遺物実測図（1） …… 17
挿図14　3号墳主体部遺物出土状況図・土層断面図 …… 18
挿図15　3号墳出土遺物実測図（2） …… 19
挿図16　3号墳出土遺物実測図（3） …… 20
挿図17　3号墳出土遺物実測図（4） …… 21
挿図18　3号墳出土遺物実測図（5） …… 22
挿図19　3号墳出土遺物実測図（6） …… 23
挿図20　4号墳遺構図 …… 24
挿図21　4号墳出土遺物実測図 …… 24
挿図22　4号墳出土遺物実測図 …… 24
挿図23　環壕遺構図・遺物出土分布図・構列跡遺構図 …… 29～30
挿図24　構列土層断面図 …… 29～30
挿図25　環壕土層断面図（1） …… 31
挿図26　環壕土層断面図（2） …… 32
挿図27　環壕土層断面図（3） …… 33
挿図28　環壕土層断面図（4） …… 34
挿図29　環壕DY層BY層出土遺物実測図（1） …… 35
挿図30　環壕B_1層B_2層出土遺物実測図（2） …… 36
挿図31　環壕B_3層出土遺物実測図（3） …… 37
挿図32　環壕B_3層T_1Y_1層T_2Y_2層出土遺物実測図（4） …… 38
挿図33　旧表土中出土遺物実測図 …… 39
挿図34　旧表土中出土遺物実測図 …… 39
挿図35　第1柱穴列遺構図 …… 41
挿図36　第2柱穴列遺構図 …… 41
挿図37　第3柱穴列遺構図 …… 42
挿図38　第1柱穴群遺構図 …… 44
挿図39　第2柱穴群遺構図 …… 44
挿図40　第1竪穴住居跡遺構図 …… 45
挿図41　第1竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 46
挿図42　第1竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 46
挿図43　第2竪穴住居跡遺構図 …… 47
挿図44　第2竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 48
挿図45　第3竪穴住居跡遺構図 …… 49
挿図46　第3竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 50
挿図47　第4竪穴住居跡遺構図・出土遺物実測図 …… 51
挿図48　第5竪穴住居跡遺構図 …… 52
挿図49　第5竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 53
挿図50　第6竪穴住居跡遺構図 …… 53
挿図51　第6竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 54
挿図52　第7竪穴住居跡遺構図 …… 56

挿図53　第7竪穴住居跡変遷図 ……57
挿図54　第7竪穴住居跡出土遺物実測図 ……57
挿図55　第7竪穴住居跡出土遺物実測図 ……57
挿図56　第1段状遺構遺構図 ……58
挿図57　第1段状遺構出土遺物実測図 ……58
挿図58　第2段状遺構遺構図 ……59
挿図59　第2－b段状遺構出土遺物実測図 ……60
挿図60　第3・4段状遺構遺構図 ……62
挿図61　第3・4段状遺構出土遺物実測図 ……62
挿図62　第5段状遺構出土遺物実測図 ……63
挿図63　第5段状遺構遺構図 ……63
挿図64　第7段状遺構出土遺物実測図 ……64
挿図65　第6・7段状遺構遺構図 ……64
挿図66　第9段状遺構遺構図 ……65
挿図67　第9段状遺構出土遺物実測図 ……65
挿図68　第10段状遺構遺構図 ……65
挿図69　第10段状遺構出土遺物実測図 ……65
挿図70　第11段状遺構遺構図 ……66
挿図71　第11段状遺構出土遺物実測図 ……66
挿図72　第12段状遺構出土遺物実測図 ……67
挿図73　第12段状遺構遺構図 ……67
挿図74　第13段状遺構出土遺物実測図 ……68
挿図75　第8・13段状遺構遺構図 ……68
挿図76　第14段状遺構遺構図 ……69
挿図77　第1溝状遺構遺構図 ……70
挿図78　第2・3溝状遺構遺構図 ……71
挿図79　第3溝状遺構出土遺物実測図 ……71
挿図80　第4・5溝状遺構遺構図 ……72
挿図81　第4・5溝状遺構出土遺物実測図 ……73
挿図82　第1・2・3・4・5・6土坑遺構図 ……79
挿図83　第7・8・9・10・11・12土坑遺構図 ……80
挿図84　第13・14土坑遺構図・第13土坑出土遺物実測図 ……81
挿図85　第15・17土坑遺構図・第15・16・17出土遺物実測図 ……82
挿図86　第8・11・12土坑出土遺物実測図 ……83
挿図87　第16土坑遺構図 ……83
挿図88　遺構外出土遺物実測図 ……84

図　版　目　次

(遺構写真)

図版1　調査地全景　北西上空から
図版2　調査地頂部近景　西側上空から・調査地全景　西側上空から
図版3　調査前風景　北西から・調査地全景　南側上空から
図版4　1号墳土層ベルト・東西土層ベルト東側・東西土層ベルト西側
図版5　1号墳周溝土層断面・南東側周溝遺物出土状況・周溝西側終焉付近墳輪出土状況

図版6　1号墳主体部完掘状況・完掘後の全景・2号墳周溝土層断面
図版7　2号墳完掘後の全景・3号墳周溝遺物出土状況・周溝堆輪出土状況
図版8　3号墳主体部検出状況・主体部十層断面・主体部床面検出状況
図版9　3号墳主体部検出状況全景・主体部完掘状況・完掘後の全景
図版10　4号墳周溝土層断面・周溝底部遺物出土状況・完掘状況
図版11　環壕遺物出土状況　黒色土層　C～F間・E～F間・F～H間
図版12　環壕遺物出土状況　下層埋土中　E～F間・E～G間・G～H間
図版13　環壕遺物出土状況　下層埋土中　H～I間・I～J間・J～K間
図版14　環壕上層断面　Aベルト・Bベルト・Dベルト
図版15　環壕土層断面　Eベルト・Fベルト・Gベルト
図版16　環壕土層断面　Iベルト・Jベルト・Kベルト
図版17　環壕完掘状況　A～D間・E～G間・G～H間
図版18　環壕完掘状況I～K間・SI－01完掘状況
図版19　SI－02　検出状況・遺物出土状況・完掘状況
図版20　SI－03完掘状況　SI－04・05検出状況・完掘状況
図版21　SI－06土層断面・完掘状況　SI－07完掘状況
図版22　SS－01～08・13完掘状況
図版23　SS－09・10・12完掘状況　SK－01～06完掘状況
図版24　SK－07・08・09・11・12・14完掘状況　SK－13・14土層断面・SK－13遺物出土状況
図版25　SK－15・16完掘状況　第3柱穴列完掘状況
（遺物写真）
図版26　1・2・3号墳出土遺物
図版27　3号墳出土遺物
図版28　3号墳出土遺物
図版29　3・4号墳出土遺物
図版30　環壕　DY層・BY層出土遺物
図版31　環壕　B_1層・B_2層出土遺物
図版32　環壕　B_2層・T_1Y_1層・T_2Y_2層出土遺物
図版33　環壕・旧表土中・SI－01～03出土遺物
図版34　SI－03～07・SS－01～02出土遺物
図版35　SS－02b・03～05・07・09～13・SD－03～05出土遺物
図版36　SK－08・11～13・15～17出土遺物・遺構外出土遺物

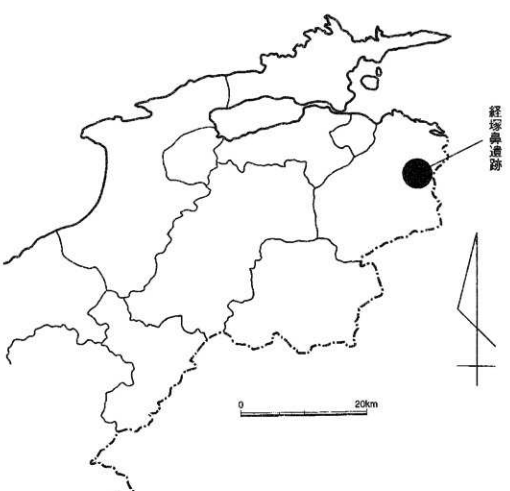
第1章　調査に至る経緯

第1節　調査に至る経緯

主要地方道安来伯太山南線新世紀道路（改良）工事に伴い、島根県広瀬土木事務所より、計画路線内の埋蔵文化財分布調査について依頼があり、平成14年1月29日より平成14年2月8日の間に踏査を行い平坦面、凹地など遺跡の存在が考えられる所を確認した。これにより結果を報告するとともに試掘調査が必要である旨を協議し、平成15年9月4日より平成15年9月12日の間にトレンチによる試掘調査を行った。調査の結果、丘陵上部平坦地より古墳及び土坑、中腹緩傾斜地より弥生時代の竪穴住居跡と考えられる遺構を確認した。

これにより試掘調査結果を報告すると共に発掘調査が必要である旨を報告した。これを受け広瀬土木事務所長より発掘調査の依頼があり実施することとなった。

本遺跡の名称については地元で「寺山・オオカメザキ・キャツカバナ」などと呼ばれており、その内のキャツカバナの本来の意味するところを考え経塚鼻遺跡とした。



挿図1　経塚鼻遺跡位置図

第２節　調査の経過

現地調査に先立ち地形測量を実施した。調査地内には立木が残っており撤去が必要で搬出路の設置位置を確認するため、３本のトレンチによる調査を実施し、搬出路を設置し立木の撤去を実施した。更に枝条の搬出集積と調査地の整理に相当数の労力を要した。

本格的に現地調査に入ったのは平成16年４月５日からである。調査は上部平坦地よりはじめ古墳４基・環壕１条・竪穴住居７棟・段状遺構14基・棚列跡１条・柱穴列３条・柱穴群２ヶ所・溝状遺構５本・土坑17基を確認し、現地説明会を経て完掘後の地形測量を実施し、平成16年12月28日現地調査を終了した。

第３節　調査体制

島根県教育委員会文化財課、島根県埋蔵文化財調査センターの指導のもと、下記の体制で実施した。

平成１５年度	調査主体者	山崎丈治（伯太町教育委員会教育長）
現地調査	事務局長	化田明巳（伯太町教育委員会教育次長）
	調査員	妹尾秀樹（伯太町教育委員会文化財保護係長）
	調査補助員	清水初美
平成１６年度	調査主体者	山崎丈治（伯太町教育委員会教育長）
現地調査	事務局長	八幡治夫（伯太町教育委員会教育次長）
《合併前伯太町》	調査主任	妹尾秀樹（伯太町教育委員会補佐）
	調査員	影山和雄（派遣）
	調査補助員	清水初美・田中強志・是田和美・小立哲也・名和昌俊
	整理作業員	細田久美子・山尾志保・梅瀬順子・種田美保子・清水千明
《合併後安来市》	調査主体者	中野吟子（安来市教育委員会教育長10/１～11/８）
		石川隆夫（安来市教育委員会教育長11/９～）
	事務局長	伊藤耕治（安来市教育委員会教育総務課副参事）
	調査主任	妹尾秀樹（安来市教育委員会教育総務課主幹）
	調査員	大塚　充（安来市教育委員会教育総務課主任）
	調査補助員	清水初美・田中強志
	整理作業員	山尾志保
平成１７年度	調査主体者	石川隆夫（安来市教育委員会教育長）
報告書作成	事務局長	伊藤耕治（安来市教育委員会教育総務課副参事～７/31）
		中嶋　登（安来市教育委員会教育総務課副参事８/１～）
	調査員	妹尾秀樹（安来市教育委員会教育総務課主幹）
	〃	大塚　充（安来市教育委員会教育総務課主任）
	調査補助員	清水初美・是田和美
	整理作業員	山尾志保・梅瀬順子・松本美恵子・今岡利江・泉あかね
		森本　孝

第２章　位置と歴史的環境

第１節　地理的環境

安来市は平成16年10月１日に旧安来市・旧広瀬町・旧伯太町の一市二町が合併し新たな行政域となり北は中海、東南は鳥取県米子市などの県境に接している。

本遺跡は旧伯太町域に在る。この区域は南端より伯太川及び支流が北流し、伯太川に沿うように主要地方道安来伯太日南線が中央軸として縦貫している。これを主軸に主要地方道溝口伯太線・一般県道米子伯太線・同米子広瀬線などがそれぞれ隣接市町と中国自動車道・米子自動車道・山陰自動車道に連結している。旧伯太町から近隣主要地への距離は県都松江32km・米子市12 kmである。

南部は鷹入山（標高706ｍ）・葛野山（標高737.8ｍ）の主峰をはじめとする山々が南壁をなし伯太川の水源となっている。

地質を見ると花崗岩が町域の大半を占め、母里・安山地内に流紋岩や安山岩などを見ることが出来る。伯太川周辺には花崗岩風化土（真砂土）の堆積が見られ、下流では河床が高くなり天井川を造り出している。これは自然の流砂はもとより、藩政期に鑪製鉄が盛んで、上流域にある豊富な真砂土から砂鉄採集のための、鉄穴流しを行ったことによる人為的な流砂といえるものである。

今回調査を行った経塚墓遺跡は、安来市伯太町東母里井戸集落の北端で、伯太川と安田川に挟まれる丘陵の支脈で、伯太川に向って西へ突きでる丘陵先端部に位置している。眼下には伯太川沿いに水田が広がり、下流域には能義平野を望むことが出来る眺望良好の場所である。

第２節　歴史的環境

本遺跡周辺には周知の遺跡として中村横山横穴（27）・井戸古墳群（28）・井戸西古墳群（29）などがあるが、何れも発掘調査は行われていない。

縄文時代は狩猟採集を中心に自然の恵みを求めて人々が広範囲に活動した時代と言われるが、旧伯太町域で過去発見されたこの時代の遺物は僅かである。伯太川上流赤屋地区下上年畑の水田底の黒色土中から、土師器と共に出土した遺物の中に、深鉢と考えられる縄文土器片が一片出土している。昭和55年実施の岩屋谷古墳群外発掘調査において座王７号墳・塚田古墳からそれぞれ縄文土器片数点が出土した。安田地区替地遺跡では石鏃・黒曜石片の出土があり縄文遺跡と考えられている。また、平成14年実施の安田深田遺跡の発掘調査では、狩猟用落し穴の中より約5000年前の縄文時代中期の土器（約1/3残存）が出土している。以上の状況から縄文時代の人々が伯太川流域に生活していたことが窺える。

弥生時代は大陸から渡来した稲作農耕と鉄器が普及し、これにより政治的地域集団が形成されていったとされるが、旧伯太町域内で弥生時代の遺跡として後期のものとして出雲崎遺跡（12）・丹部落台遺跡（23）・安田深田遺跡（16）・青垣神社横遺跡・カウカツ墳丘墓（19）などが確認されている。中期末になると各地で丘陵上に集落が出現する。後期後半には最盛期を迎え、丹部落台遺跡では丘陵上に中期末の竪穴住居跡、後期末の竪穴住居跡がみつかっている。本遺跡、青垣神社横遺跡でも後期の竪穴住居が認められ、山上に住まうと言う社会情勢の不安定さや土地条件の制約が読み取れる時代である。一方で後期後半には地域集団を束ねる有力者が出現する。カウカツでは貼石をもつ墳丘墓が出現しており、供献土器の中に吉備系の擬凹文を巡らせた壺や器台が出土し、他

地域との交流を窺わせる好資料である。

古墳時代は農業生活が進み経済力の増大により社会的力関係が明らかになり、支配者の権威を示すものとして大規模墳墓が出現するとされる。旧伯太町域内において今までに確認された古墳は後期のものが大半とされているが、発掘調査により確認されたものは僅少である。また、規模は20mを越す規模の古墳は確認されておらず大半は数基単位で小高い尾根上に在る。古墳について発掘等で確認された遺構はカウカツ遺跡・シアケ遺跡・青垣神社横遺跡・塩工7号墳などがある。その他多数の古墳が存在するが何れも踏査によって確認されたものである。

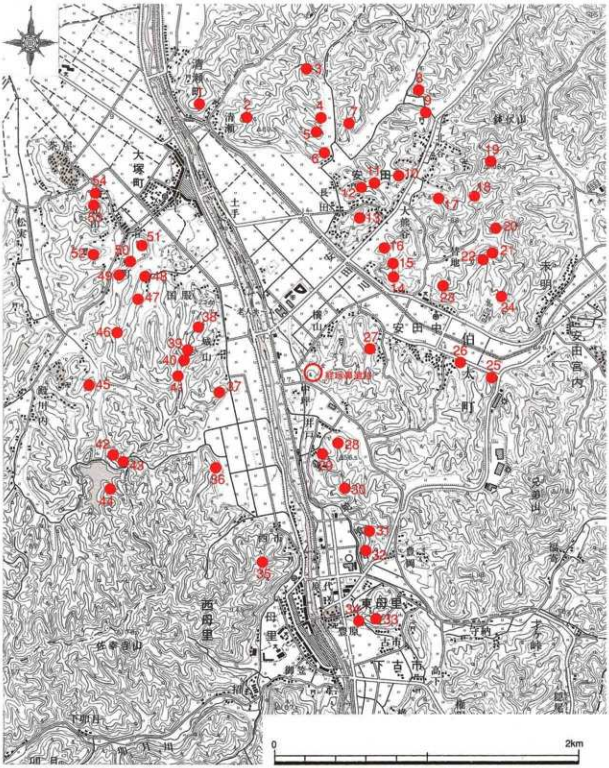
天平5年（733年）勘造の「出雲国風土記」に記される現在の伯太町域は意宇郡の内、母里郷・屋代郷に当ると考えられる。記される社は多乃毛社・斯保弥社・久米社の三社である寺院についての記述はないが坊床寺跡・長台寺付近寺跡・古御堂寺跡に各伝えがあり、塔の心礎石、布目瓦の出土を見ており、氏寺の建立がかなり早い時期から行われていたあかしと見ることができる。古代都へつながる官道として山陰道があり伯耆と出雲の国境には手間駅が設けられ、伯太町安田間は地名に関所が存在していたことを今に伝えている。

中世も鎌倉幕府成立後以降、武家の支配する時代となり南北朝、室町時代と当地にも「安田荘」があり新補地頭の動きがあった。

応仁の乱（1463年）以降になると各地で乱が勃発し、城郭・砦が各地に多く築かれ、戦国時代へと続いて行く。尼子・毛利の戦には各地の土豪を巻き込んで行き伯太町域内の安田要害山城・亀遊山峠での戦いが激しくなっていった。

関が原の戦いよりのち、出雲の領主は堀尾氏から京極氏へと移った。同氏は短期間の藩主であったが、寛永11～12年（1634～1635年）伯太川の治水工事を行い新田開発の基礎を築いたといわれている。寛永15年（1638年）藩主は松平氏となり寛文6年（1666年）には母里藩1万石が支封され貞享元年（1684年）藩領が決定され伯太川右岸若狭街道に一里塚を設けた。現在、当遺跡の西側前面は中坪の一里塚として今に伝えている。

明治二年版籍奉還により明治新政府の支配となるが、母里藩主は政府より新たに母里藩知事を任命された。あわせて藩政改革も行い士族の帰農帰商政策が行われた。いまも帰農地を持ち居宅を構えたところと伝える屋敷跡が本遺跡近くにも残されている。



挿図２　経塚鼻遺跡と周辺の遺跡分布図　（S=1／25000）

1	清瀬横穴	2	安田清瀬古墳群	3	金堀古墳群	4	虫尾遺跡	5	髭濃古墳群	6	文殊山古墳群
7	御崎山古墳群	8	穴ヶ峠古墳	9	長田八幡宮横穴	10	横手古墳	11	中山横穴	12	田面崎遺跡
13	長田城跡	14	中谷遺跡	15	石堂古墳群	16	安田深田遺跡	17	観音谷遺跡	18	高廣遺跡
19	カウカツ遺跡	20	高廣谷遺跡	21	石堂横穴群	22	東塚古墳	23	丹部落合遺跡	24	丹部遺跡
25	千本山古墳	26	大森神社遺跡	27	中村横山横穴	28	井戸古墳群	29	井戸西古墳群	30	五反田古墳群
31	豊岡城跡	32	中山古墳群	33	亀遊山古墳群	34	亀遊山城跡	35	極楽寺古墳群	36	釜谷古墳群
37	城山古墳群	38	国服古墳群	39	国服古墳	40	峠山古墳群	41	峠山古墳	42	八脇谷遺跡
43	八脇谷横穴	44	高尾遺跡	45	善福寺横穴	46	元坂古墳群	47	後鳥籠谷古墳群	48	国重遺跡
49	上丸山古墳群	50	東丸山古墳群	51	東山古墳群	52	八幡宮横穴	53	茶屋B横穴群	54	茶屋A横穴群

第３章　経塚鼻遺跡の調査

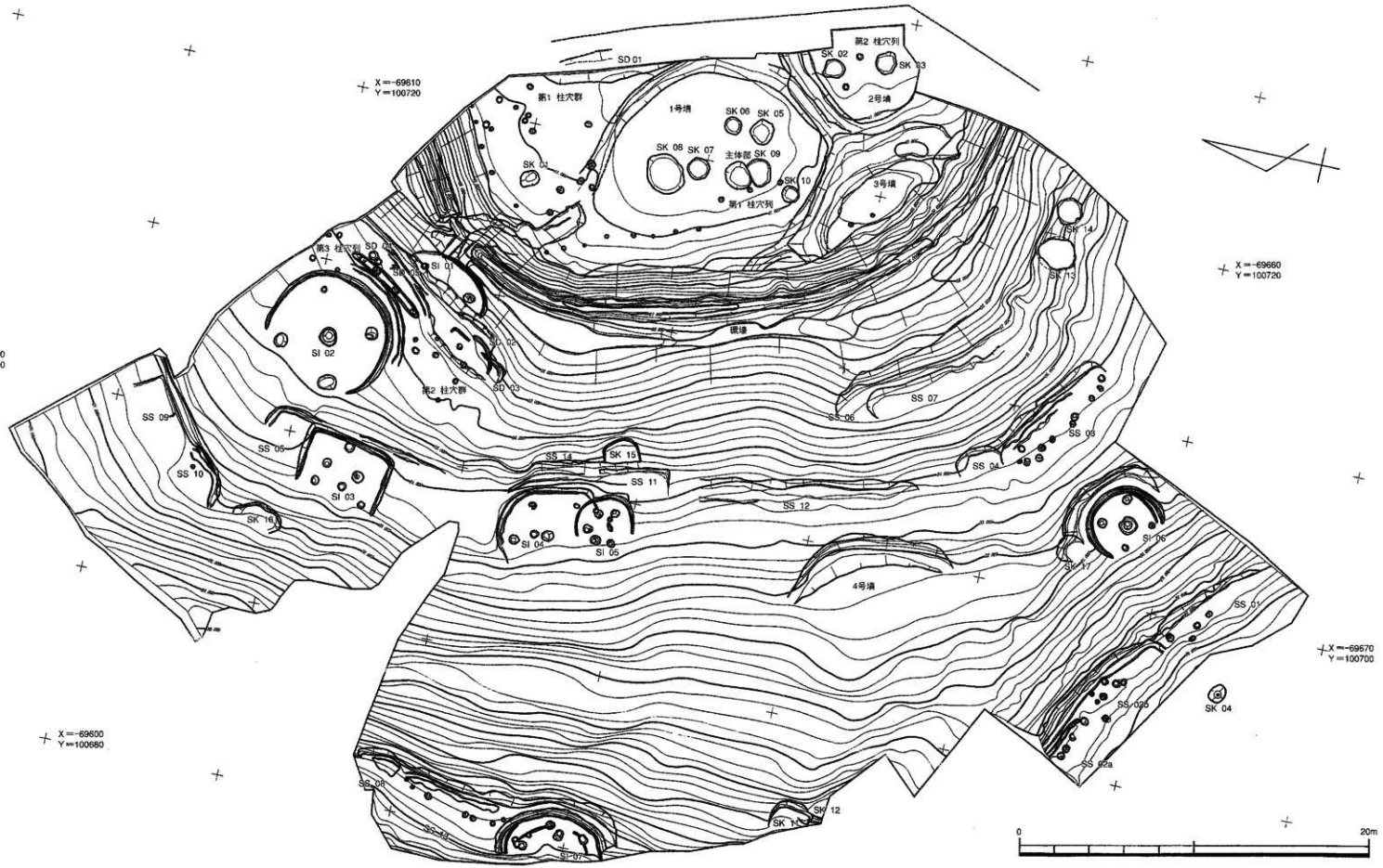
第１節　調査の概要

経塚鼻遺跡は、安来市伯太町東母里と同町安田に跨る舌状丘陵突端部に造られた遺跡で、頂部平坦地は標高41ｍ・水田との比高差25ｍである。調査前は大半がスギ・ヒノキの人工林地であり、斜面中腹緩斜面に平坦地があったと考える所があり、また近世墓もあり、一部の土層断面からは下層に古代の住居跡等の存在も考えられた。

調査は、試掘調査をはじめとするトレンチにより確認されている遺構の状況をもとに、頂部平坦面から中腹までの斜面については手掘りにより調査を行ったが、中腹緩斜面については効率的作業を行うため重機により表土の掘削を行い、その後の作業については人力による掘削作業を行った。

調査の結果頂部平坦面には古墳や土坑、斜面へ移行する肩部には環壕及びこれに伴うと考える柵列跡、中腹には段状遺構及び竪穴住居跡・古墳・土坑、中腹よりドる急斜面部にも段状遺構・竪穴住居跡・土坑を確認する。遺構は丘陵の上からドへと広範にわたって存在している。

挿図３　周辺地形図（１：1000）



挿図4　経塚鼻遺跡調査後地形測量図・遺構配置図（1：200）

挿図5　経塚鼻遺跡調査前測量図（1：400）

第2節　古墳

1号墳（挿図6～9、図版4～6・26）

位　置　　調査区の東側頂部で丘陵突端に位置し、平坦地の中央に立地する。南側は3号墳により一部を削られ、南東側は2号墳により僅かに削られている。標高は墳丘頂部で41.5mを測る。水田との比高差は26mである。

周　溝　　墳丘は後世に大きく削平を受けたと考えられ、盛土部分は存在しないことから、検出した周溝については地山を掘り込んで造られた部分の残りであると考える。南側は3号墳の周溝により削られ築造時の形状を知ることはできなかった。北東側には、地山を掘り込んだ溝が残存しており検出面での周溝は、上幅の最大は1.26m、下幅の最大は0.60m、深さ0.6～0.22mで断面は逆台形を呈す。

墳　丘　　墳丘は大半が後世の削平を受けており、地山を掘り込んだ周溝によりかろうじて墳形を留めているといえる。平面形は円形を呈した円墳で規模は残存面で長辺（北西－南東）11mを測り、推定する墳丘の径は12m以上である。墳丘構築に盛土が行われたと考えるが、削平によりほとんど残存しない。このため古墳の築造方法は不明である。残存の墳丘頂部と周溝底面の比高差は0.6m～0.2mである。

主体部　　墳丘盛土は前述した如く後世に大きく削平されている為、墳丘から明確な主体部を検出することができなかった。しかし、中心部には地山面より土坑1基を検出した。上面形は不整な楕円形を呈し上縁部長径1.6m×短径1.22mを測る。底面形も不整な楕円形で底部長径1.3m×短径0.95m、深さは0.25mである。断面形は逆台形を呈し、主軸はN－45°－Eを取る。遺物は土師器の鉢が出土している。断面観察で棺痕跡は認められなかったものの、埋葬施設と考えられる。なお、墳丘地山面に5基の土坑を検出したが堆積土から古墳築造以前の貯蔵穴と考える。

遺　物　　遺物は土師器壺・小型丸底壺・高坏・坏・埴輪・鉄製品が出土した。

時　期　　築造時期は出土土器より古墳時代中期前半と考える。

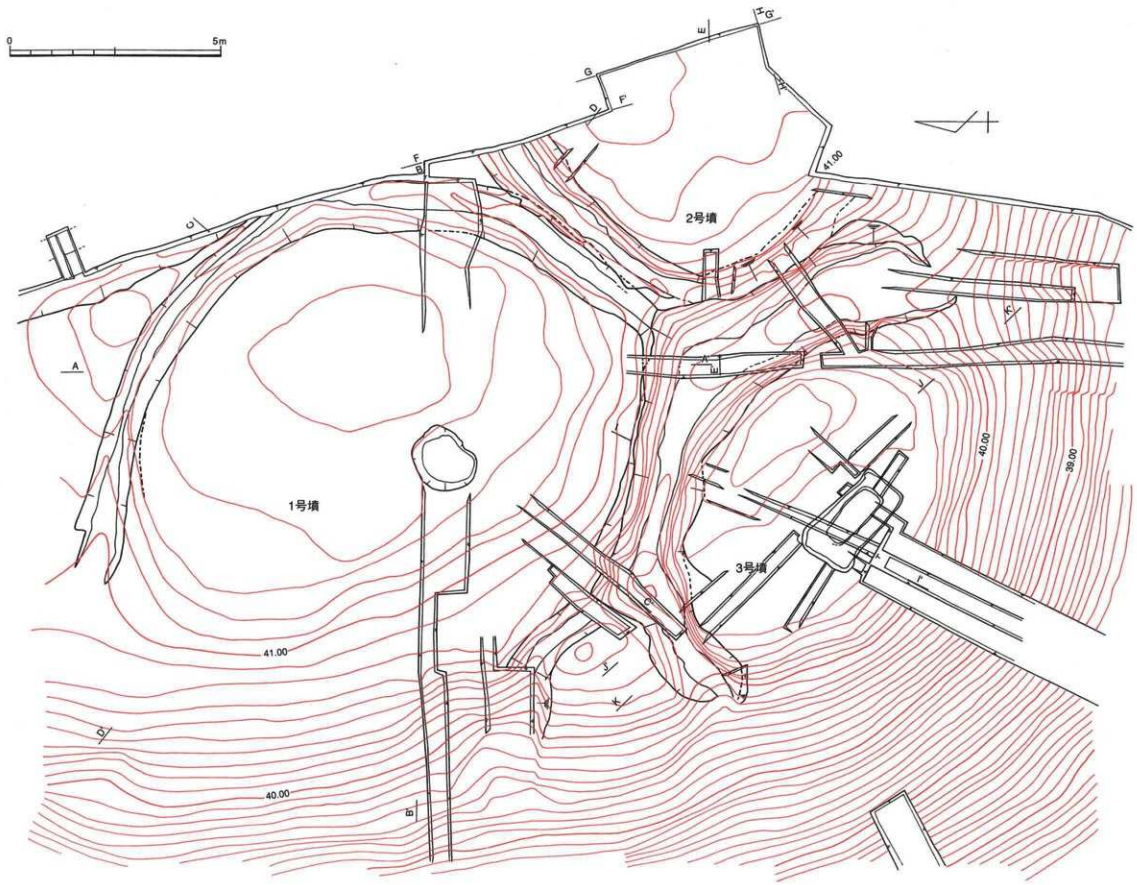
2号墳（挿図6・9～11、図版6～7・26）

位　置　　調査区の東側頂部で丘陵突端に位置し、平坦地の南東側に立地する。北西側に1号墳、西側に3号墳がそれぞれ隣接している。標高は墳丘頂部で41.3mを測る。水田との比高差は26.2mである。

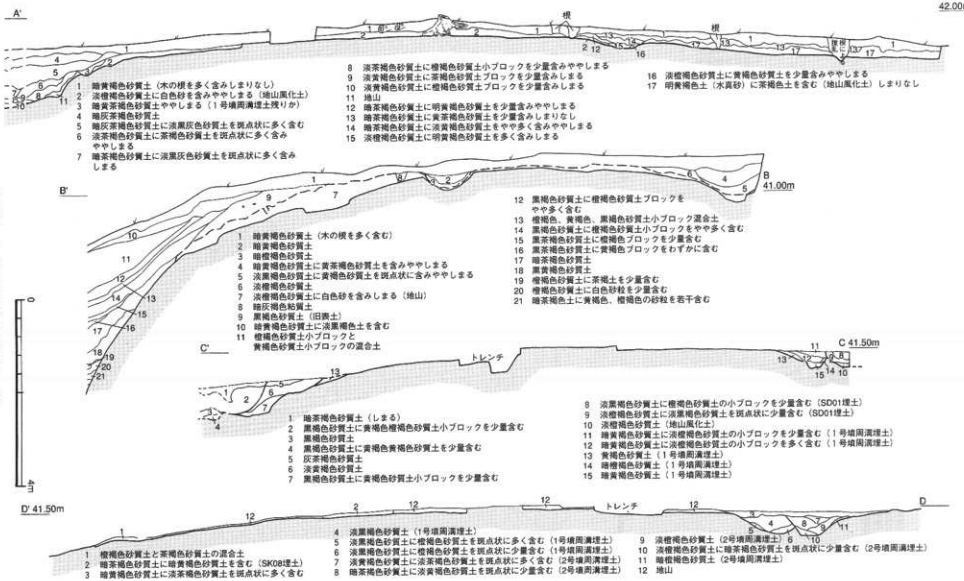
周　溝　　2号墳の検出面は1号墳と3号墳に接する僅かな部分で、残る部分は調査区域外である。盛土部分は1号墳と同様後世の削平により存在しない。

周溝は1号墳の周溝と接する北西側に残り、1号墳の周溝を一部掘り込んで造られたことが判る。南西側は3号墳の周溝により掘削され残存しない。検出面の断面は上幅1.75m、下幅0.5m、深さ0.4mを測り逆台形を呈す。

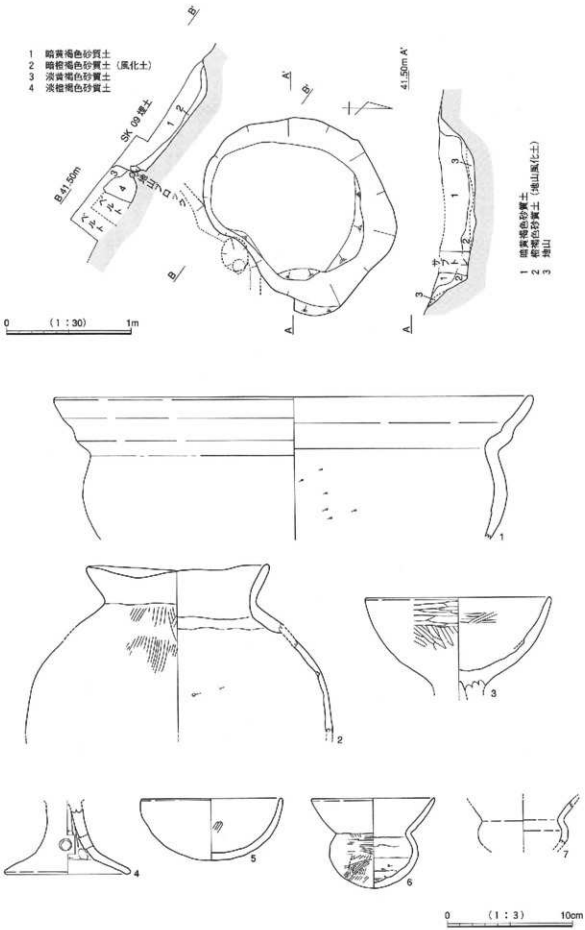
墳　丘　　検出面は一部分であり、墳丘は大半が後世の削平を受けており、地山を掘り込んだ周



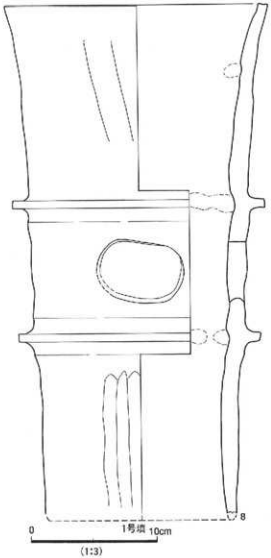
挿図6　1号・2号・3号墳遺構図（1：80）

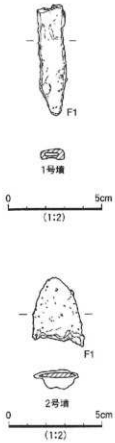


挿図７　１号墳土層断面図（１：80）



挿図8　1号墳主体部遺構図・1号墳出土遺物実測図





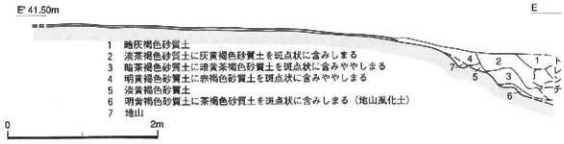
挿図9　1・2号墳出土遺物実測図

溝によりかろうじて墳形を留めているといえる。検出面から平面形を推定するには無理があるが、隣接する1号墳及び3号墳が円墳と考えられ同規模大の円墳であると考える。墳丘構築に盛土が行われたと考えるが、削平により全く残存しない。このため古墳の築造方法は不明である。残存面で墳丘頂部と周溝底面の比高差は0.58mである。

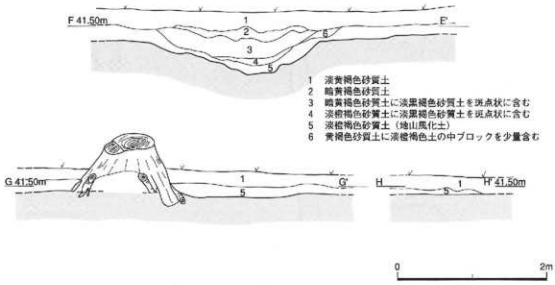
主体部　周溝より墳形、規模を想定すると主体部は調査区域外となる。なお、墳丘地山面に2基の土坑を検出したが堆積土から古墳築造以前の貯蔵穴と考えられる。

遺　物　遺物は土師器小片と周溝内より鉄族が出土した。

時　期　築造時期は周溝切り合い関係により、1号墳より新しく3号墳より古い。古墳時代中期～後期後半の範ちゅうであるが古墳時代中期頃と推測される。



挿図10　2号墳土層断面図（1：50）



挿図11　2号墳土層断面図（1：50）

3号墳（挿図6・12～19、図版7～9・26～29）

位　置　　調査区の東側頂部で丘陵突端に位置し、平坦地の南端から斜面部にかけて立地する。北東側に1号墳、東側に2号墳がそれぞれ隣接している。標高は墳丘頂部で41.3mを測る。水田との比高差は26.2mである。

周　溝　　墳丘は後世に大きく削平を受けたと考えられ僅かに盛土部分が残る。検出した周溝は1号墳と2号墳に接する部分のみであり、斜面部は元々周溝を巡らさないタイプと考えられる。1号墳と接する断面は上幅2.5m、下幅0.9m、深さ0.6mを測り、2号墳と接する断面は上幅2.0m、下幅1.0m、深さ0.8mを測る。形状はいずれも逆台形を呈している。

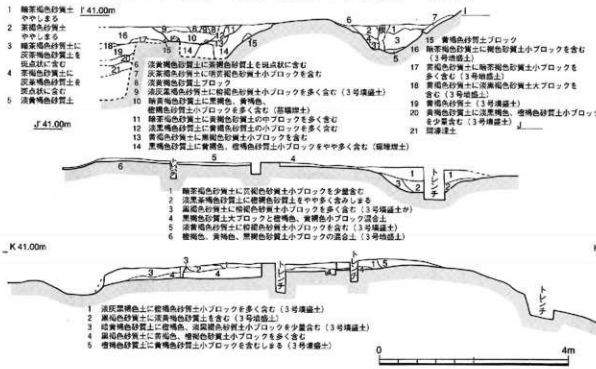
墳　丘　　墳丘の遺存状態は墳丘盛土部分が後世削平され主体部が僅かに残存するのみである。南西側は斜面となっている。総体で墳形をかろうじて留めている。墳丘の築成をみると、1号墳と2号墳に接する北東側の地山は花崗岩風化土（真砂土）であり、北西側は旧表土（黒褐色砂質土）の堆積である。また、南西側は弥生時代の環壕が自然堆積により埋まった状態が築成前の地形である。この上に周辺土で更に埋め上げ北西側と均平にし墳丘基盤面を造成し、その上に盛土による墳丘を築いたと考える。規模は残存面で長辺（北西－南東）9mを測り、墳丘基盤面から推定し径約11m以上の円墳である。残存の墳丘頂部と周溝底面の比高差は0.8m～0.9mである。

主体部　　墳径を11mとすると、中央よりやや北東側へ寄って主体部が構築されている。

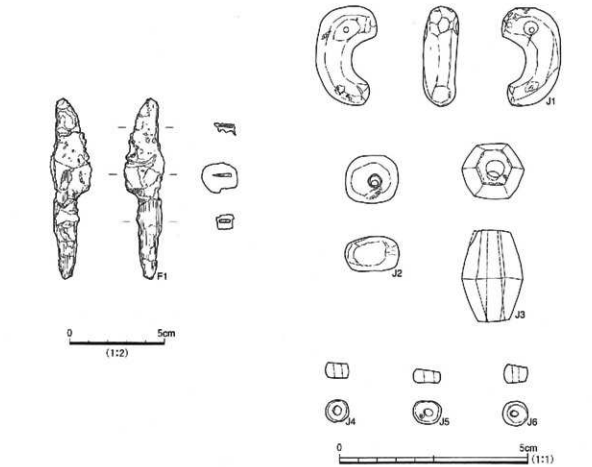
この主体埋葬施設は墳丘盛土の基盤層を掘り込み造られている。上部は後世の掘削により撹乱を受けたと考える。平面形は稍歪な長方形を呈し、規模は残存面で長さ2.44m、幅1.14mを測る。主軸はN－47°－Wを取る。棺部は墓坑掘り方の中央に掘り込まれ長方形を呈す。長さ1.5m、幅0.6m、深さ5～15cmが残る。棺部を囲んで人頭大の石が8個点在し木棺の板組みを固定した石と考えられる。埋土は後世の削平を受けており棺の痕跡は認められなかった。

遺　物　　遺物は高坏・甕・須恵器・めのう製勾玉・小玉・水晶製切子玉・ガラス製小玉・埴輪・刀子が出土した。

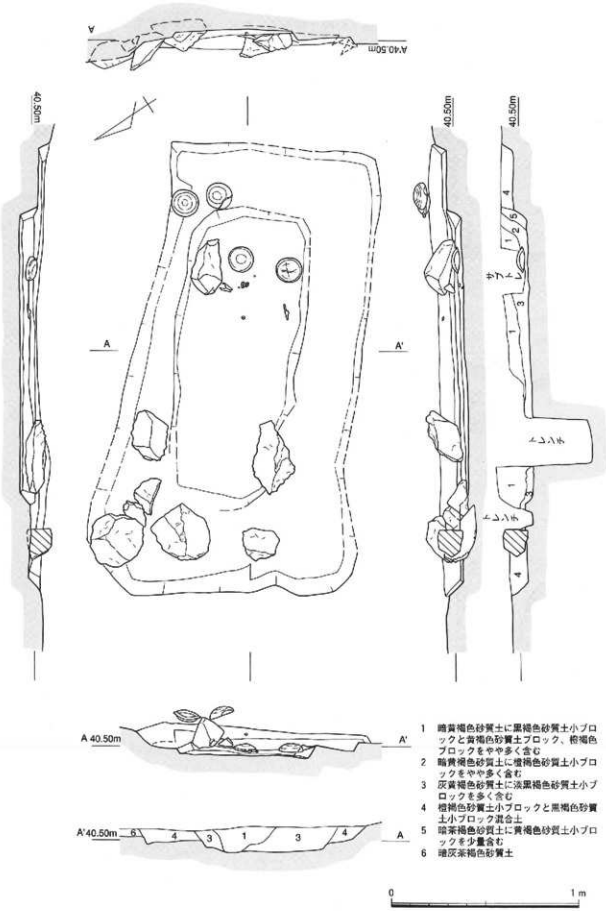
時　期　　築造時期は出土土器より古墳時代後期（6世紀後半）と考える。



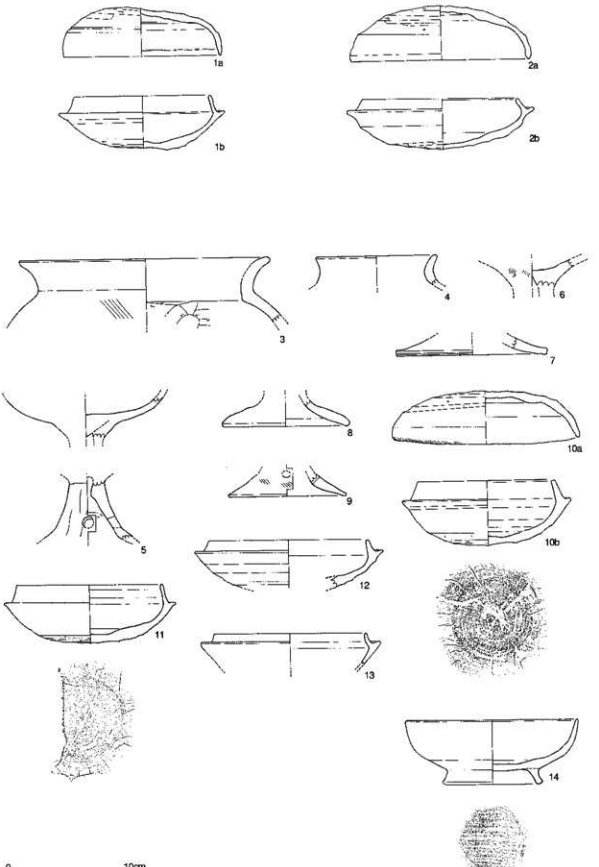
挿図12　3号墳土層断面図（1：80）



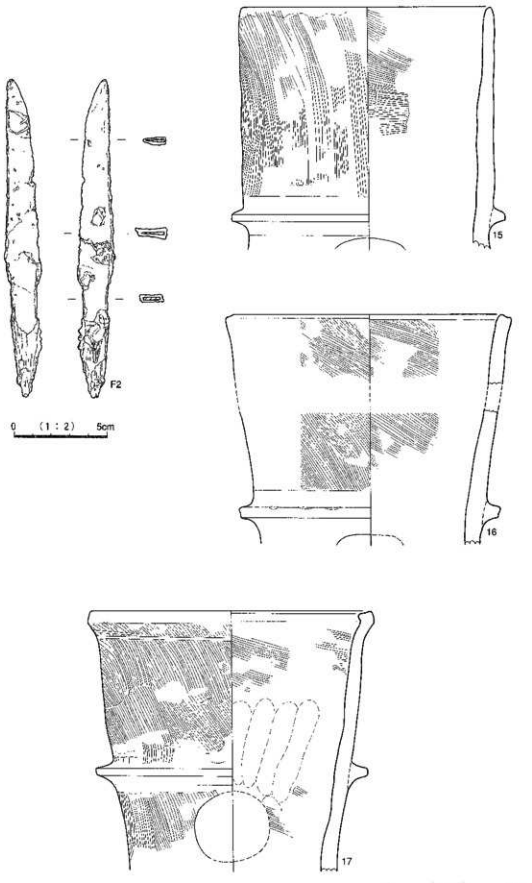
挿図13　3号墳主体部出土遺物実測図（1）



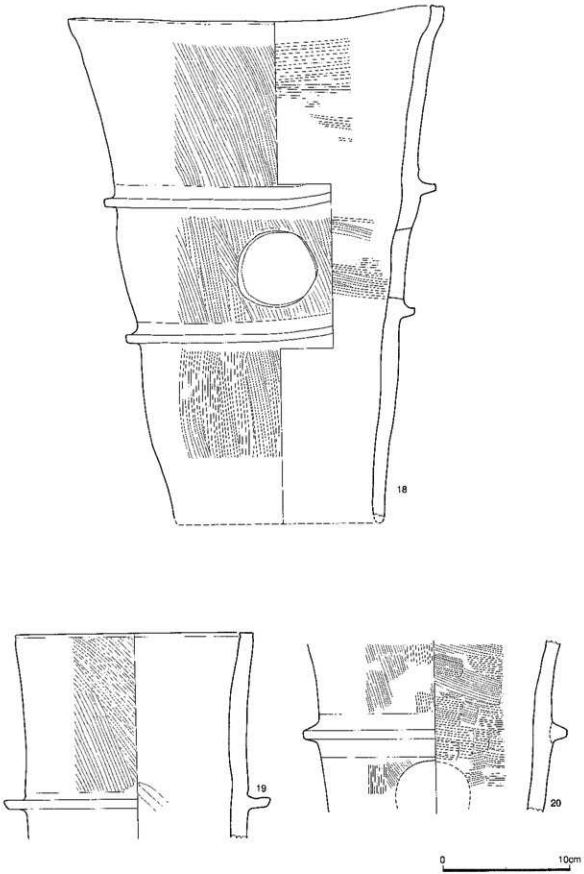
挿図14　3号墳主体部遺物出土状況図・土層断面図（1：20）



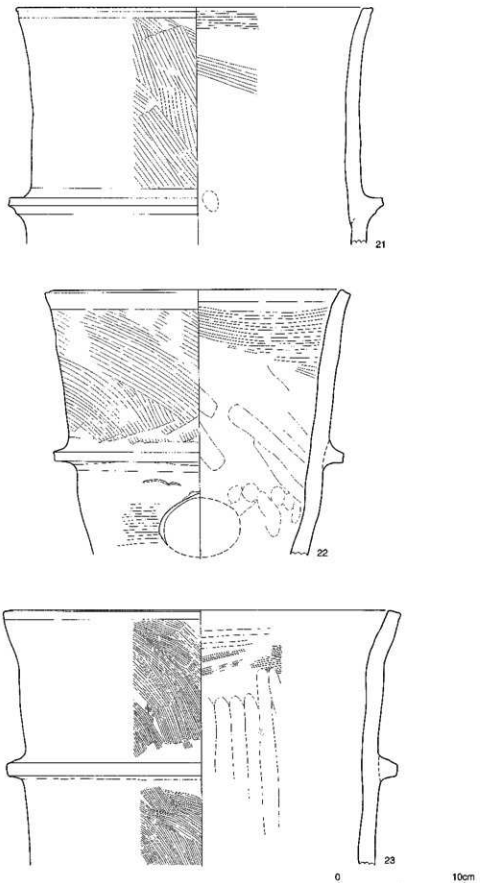
挿図15　3号墳出土遺物実測図（2）（1：3）



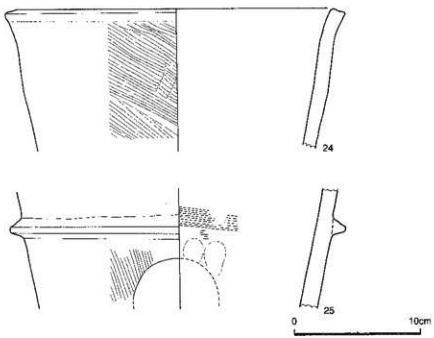
挿図16　3号墳出土遺物実測図（3）



挿図17　3号墳出土遺物実測図（4）（1：3）



挿図18　3号墳出土遺物実測図（5）（1：3）



挿図19　3号墳出土遺物実測図（6）（1：3）

4号墳（挿図20～22、図版10・29）

位　置　　調査区の中央より稍南西側に位置し、緩斜面に立地する。斜面を登ると3号墳が在り水平距離にして約20mである。標高は墳丘頂部で33mを測る。水田との比高差は約18mである。

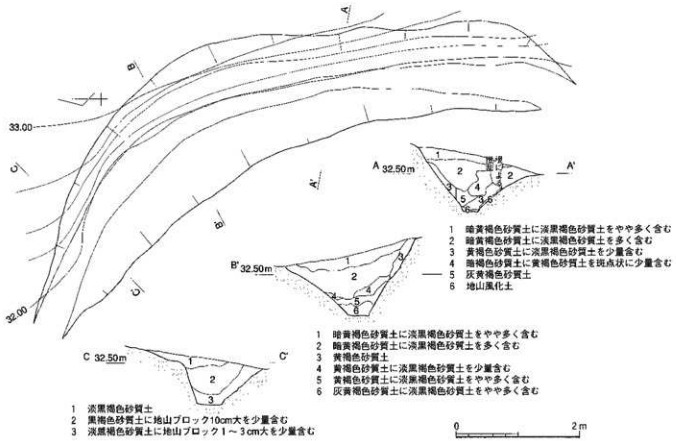
周　溝　　墳丘は後世に大きく削平を受けたと考えられ、盛土部分は存在しないことから、検出した周溝については地山を掘り込んで造られた部分の残りであると考えられる。溝は山側斜面に残り上幅2m、下幅0.35m、深さ1.2mを測る。断面形は逆台形を呈す。検出面は長さ9.0mを測り緩やかな弧を呈している。築造は斜面であり西側は盛土部分となり周溝は存在しなかったと推定される。残存する周溝の両端は流失したと考える。

墳　丘　　墳丘は斜面に立地することから自然流失もあるが、近世から現代に渡る墓地として大半が削平されたと考えられ、残存部分は周溝に囲まれる地山の一部分のみで盛土部分は残存しない。墳丘は周溝によって辛うじて形を残している状態であり主体部は消滅している。残存する周溝より推定すると一辺10m前後の方墳の可能性が考えられる。

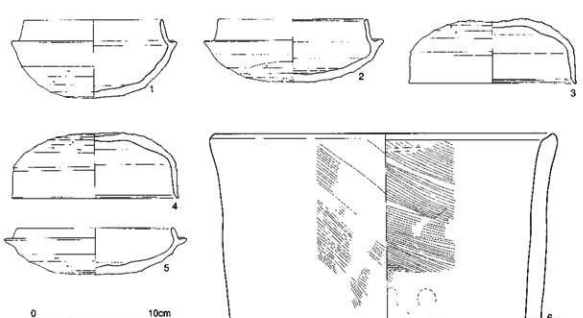
主体部　　削平され、全く確認されなかった。

遺　物　　遺物は周溝内底部直上より須恵器蓋杯が4点出土した。

時　期　　築造時期は出土土器より古墳時代後期（6世紀初頭）と考える。



挿図20　4号墳遺構図（1：60）



挿図21　4号墳出土遺物実測図（1：3）

挿図22　4号墳出土遺物実測図（1：3）

第3節　環壕

第1環壕（挿図23～34、図版2・11～18・30～33）

位　置　　調査区は丘陵支脈の舌状突端部に在る。環壕は標高37m付近で水田との比高差は21.9mであり、突端部斜面の8合目付近に、等高線に沿って鉢巻きを当てたような形で検出された。

なお、本遺構を取り巻く外側の地形を概観すると、内側から南北両側に続く斜面はいずれも急斜面である。環壕に囲まれる頂部平坦地は調査区外となる東側に40m余り続き、幅は30m前後で広い平坦地が存在している。北側斜面は小谷に沿っており、谷の奥部では斜面の法長は短くなるが、南側は連坦地の水田までドる斜面となる。

形　態　　平面形は丘陵突端に沿って弧をなし弓形を呈している。検出面の規模は延長約45mを測る。断面形は大きくはV字形で、最も広い部分で上幅6.1m、底部0.3m、深さ内壁4.2m、外壁1.6m、最も狭い部分で上幅2.8m、底部0.2m、深さ内壁1.8m、外壁0.64mを測る。丘陵上平坦面である環壕内側頂部と環壕底部との比高差は3.34～4.74mを測る。頂部平坦地は古墳の築造、更に後世削平を受けており、環壕内壁部の本来の始まりは不明であるが、環壕内側に設置されていたであろう柵列跡を内側上端付近より検出しており、概ね築造時の位置と考えられる。

各断面の規模について南東側から北東側へ時計回りで追ってみたい。A－A'は上幅2.78m、底幅0.26m、深さ内壁1.8m、外壁0.64m、B－B'は上幅2.8m、底幅0.2m、深さ内壁1.7m、外壁0.8m、C－C'は上幅3.7m、底幅0.34m、深さ内壁2.37m、外壁0.92m、D－D'は上幅3.94m、底幅0.36m、深さ内壁2.16m、外壁1.2m、E－E'は上幅3.64m、底幅0.31m、深さ内壁2.76m、外壁1.44m、F－F'は上幅4.44m、底幅0.3m、深さ内壁3.19m、外壁1.46m、G－G'は上幅6.1m、底幅0.3m、深さ内壁3.64m、外壁1.6m、H－H'は上幅4.4m、底幅0.3m、深さ内壁3.24m、外壁1.4m、I－I'は上幅3.8m、底幅0.27m、深さ内壁2.94m、外壁1.55m、J－J'は上幅3.46m、底幅0.56m、深さ内壁2.43m、外壁0.18m、K－K'は上幅5.8m、底幅0.2m、深さ内壁3.38m、外壁1.3mを測る。

北寄り土層断面J－J'の位置には土橋と考える地山面を検出した。土橋は盛土ではなく地山掘り出しで両側を溝として掘り下げ、土橋状に残した所であり、意図的に選定されたものと考えられる。規模は裾幅となる両溝底部突当間で3.25m、上幅は2.2m、高さは溝底部より0.95m、長さは外壁から内壁の間で3.15mを測るが、風化及び木根等により攪乱を受け明瞭ではなく、築造時の状態を知ることはできない。環壕は土橋より南西側と北東側に分かれることになる。土橋は溝を横断するように在り、前後の踏線については環壕内側となる上部へは内壁法面を斜めに上ると思われるが、十質が火山灰土（通称ミズマサ）と花崗岩風化土（真砂土）の地源状となり、風化が大きく道を確認することができなかった。しかし内壁上端付近に検出した柵列の並び等から道が存在したことが窺える。外壁より下る踏線については地山の風化及び木根等による攪乱により検

出できなかった。加えて西側はSI－01により外縁が一部切り込まれており、築造時の形状を窺うことはできなかった。

埋　土　　環壕が掘り込まれた基盤（地山）は土橋あたりを境として南側へは花崗岩風化土、北側へは火山灰土層となり堆積土の質を異にするが、環壕埋土は総体同様の堆積形態を呈し、4層に大別できる。底部に堆積する最下層第4層は環壕開削後早い段階に環壕としての機能は薄れ、人為的に埋め込まれたと考えられる。埋土は締っていることから通路として利用された可能性も考えられる。第3層は長期間にわたって堆積したと考えられ、環壕としての機能は薄れたことが窺える。堆積土は黒色火山灰土（通称クロボク）を主体としており、環壕内側上部より流入堆積したと考えられる。第2層は頂部の古墳築造に伴うものと考えられ、掘削排土及び造成用埋土層で、地山ブロック等を含んでいる。第1層は古墳築造後時代を経て頂部を大規模に削平造成したと考えられる覆土である。

構　築　　本遺構の底部は0.2～0.36mと幅は狭く、概ね等高線上にあり標高を見るとA－A'は38.16m、B－B'は38.02m、C－C'は37.96m、D－D'は38.05m、E－E'は37.74m、F－F'は37.41m、G－G'は36.76m、H－H'は37.12m、I－I'は37.11m、J－J'は38.07m、K－K'は37.30mを測り、最高値・最低値の比高差は1.4mとなる。遺構は斜面に掘り込まれ、背面となる内壁は前面となる外壁に比べ高さが2倍強である。法面勾配は総体内壁は46°前後、外壁は36°前後となる。本遺構を構成する土質を見ると大半が花崗岩風化土（真砂土）で一部大山松江軽石（火山灰土層）であり、いずれも風化が著しく掘削加工痕は確認できなかった。また、土層断面J－J'に位置する土橋は溝を横断し、地山を掘り残して土橋としており、当初から計画的に選定した位置であったと考えられるが、前後の遺は確認できなかった。なお、本遺構を開削した排土は内外壁として積み上げ利用したのか等、如何なる処理をしたのか確認することはできなかった。

出土遺物　　遺物は各土層より出土しているが、大別する4層の内第1層は古墳築造以降の堆積土であり、弥生土器片・土師器片・埴輪片が出土し、第2層は古墳築造時の掘削排土であり、弥生土器片・礫が出土している。いずれも弥生時代以降の堆積土である。第3層・第4層は環壕築造以降の堆積土であり、礫・壷・甕・高坏・鉢・把手などが出土している。

第4層（最下層）出土遺物は南東側から北東側に至る広範に点在しているが、点数は少ない。土層断面G－G'でみると、T_1層（12～14層）T_2層（15～17層）の橙褐色砂質土を主とする層位に位置する。環壕全域では、T_1層挿図32－1甕、－2底部、－3高坏及びT_2層挿図32－1壺、－2．－3甕、－4底部の計7点で、何れも弥生土器の破片である。T_1層甕1は口縁小片で、頸部下にヘラ描き直線文2条以上を施し、調整はヨコナデとヘラミガキである。底部2は摩滅により内面調整は不明、外面は粗いナデとヘラミガキを施す。高坏3は、外面脚端部に強いナデによる段をもち、円形の透かし3ヶ所を残す。T_2層壺1は頸部の破片で、調整はハケメ6条/cmとヘラミガキである。甕2は口縁部で、端部に刻み目を施す。調整は不明である。甕3は、逆L字状口縁で端部に突帯を貼り付け、強く屈折する。底部4は、内外面ナデ調整である。礫は36

個が出土し、分類すると川原石の礫が9個（重量最大で1.57kg・最小0.74kg）及び自然石の礫が27個（重量最大で4.57kg・最小0.27kg）に別れる。いずれも硬度を保っており、加工痕跡等は無く防御用の飛礫石と思われる。

第3層（黒色土層）出土遺物は南東側から北東側にわたって全域で出土したがA－A'～C－C'までの間は比較的少なくC－C'～K－K'の間が多い。土層断面G－G'で見ると、B$_1$層（9．10層）B$_2$層（11層）の黒色土層に位置する。環壕全域では、B$_1$層掘図30－1広口壺、－2～－8甕、－9～－11底部、－12甑把手、B$_2$層掘図30～32－2．－3．－7壺、－4．－6広口壺、－5無頸壺、－1．－8～－14甕、－15～－22底部、－23高坏で、何れも弥生土器の破片である。B$_1$層を見ると、広口壺1は口縁端面に鋸歯文、内面に櫛描直線文6条以上を施し、一部その上から櫛描波状文を施す。縦穴と思われる円孔を穿つ。甕2は、逆L字状口縁で端部に突帯を貼り付け強く屈折する。甕3は、口縁は緩く外反し、端部に刻み目を施す。甕4．5は、口縁端部に凹線4条を施す。甕6は、縁口端部に凹線3条、胴部に櫛条工具による連続刺突文を施す。甕7．8は口縁端部にそれぞれ凹線5条3条を施す。甕12は把手部でヘラケズリを施す。B2層を見ると、甕1は逆L字状口縁で端部に突帯を貼り付け強く屈折する。長頸壺2は、頸部に8条以上のヘラ描直線文を巡らす。長頸壺3は、頸部～胴部に多条の櫛描直線文、刺突文、櫛描波状文、刺突文と、上から下に交互に施す。広口壺4は口縁端部外面にヘラ描斜格子文、頸部に多条の櫛描直線文、櫛描波状文を巡らす。無頸壺5は口縁部に3条の凹線文、穿孔2ヶ所口縁部に凹線1条、肩部に二段の櫛状工具による刺突文を巡らす。広口壺6は口縁下端に垂直する稜を持つ。壺7は、口縁端部に凹線2条を施す。甕8は、口縁端面にヘラ描沈線文で1条を施す。甕9は、逆L字状口縁で、貼り付け突帯上に刻み目、頸部にヘラ描直線文6条、刺突文を巡らす。鉢10は口縁端部に刻み目、頸部にヘラ描直線文16条と三角形刺突文を巡らす。鉢11は、口縁を逆L字状に強く屈折する。甕12は、口縁端部に凹線4条以上を施す。甕14は、口縁端部に凹線2～3条、頸部に櫛状工具による刺突文を施す。高坏23は、口縁端部上面に凹線3条を施す。礫は145個が出土し、分類すると川原石の礫が31個（重量最大で4.27kg・最小0.46kg）及び自然石の礫が114個（重量最大で6.45kg・最小0.49kg）に別れる。いずれも硬度を保っており、加工痕跡等は無く防御用の飛礫石と思われる。

時　期　本遺構下層出土遺物は特徴から弥生時代前期末～中期前半、上層出土遺物は前期末～後期前半のものと考えられ、本遺構は弥生時代前期末に開削され存続期間は中期前半までと考えられる。比較的早い段階に環壕の機能が薄れて第4層は埋め込まれ、以後は自然堆積で、弥生時代後期前半までには完全に埋まりきらず、窪地として痕跡が残っていたと推定される。

環壕内側となる丘陵頂部平坦面

環壕内側となる丘陵頂部の検出面形は下弦の月を表している。検出面の長軸方向約28m、短軸方向約12m、平面積は環壕掘り込み法面天端を区切りとして約300㎡となる。この平坦面には検出結果より変遷を窺うことができる。環壕築造の弥生時代の上に古墳の築造を行い、更に後世大規模な平坦面の造成が行われており、環壕に関する弥生時代

の遺構遺物の残る面は僅かとなっている。

遺　構　ここでは環壕に伴うものと思われる柵列跡・土坑・環壕開削以前の旧表土について取り扱う。

柵列跡（挿図23）は環壕内側法面天端に沿うように在る。小柱穴が5本の列、8本の列、2本の列と3列が残るが、環壕内の施設として柵が造られたと考えられる。土坑は頂部平坦面にあるSK－02.03.05.06.07.09.10の7基であり何れも後世の撹乱により残存部は僅かであるが、環壕内に造られた貯蔵穴と考えたい。環壕開削以前の旧表土は内側先端付近に僅かに残存する黒色土層であり、環壕開削により切り込まれたことが判る。旧表土には古墳築造及び後世大規模に行われたと思われる平坦面造成により、ほとんどが削平されたと考えられる。

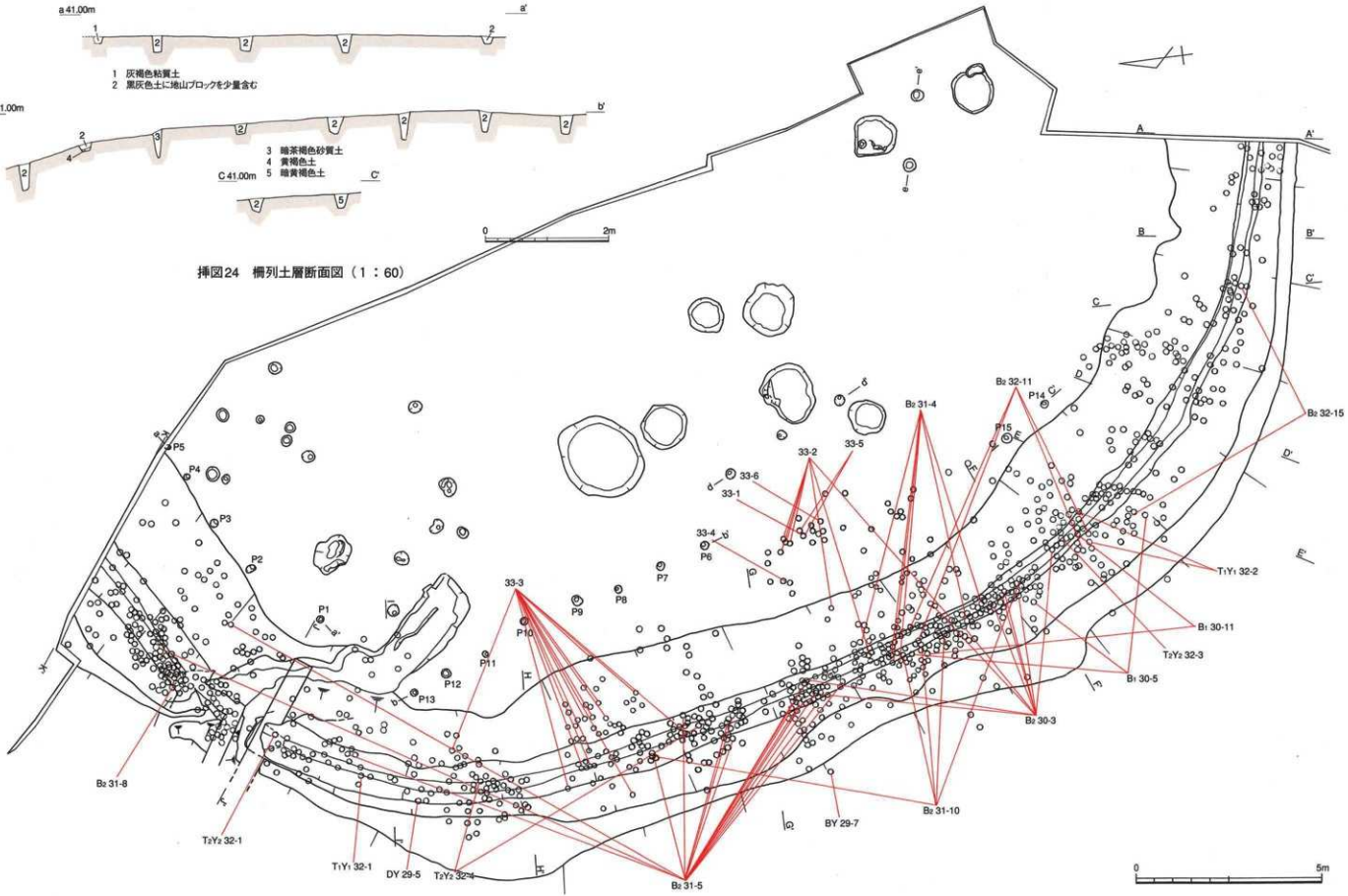
遺　物　柵列跡に伴う遺物は出土していない。環壕開削以前の旧表土中から甕2・3（挿図33）が出土している。甕2は口縁部で淡茶色～黒褐色を呈し、外面はヨコナデ・指頭圧痕・ヨコハケメ5条／cm・タテヘラミガキあり。甕3は5割の残存で淡茶色～黒褐色を呈し、口縁端部に刻み目を施す。

これらの出土遺物は弥生時代前期末頃のものと考えられた。また甕2．3は環壕堆積層を大別した第3層中より出土の土器片と同体として各接合でき、環壕を考える資料である。

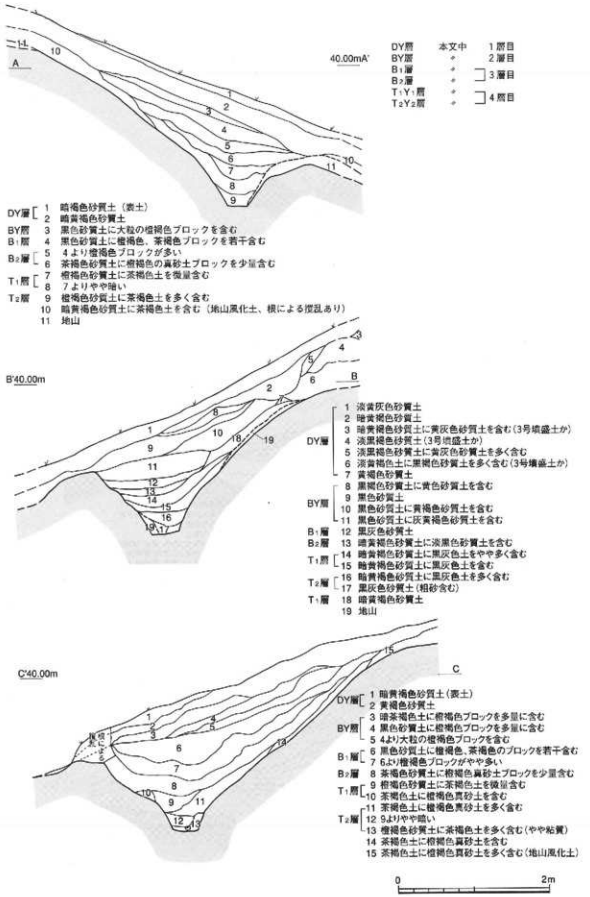
環壕の広がり（調査区外）について

本発掘調査事業終了以降、他の発掘調査事業で環壕の範囲確認調査が実施され、結果5ヶ所のトレンチから環壕と考える遺構面が確認されている。本発掘調査で確認された北東端より奥へ向かって約6.4m、22m、32.4m、45.7mの地点で検出し、南東端より奥へ向かって約9mの地点でも検出しており、本調査区域の奥に広がる平坦面を環壕が囲んでいると思われる。なお、確認調査の結果報告については本書での扱いではないので後日を待ちたい。

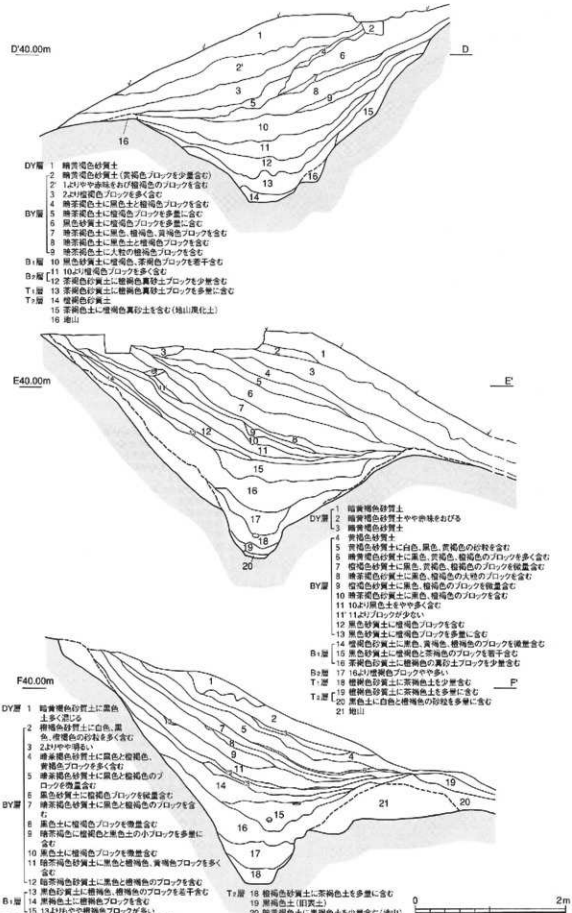
挿図24　柵列土層断面図（1：60）



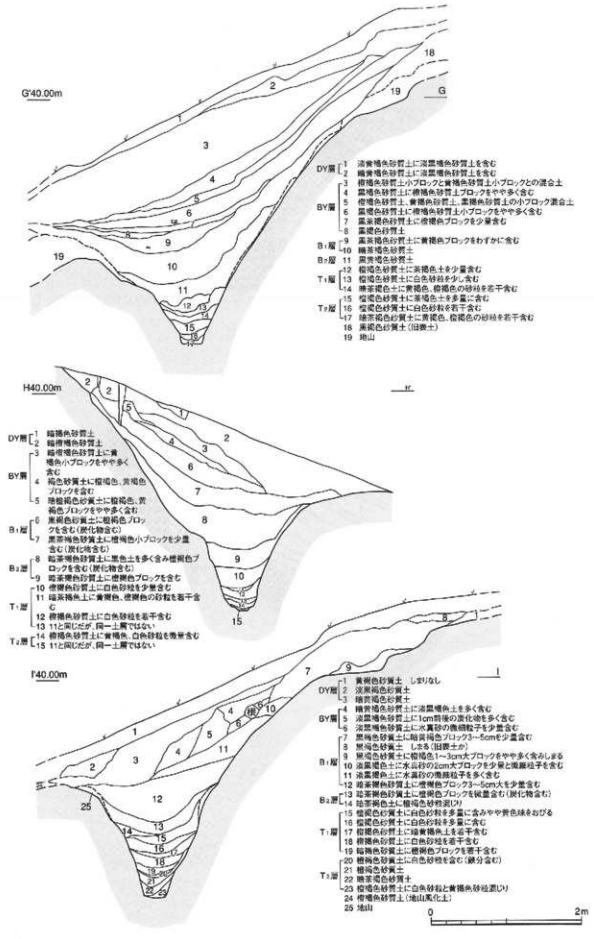
挿図23　環壕遺構図・遺物出土分布図・柵列跡遺構図（1：100）



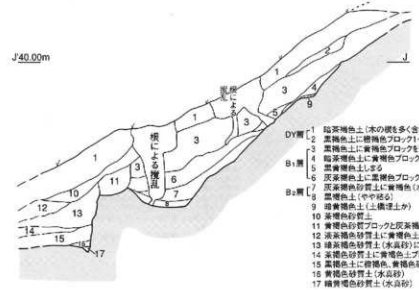
挿図25　環壕土層断面図（1）（1：50）

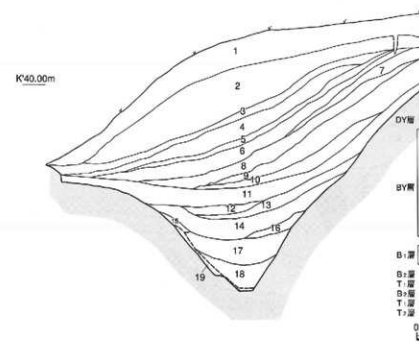


挿図26　環壕土層断面図（2）（1：50）

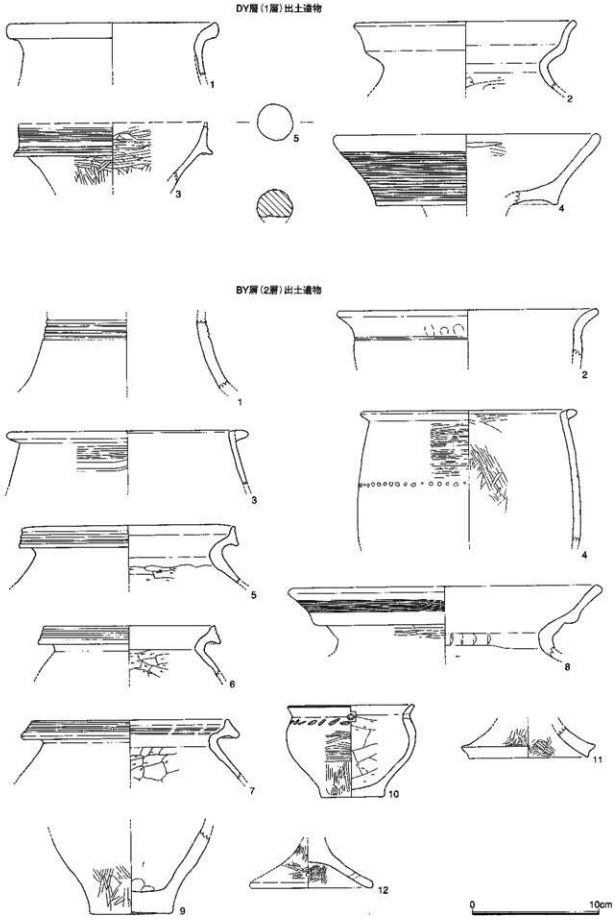


挿図27　環壕土層断面図（3）（1：50）

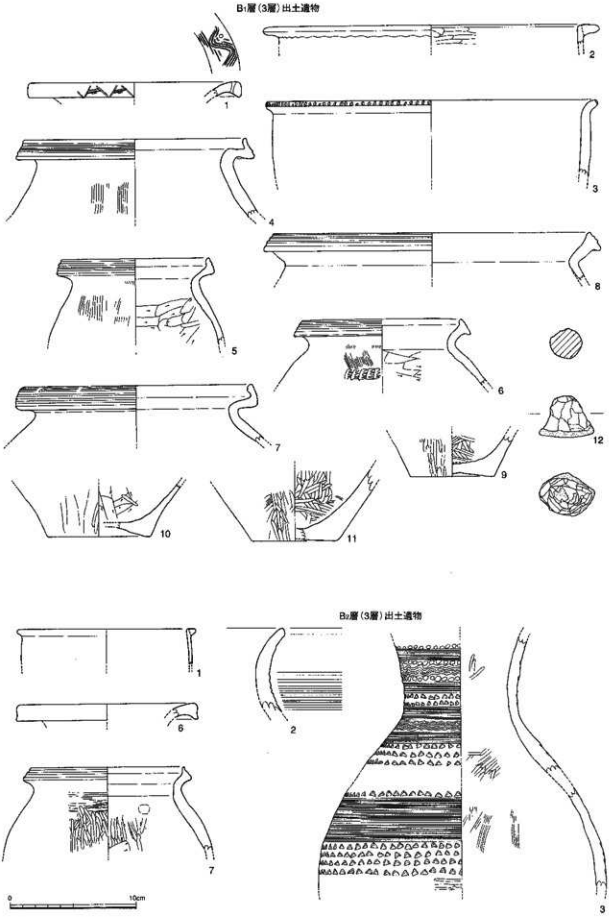




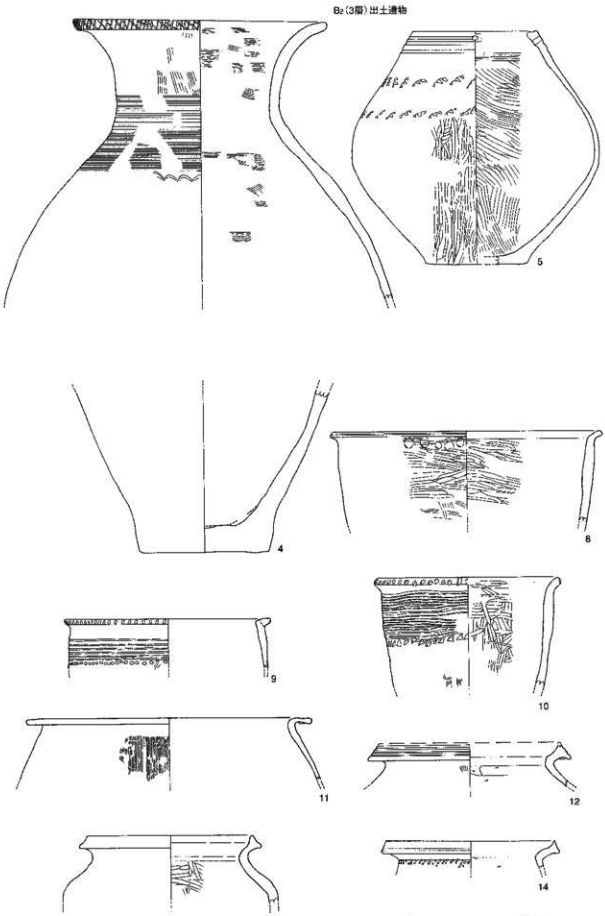
挿図28　環壕土層断面図（4）（1：50）



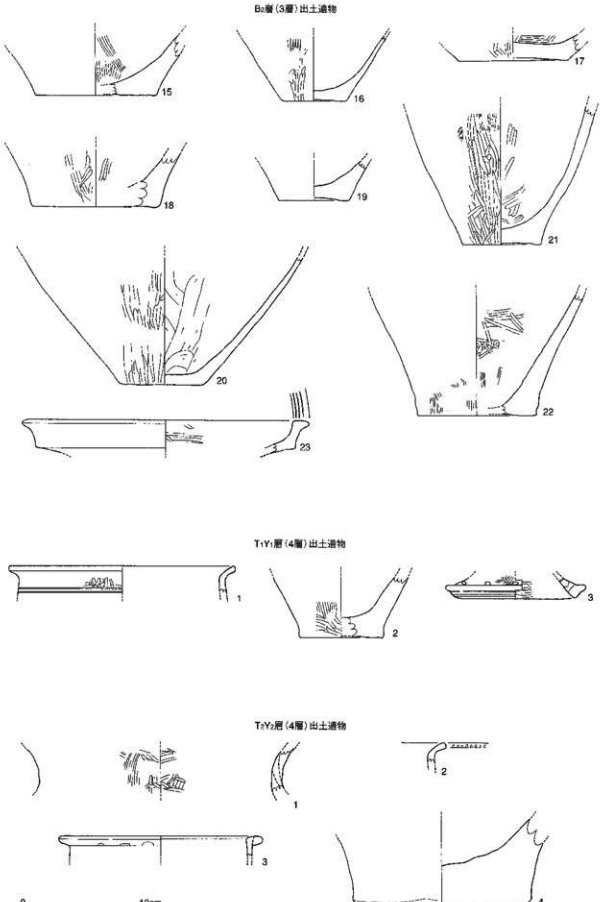
挿図29　環壕ＤＹ層ＢＹ層出土遺物実測図（1）（1：3）



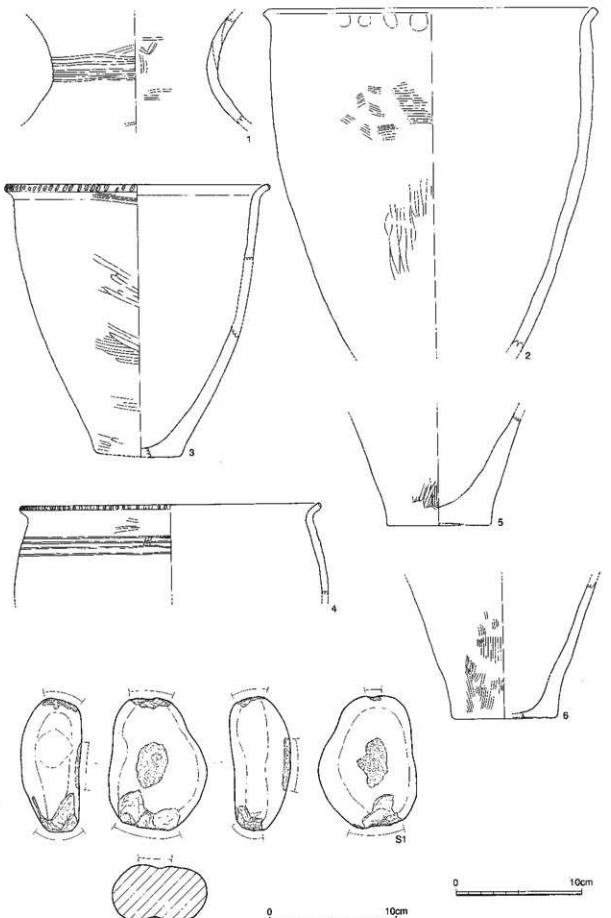
挿図30　環壕B₁層B₂層出土遺物実測図（2）（1：3）



挿図31　環壕B2層出土遺物実測図（3）（1：3）



挿図32　環壕B₂層T₁Y₁層T₂Y₂層出土遺物実測図（4）（1：3）



挿図34　旧表土中出土遺物実測図（１：３）　　挿図33　旧表土中出土遺物実測図（１：３）

第4節　柵列跡

柵列跡（挿図23・24）

位　置　　調査区東傾頂部平坦地の南西側先端から北西傾先端付近に位置し、環壕の内傾法面上端肩部に立地する。検出面の標高は40.1m～41mを測る。柵列は3ヶ所に跨るが一連のものとし扱う。

形　態　　北西側に並ぶ小柱穴が5本検出された。規模はそれぞれP1（19×14－13）cm、P2（25×20－23）cm、P3（23×23…26）cm、P4（15×14－25）cm、P5（15×－15）cmで、柱穴間の距離はP1～P2で2.4m、P2～P3で1.6m、P3～P4で1.4m、P4～P5で0.95mを測り、環壕内傾斜面上端に沿っている。埋土はいずれの柱穴も単層である。

西側に並ぶ小柱穴が8本検出された。規模はそれぞれP6（22×18－33）cm、P7（22×21－32）cm、P8（17×14－42）cm、P9（26×22－29）cm、P10（20×18－18）cm　P11（15×13－38）cm、P12（20×19－16）cm、P13（18×15－37）cmで、柱穴間の距離はP6～P7で1.3m、P7～P8で1.3m、P8～P9で1.1m、P9～P10で1.5m、　P10～P11で1.35m、P11～P12で1.15m、P12～P13で1.0mを測り、環壕内傾斜面延長上と頂部平坦地の肩部に在る。埋土はいずれの柱穴も単層である。

南西側に並ぶ小柱穴が2本検出された。規模はそれぞれP14（22×17－25）cm、P15（24×22－20）cmで、柱穴間距離は1.35mを測り、環壕内傾斜面上端に沿っている。埋土はいずれの柱穴も単層である。

小柱穴はいずれも環壕と平行し存在しており、環壕と一体を成す一連の柵であると考えられ、環壕が造られた時点では柵列は連なり、頂部を囲んでいたと考えられる。

時　期　　遺物は検出しなかったが、環壕と同じ弥生時代前期末から中期前半と考えられる。

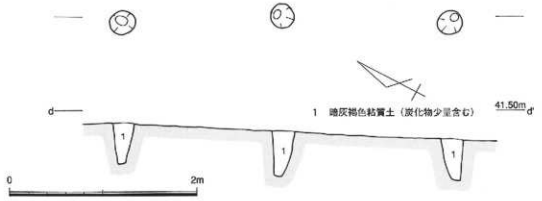
第5節　柱穴列

第1柱穴列（挿図35）

位　置　　調査区の東側頂部に位置し、1号墳の地山残丘となる平坦面に立地する。検出面の標高は41.4～41.2mを測る。

形　態　　P1・P2・P3が直列しており、これに対応する柱穴は確認されなかったが、柱の配置は長方形を呈すると推定される。桁行2間（3.59m）、梁間及び床面積は不明で、主軸はN－29°－Wをとる堀立柱建物跡であると考える。検出した柱穴は3本で、規模はP1（27×26－44）cm、P2（26×24－48）cm、P3（28×25－44）cm、柱穴間の距離はP1～P2で1.89m、P2～P3で1.70mを測る。埋土はいずれの柱穴も単層である。

時　期　　遺物は出土しなかったが、環壕に伴う遺構と考える。

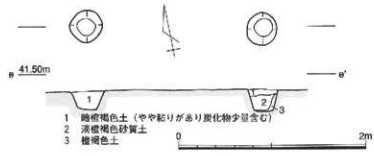


挿図35　第1柱穴列遺構図（1：40）

第2柱穴列（挿図36）

位　置　　調査区の東側頂部に位置し、2号墳の地山残丘となる平坦面に立地する。検出面の標高は41.3mを測る。

形　態　　P1・P2が列び、これに対応する柱穴は確認されず、東から南東側は調査区外となり、柱穴の存在を確認できなかった。主軸をN－77°－Wをとる堀立柱建物跡と考えられるが、桁行、梁間等は不明である。検出した柱穴は2本で、規模はP1（35×31－25）cm、



挿図36　第2柱穴列遺構図（1：40）

P2（35×33－20）cm、柱穴間の距離は1.92mを測る。埋土はいずれの柱穴も単層である。

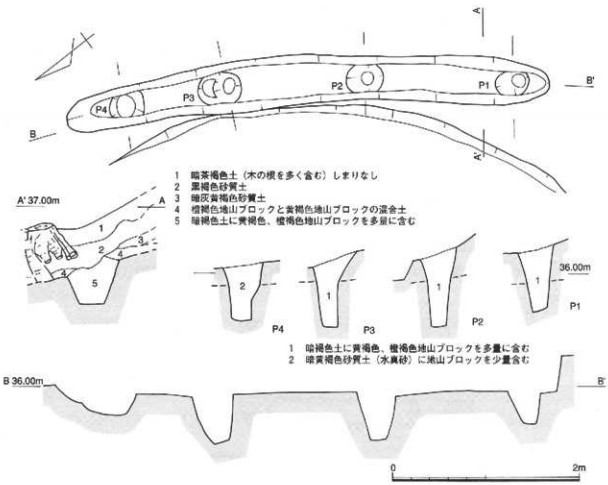
時　期　　遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、環壕築造時の遺構と考える。

第3柱穴列（挿図37、図版25）

位　置　　調査区の北側に位置し、北西向きの緩斜面に立地する。南東側に約40cmの間隔をおいてSD－04・SD－05がある。検出面の標高は36.4mを測る。

形　態　　僅かに弧を描く幅の狭い溝の中に柱穴が4本間隔をおいて溝と軸を同じくして列んでおり、溝の主軸はN－32°－Eをとる。溝及び柱穴は本来北西側に平行していたと考えられるが、後世の掘削により消滅したと考えられ、検出できなかった。布掘りの溝から壁立建物が存在したと思われる。溝は幅0.55m～0.42m、深さ0.2～0.4mを測る。柱穴はP1（36×24－70）cm、P2（41×29－84）cm、P3（47×33－70）cm、P4（38×24－59）cmを測る。柱穴間の距離はP1～P2で1.6m、P2～P3で1.5m、P3～P4で1.15mを測る。埋土は溝・柱穴とも地山ブロック混じりの単層である。

時　期　　遺物は全く出土しなかったため、時期は明確にできないが隣接の遺構などから弥生時代後期の遺構であると考えられる。



挿図37　第3柱穴列遺構図（1：40）

第6節　柱穴群

第1柱穴群（挿図38）

位　置　　調査区の東側頂部に位置し、北側平坦面に立地する。南側には1号墳が接し、標高約41mを測る。

形　態　　丘陵頂部突端で環濠内側に存在した建物跡であると思われる。後世更に削平を受けたと考えられ、残存する柱穴の深さは30cm前後と浅くなっている。規模はP1（27×24－31）cm、P2（32×16－15）cm、P3（17×16－15）cm、P4（28×24－29）cm、P5（27×20－27）cm、P6（40×26－48）cm、P7（30×24－28）cm、P8（22×18－25）cm、P9（36×27－15）cm、P10（50×22－23）cm、P11（36×34－19）cm、P12（40×32－18）cm、P13（38×25－38）cm、P14（26×20－14）mである。

建物跡　　柱穴の配置から2棟の掘立柱による建物が存在したことが想定される。第1棟は方形を呈し桁行1間（1.85m）×梁間1間（1.64m）、床面積は推定3㎡を測り、主軸N－17°－Eをとる掘立柱建物であると推定される。検出された柱穴は3本で、柱穴間距離はP9～P2で1.64m、P2～P4で1.85mを測る。第2棟は稍歪な方形を呈し桁行1間（1.84m）×梁間1間（1.70m）床面積は推定31㎡を測り、主軸はN－54°－Wをとる掘立柱建物であると推定される。検出された柱穴は4本で柱穴間距離はP8～P3で1.84m、P3～P5で0.92m、P5～P7で0.78mを測る。

遺　物　　表土及び表土ドより弥生土器小片・土師器小片が出土した。

時　期　　出土した土器片は小片であるため、時期は不明であるが、環濠に伴う遺構と考える。

第2柱穴群（挿図39）

位　置　　調査区の北側に位置し、SI－01の西側前面で僅かに下った平坦面でSI－02の上面に立地する。検出面は緩やかな傾斜面であり、標高は約36m～36.8mを測る。

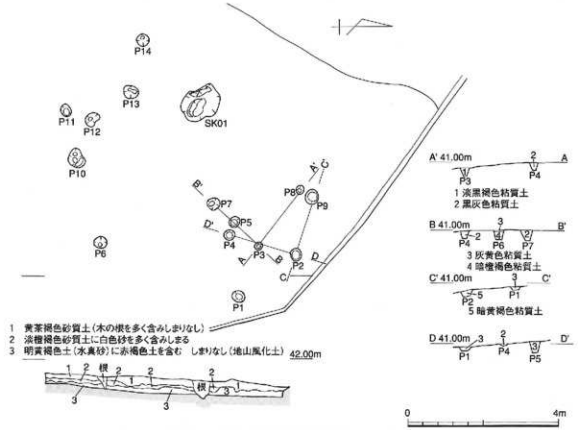
形　態　　北西に流れる緩やかな斜面である。SI－02上面及び付近は堆積土から湿立が守われたことが判り、元は平坦面が造成されていたと思われる。後世流失や掘削を受けたと考えられ、斜面下側に位置する柱穴は浅くなり、柱穴底面の標高は35.3m～35.5mと大差はない。規模はP1（16×16－14）cm、P2（23×22－12）cm、P3（29×29－21）cm、P4（34×31－25）cm、P5（21×20－20）cm、P6（26×26－23）cm、P7（26×22－32）cm、P8（40×32－14）cm、P9（32×29－21）cm、P10（28×26－45）cm、P11（22×22－45）cm、P12（24×22－25）cm、P13（24×22－23）cm、P14（17×15－16）cm、P15（30×30－45）cm、P16（36×27－27）cm、P17（22×20－20）cm、P18（33×26－30）cm、P19（23×　－21）cm、P20（30×29－29）cm、P21（48×46－50）cm、P22（38×34－50）cm、P23（30×28－30）cmである。

建物跡　　検出の柱穴数からして建物が存在すると想定されたが、柱穴の配置から建物跡を推定

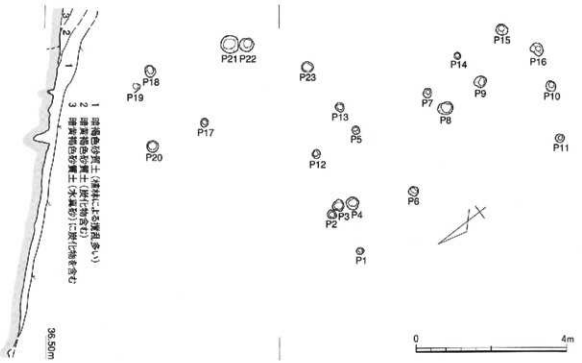
することはできなかった。

遺　物　　埋土中より弥生土器・土師器・須恵器などが出土している。

時　期　　遺物はいずれも埋土混入のものであり、時期を特定することはできず、不明である。



挿図38　第１柱穴群遺構図（１：100）



挿図39　第２柱穴群遺構図（1:100）

第７節　竪穴住居跡

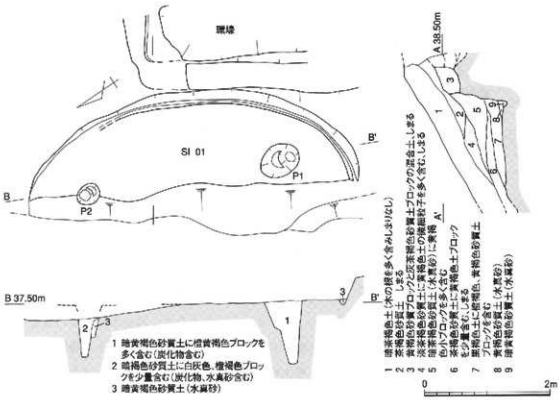
第１竪穴住居跡（ＳＩ－01、挿図40～42、図版18・33）

位　置　　調査区の北側に位置し、環壕の上橋への入口付近に立地している。壁体は環壕外壁の一部を掘り込んでいる。床面の標高は約37.5ｍで水田との比高差は約22ｍである。

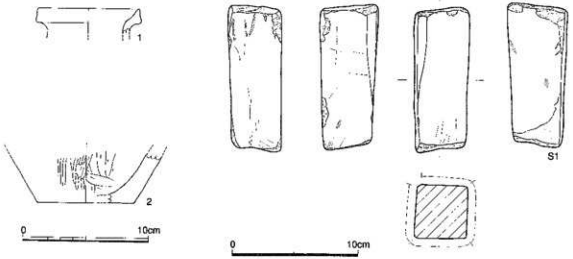
形　態　　本遺構は花崗岩風化土（真砂土）と火山灰土（ミズマサ）が接した地脈上に掘り込まれている。平面形は残存部で長辺5.3ｍ、短辺1.5ｍを測り円形を呈すと推定される。残存する床面は長辺5.2ｍ、短辺1.4ｍ、面積7.28㎡を測る。最大残存壁高は東側で0.89ｍである。残存部より想定する平面形は径5.5ｍの円形と考えられる。柱穴は床面より２本が検出された。規模はＰ１（65×50－80）cm、Ｐ２（40×35－65）cmで柱穴間距離は3.3ｍを測る。柱穴埋土はＰ１が暗黄褐色砂質土に橙黄褐色ブロックを多く含み炭化物も含む、Ｐ２は暗褐色砂質土に白灰色・橙褐色ブロックを含み炭化物も少量含む（ミズマサ混じり）である。柱穴配置から４本柱構成と推定される。壁体溝の規模は長さ4.2ｍ、幅10cm、深さ6cmを測り断面はＵ字形を呈する。

遺　物　　埋土中より壺口縁部・底部・砥石が出土した。

時　期　　床面より遺物は出土していないが、埋土中出土遺物は弥生後期前半であり、あまり時期差はないと考えられる。



挿図40　第１竪穴住居跡遺構図（１：60）



挿図41　第1竪穴住居跡出土遺物実測図（1：3）　　挿図42　第1竪穴住居跡出土遺物実測図（1：3）

第2竪穴住居跡（SI－02、挿図43・44、図版19・33）

位　置　　調査区の北側に位置し、SI－01より北西側へ僅かに下った緩斜面に立地する。床面平均標高は約35.2mである。

形　態　　本遺構は基盤岩花崗岩風化土（真砂土）と火山灰土（ミズマサ）が接した地脈上に掘り込まれている。平面形は円形を呈し西壁から北壁にかけて流失している。上面規模は長辺（北－南）7.24m、短辺（推定南東－北西）6.7mを測る。床面は概ね平坦で、床面形態は北東側がやや隅丸形状を呈し、長辺（北東－南西）6.8m、短辺（推定南東－北西）6.4mを測り推定床面積は41.1㎡、検出床面積38㎡である。壁高は南東側で最高84cm、北西側は流失により存在しない。なお、山側には側壁より0.5m程の距離で弧状の溝を巡らせている。

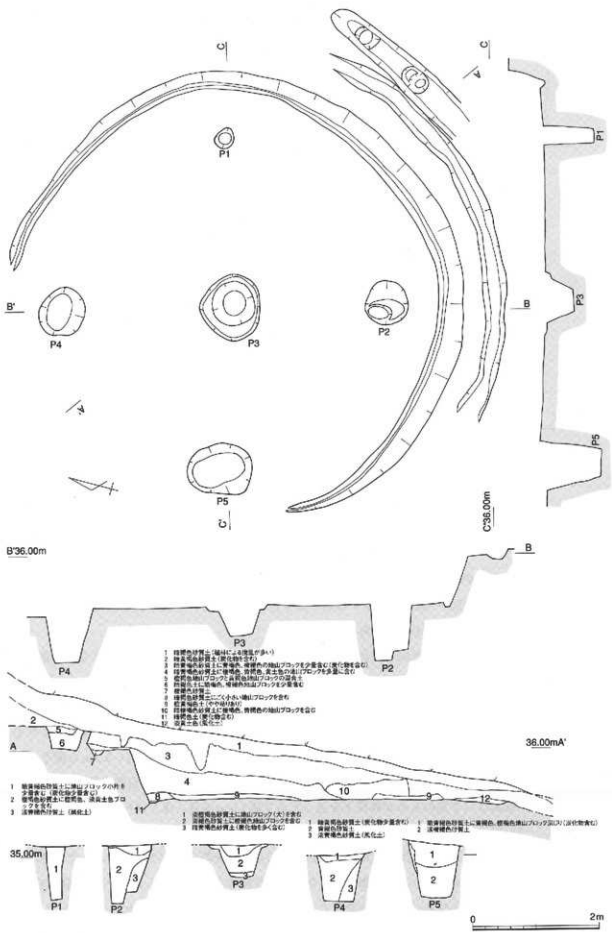
側　溝　　側溝は北西側を欠損するが、側壁下を全周していたと思われる。断面はU字形を呈している。最大幅は18cm、最深部は北西側で10cmを測る。

主柱穴　　主柱穴は4本が検出された。四角形の配置をとる。規模はP1（28×33－84）cm、P2（68×72－94）cm、P3（96×105－50）cm、P4（72×80－72）cm、P5（72×104－85）cmを測るがP1は他の柱穴に比べ径は小さいが深さは大差なく柱材の質または状態の違いによるものと考える。P4は地山が火山灰の堆積土であり土質が軟らかく柱穴の広がりを見ると考える。P5は更に大きく補強用の添柱及び取替などにより拡張されたとも考えられる。主柱穴間距離はP1～P2で3.75m、P2～P5で3.56m、P5～P4で3.65m、P4～P1で3.75mを測る。

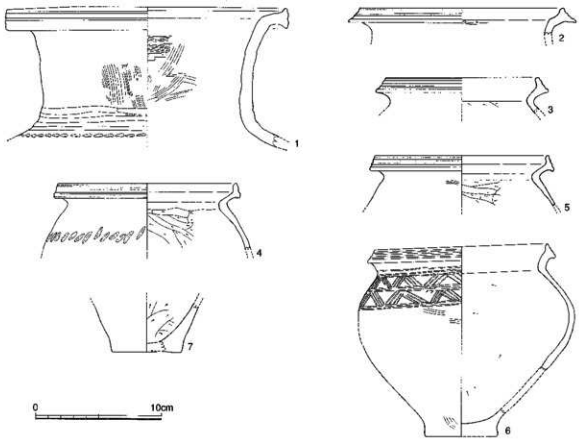
中央ピット　床面中央に二段掘りの特殊ピット（P3）が検出された。段は不整方形の壺受状を呈し、規模は（96×105－7）cmを測り、その中に平面円形状のピットが検出された。規模は（68×72－43）cmを測り、埋土は3層で最下層は炭化物を多く含む暗黄褐色砂質土である。

遺　物　　遺物はP2より壺口縁が出土した。また床面より同時期の壺・甕口縁部及び底部が出土した。

時　期　　出土遺物から弥生時代後期前半と考える。



挿図43　第２竪穴住居跡遺構図（１：60）



挿図44　第2竪穴住居跡出土遺物実測図（1：3）

第3竪穴住居跡（SI－03、挿図45・46、図版20・33・34）

位　置　　調査区の北側に位置し、SI－02より南西側へ僅かに下った緩斜面に立地する。第5段状遺構（SS－05）を分断する形で掘り込まれている。床面平均標高は約33.5mで水田との比高差は約18.4mである。

形　態　　本遺構は基盤岩花崗岩風化土の真砂土層に掘り込まれている。平面形は方形で北西側は流失しているが上面規模は長辺（南北）5.3m、短辺（東西）3.35mを測る。壁高の最高部は北側で38cm、東側で65cm、南側で30cmとなり西側は流失している。床面は西側へ緩傾斜しているが南西側には張床が一部確認できたことから元々は張床により平坦であったと考える。床面規模は長辺（南北）4.85m、短辺（東西）3.2mを測り元の形状を方形とすると、推定床面積は23.52㎡である。埋土は2層で自然堆積と思われる。

側　溝　　側溝はU字形のものが側壁下を巡っており幅12cm前後、深さは6cmを測る。西側については流失しているが側壁下を全周していたと思われる。

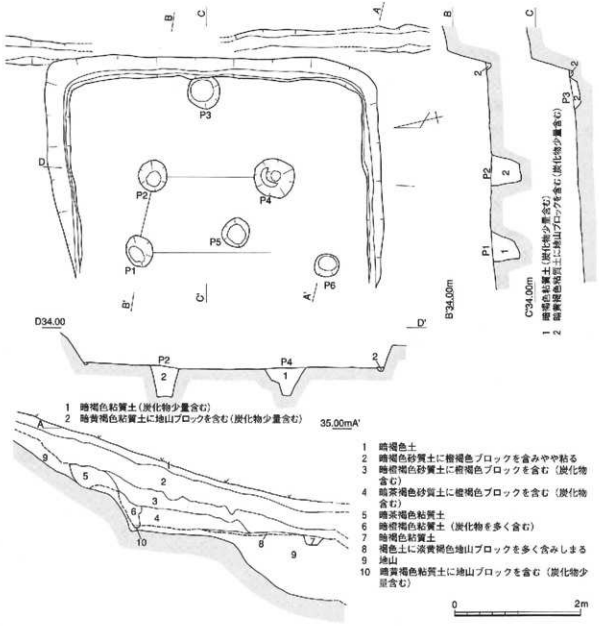
主柱穴　　主柱穴は3本が検出された。構造柱穴は方形配置を取る4本プランであったと思われる。1本は試掘トレンチを掘り込んだ辺りに位置すると思われることから試掘時の検出漏れと考えられる。配置は方形をとり規模はP1（42×52－43）cm、P2（44×50－47）cm、P3（50×50－8）cm、P4（62×65－43）cmを測る。主柱穴間距離はP1～P2で1.22m、P2～P4で1.93mを測る。

特殊ピット　東側壁ほぼ中央下の溝に接し、北西に稍広がりをみせる。不整形な隅丸方形を呈する特殊ピット（P３）が検出された。規模は（50×50－8）cmを測り、埋土は暗黄褐色粘質土で炭化物を含んでいる。なお、床面南西側より検出されたP６の規模は（36×36－43）cmを測る。底は平らであり補助的な柱穴とも考えられる。

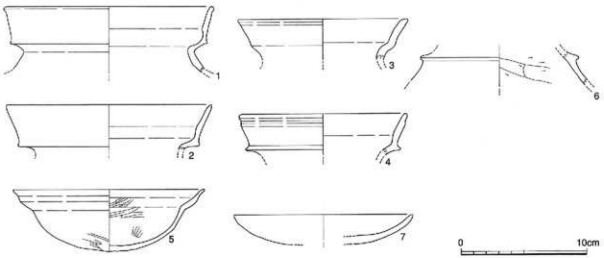
炉　跡　床面中央で東側に広がりをみせる不整形な隅丸方形を呈するP５が検出された。規模は（44×47－2～4）cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で炭化物を多く含む。一部焼土痕が残り、炉跡と考えられる。

遺　物　遺物は甕・器台・小型丸底鉢などが出土した。

時　期　出土遺物から古墳時代前期中～後半のものと考える。



挿図45　第３竪穴住居跡遺構図（１：60）



挿図46　第３竪穴住居跡出土遺物実測図（１：３）

第４竪穴住居跡（ＳＩ－04、挿図47、図版20・34）

位　置　　調査区の中央より稍北寄りに位置し、西向きの緩斜面に立地する。北側へ6.7ｍの等高線上にSI－03が在り東側斜面上にはSS－14が在る。南側はSI－05を切り込んでいる。床面平均標高は約33.4ｍで水田との比高差は約18.3ｍである。

形　態　　南西側は流失し、南側はSI－05上に張床及び築堤を行い造られていたと考える。東壁下の溝が西に向かって弧状に曲るが残りは短い、このため全容を窺うことはできないが、検出された側壁・側溝及び主柱穴などの配置から平面形は、隅丸六角形を呈していたと考える。床面は概ね平坦で、床面規模は残存する面で長辺（北西－南東）5.6ｍ、短辺（北東－南西）2.8ｍを測り、床面積15.68㎡である。壁高は東側で最高57cmである。

側　溝　　側溝はU字形のものが側壁下を巡っており幅12cm前後、最深部は北西側で8cmを測る。南西側については流失しているが側壁下を全周していたと思われる。

主柱穴　　主柱穴は４本が検出されたが、主柱穴間距離のバランス及び角度から考えると、床面が流失している南西側に２本あったと推定され６本柱であった可能性が高い。規模はＰ１（50×53－67）cm、Ｐ２（42×45－30）cm、Ｐ３（56×56－30）cm、Ｐ４（37×42－52）cm、Ｐ５（24×30－57）cm、Ｐ６（48×56－58）cmで、主柱穴間距離はＰ１～Ｐ４で2.2ｍ、Ｐ４～Ｐ５で2.5ｍ、Ｐ５～Ｐ６で2.2ｍを測る。

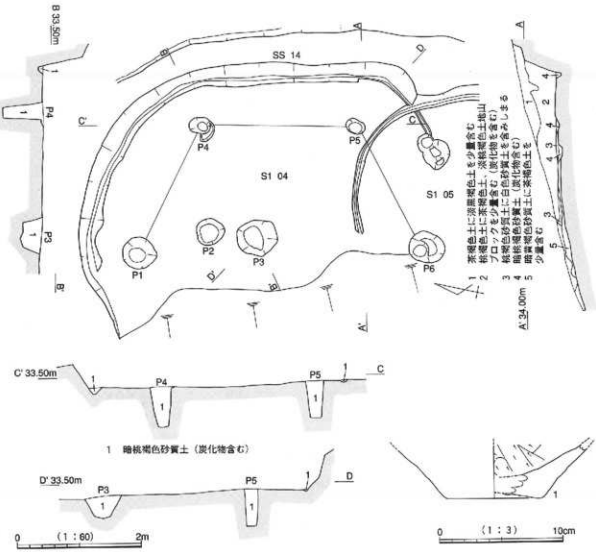
中央ピット　床面中央から稍北東寄りに特殊ピット（Ｐ３）を検出した。規模は（56×56－30）cmを測る。埋土は暗桃褐色砂質土に炭化物を含む。

遺　物　　遺物は弥生土器底部が出土した。

時　期　　出土遺物により時期の確定はできなかったが、SI－05より新しいと考えられる。

第５竪穴住居跡（ＳＩ－05、挿図48・49、図版20・34）

位　置　　調査区の中央より稍北寄りに位置し、西向きの緩斜面に立地する。北側へ半分は床面より上をSI－04に切り込まれ床面が重なる。床面平均標高は約33.4ｍを測る。



挿図47　第４竪穴住居跡遺構図・出土遺物実測図

形　態　　南西側は流失するが、北～東～南には側溝が半円形状に遺存する。主柱穴が４本の方形配置をとることから、平面形は円形を呈すると考える。床面規模は残存する面で長辺（北西－南東）3.5m、短辺（北東－南西）3.2mを測り、床面積11.2㎡である。壁高は東南側で最高65cmである。

側　溝　　側溝は西側を流失するが側壁下を全周していたと思われる。断面U字形を呈し最大幅は12cm、最深部は西側で6cmを測る。

主柱穴　　主柱穴は４本検出された。規模はP２（52×57－58）cm、P３（42×42－76）cm、P７（38×45－60）cm、P６（48×56－78）cmを測る。主柱穴間距離はP２～P３で1.0m、P３～P７で1.8m、P７～P６で1.0m、P６～P２で1.75mを測る。

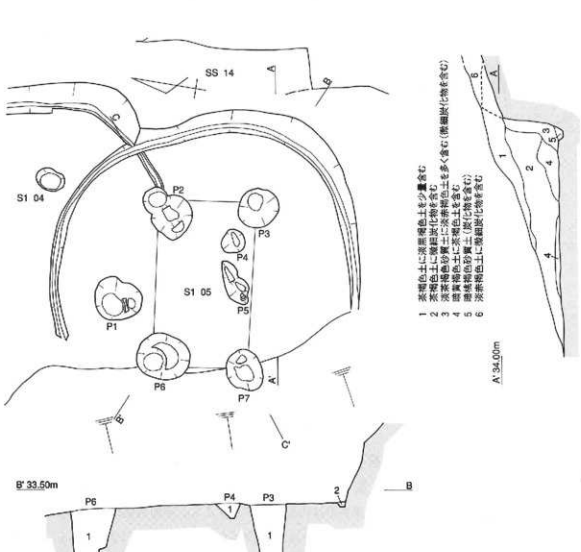
特殊ピット　中央より僅か南東寄りでP４（23×25－15）cmが検出された。上面形態は歪な円形、底部についても歪で小さく楕円形を呈する。埋土は単層で暗桃褐色砂質土に地山ブロックと炭化物を少量含む。中央より僅かに南寄りでP５（20×52－23）cmが検出された。上面形態は歪な円形、底部についても歪で小さく楕円形を呈する。埋土は、暗桃褐色砂質土に赤褐色土と暗茶褐色土ブロックを含み、炭化物をやや多く含む。

北側壁寄りでP１（42×50－70）cmが検出された。上面形態は歪な楕円形を呈する。

埋土は単層（暗桃褐色砂質土に地山ブロックと炭化物を少量含む。）で柱穴と同様であるが、建替えの柱穴とは考えられないことから特殊ピットと考える。

遺　物　　遺物は甕口縁部と底部が出土した。

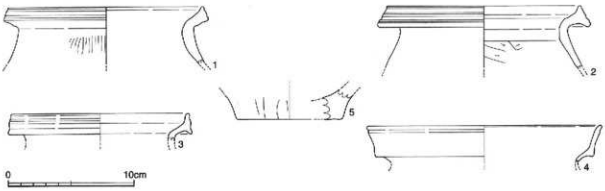
時　期　　出土遺物より弥生時代後期前半と考える。



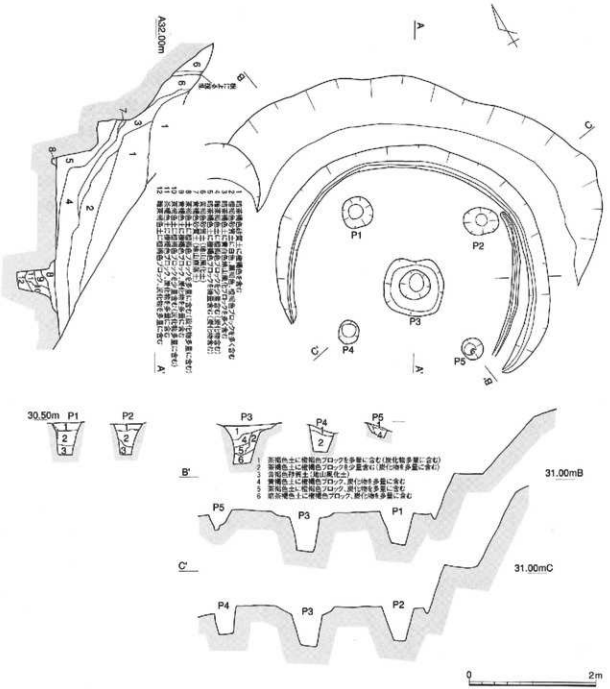
挿図48　第５竪穴住居跡遺構図（１：40）

第６竪穴住居跡（ＳＩ－06、挿図50・51、図版21・34）

位　置　　調査区の南端に位置し、北東から南西に向って下る斜面中腹に立地。現状は、南西側は急斜面となっているが元の地形は緩斜面であったと考えられる。床面平均標高は約30.4ｍで水田との比高差は約15.3ｍである。



挿図49　第5竪穴住居跡出土遺物実測図（1：3）



挿図50　第6竪穴住居跡遺構図（1：60）

形　態　南西側は流失しているが平面円形を呈すると考えられる。北東側は山側斜面を掘り込んだ犬走状の周堤が残存し幅は20～26cmである。上面規模（周壁上端より）は北西－南東で4.44m、北東－南西（推定）で4.32mを測る。床面は平坦で床面規模は長辺（北西－南東）3.99m、短辺（推定・北東－南西）3.82mを測る。壁高は北東側で最大72cmを測り推定床面積は16㎡（検出床面積15.2㎡）である。埋土は5層に分層され埋め戻したものと思われる。

側　溝　側溝は側壁下を全周していたと思われる。断面U字形を呈し、最大幅は14cm、最深部は北側で9cmを測る。

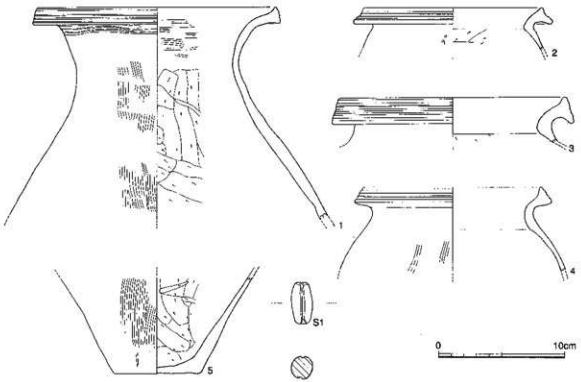
主柱穴　主柱穴は方形配置をとる4本が検出された。規模はP1（50×52－50）cm、P2（45×56－50）cm、P5（34×35－25）cm、P4（32×38－43）cmで、主柱穴間距離はP1～P2で2.0m、P2～P5で2.05m、P5～P4で1.9m、P4～P1で1.9mを測る。

中央ピット　床面中央で二段掘りの特殊ピット（P3）が検出された。外形は北東側がやや凹み段は不整形な隅丸方形の蓋受け状を呈し、規模（87×96－60）cmを測り、その中にやや歪な円形を呈するピットが掘り込まれている。規模は（47×48－43）cmを測り、埋土は5層に分層される。

小　溝　床面南東側でP2と側溝の間よりP5と側溝の中間地点に至る1条の小溝が検出された。溝はやや南東側へ振り長さ241cm、最大幅12cm、深さ6cmを測る。埋土は茶褐色土に橙褐色ブロックと炭化物を多量に含む。

遺　物　遺物は床付近より広口壺・甕口縁部・底部・石錘が出土した。

時　期　出土遺物より弥生時代後期前半のものと考える。



挿図51　第6竪穴住居跡出土遺物実測図（1：3）

第7竪穴住居跡（ＳＩ－07、挿図52～55、図版21・34）

位　置　　調査区の西端に位置し、斜面裾部近くに立地している。第13段状遺構（SS－13）と重複する。床面平均標高は約24ｍで水田との比高差は約8.9ｍである。

形　態　　3棟が重複する。東側は残存するが西側へ向って半分以上が既存の道により消失している。このため全容を窺うことはできないが、側溝の形態・切り合い・埋土等からSI－07aとSI－07bとSI－07cの3棟のプランが考えられる。竈壁の上端から山側には最大幅50cmの段が竈壁に沿って存在し周堤上面と考える。

SI－07a　　側溝が東側で遺存する。一部は消失しているが円弧を描き、その内側の床面で主柱穴が2本並び、住居跡の形状等を想定すると、やや楕円を呈する平面円形で主柱は方形の配置をとったと思われる。推定床面規模は長辺（北西－南東）3.3ｍ、短辺（北東－南西）2.2ｍを測り、残存床面積は6.5㎡となる。

側　溝　　北東側及び南東側にそれぞれ緩やかな弧を持つ溝が遺存する。もとは一連であり、やや楕円を呈する円を描いていたと思われる。側溝は断面U字形を呈し、最大幅は北東側10cm、南東側8 cm、最深部は北東側5 cm、南東側3 cmを測る。

主柱穴　　主柱穴は2本が検出された。床面の形状と主柱穴間距離から想定し4本柱の方形配置をとっていたと思われる。規模はＰ2（42×59－56）cm、Ｐ5（46×47－68）cmを測る。主柱穴間距離はＰ5～Ｐ2で2.3ｍを測る。

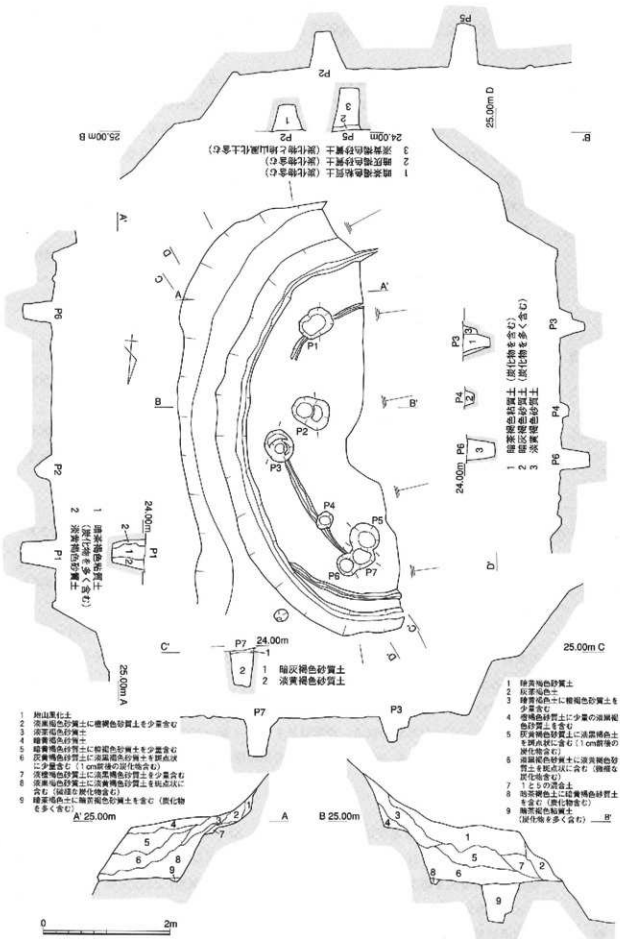
SI－07b　　遺存する側壁や側溝並びに主柱穴の配置から、平面円形を呈する住居跡と想定される。壁高は東側で最高推定76cmを測る。遺存する床面は概ね平坦で、床面規模は長辺（南北）5.55ｍ、短辺（東西）2.5ｍを測り、床面積は推定24.2㎡（残存床面積10.9㎡）となる。

側　溝　　北側に弧を持つ溝が遺存する。もとはSI－07Ｃの側溝に接触した地点よりSI－07ｃの側溝上に重複して存在し側壁下を全周していたと思われる。断面U字形を呈し、最大幅は15cm、最深部は8cmを測る。

主柱穴　　主柱穴は3本が検出された。床面における位置並びに規模等から想定し6本柱の六角形配置を取っていたと思われる。規模はＰ7（38×40－62）cm、Ｐ3（43×50－43）cm、Ｐ1（39×55－56）cmを測る。上柱穴間距離はＰ7～Ｐ3で2.2ｍ、Ｐ3～Ｐ1で2.1ｍを測る。

SI－07c　　遺存する側壁や側溝並びに主柱穴の配置から、SI－07ｂを北側へ膨らますよう拡張した住居跡と考えられる。平面形はやや歪な円形を呈する。壁高は東側で最高84cmを測る。床面規模を推定すると長辺（南北）5.9ｍ、短辺（東西）2.5ｍを測り、床面積は27㎡（残存床面積11㎡）となる。

側　溝　　側溝は側壁下に残存する。大半がSI－07ｂの側溝を掘り下げたものと思われる。断面U字形を呈し、最大幅は16cm、最深部は東側で8 cmを測る。



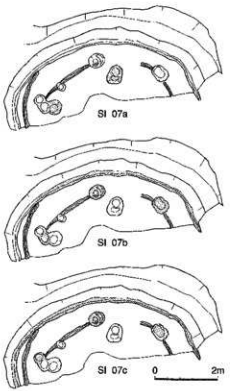
挿図52　第７竪穴住居跡遺構図（１：60）

主柱穴　主柱穴は検出された3本と考えられる。P1・P3はSI－07bの建替えあるいは建替えによる拡張時の再利用と考えられ、P6は拡張建替えによりSI－07bのP7に接した北東側に建てられたものと考える。床面における位置並びに規模等から想定し6本柱の六角形配置を取っていたと思われる。規模はP6（30×34－45）cm、P3（43×50－43）cm、P1（39×55－56）cmを測る。主柱穴間距離はP6～P3で2.1m、P3～P1で2.1mを測る。なお、P6からP3へ向って1.2mの距離をおいてP4（23×27－13）cmを検出した。P6～P3間の直線上よりやや内側に位置するが補助柱穴と思われる。P1・P3より柱痕、または抜き取り痕を確認した。

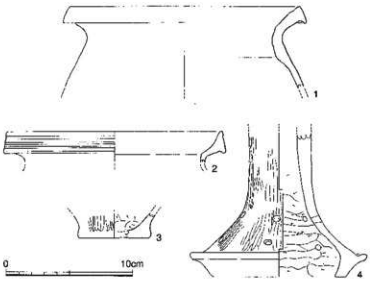
変　遷　SI－07はa（4本柱）からb（6本柱）へと、ほぼ同心円状に拡張されたと思われる。さらにbからc（bを北側へ膨らます6本柱）へと拡張建替えを行ったと思われる。

遺　物　遺物は壺口縁部・甕口縁部・底部・器台が出土した。

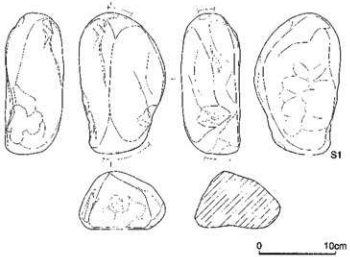
時　期　出土遺物より、弥生時代後期前半と考える。



挿図53 第7竪穴住居跡変遷図（1：120）



挿図54 第7竪穴住居跡出土遺物実測図（1：3）



挿図55 第7竪穴住居跡出土遺物実測図（1：5）

第8節　段状遺構

第1段状遺構（ＳＳ－01、挿図56・57、図版22・34）

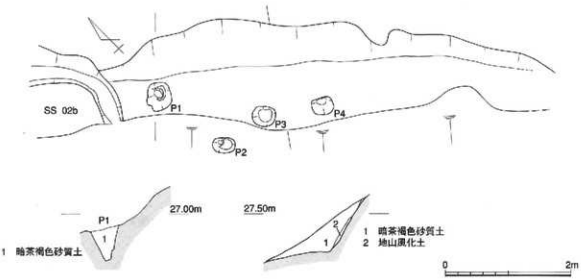
位　置　　調査区南西端に位置し急斜面に立地する。北西側はSS－02が切り込んでおり、北東斜　面を登るとSI－06が在る。底面の平均標高は27ｍを測る。

形　態　　等高線に沿うような形で斜面の上側を掘り込んで平坦面を造成したと思われる。前面南西側は後世掘削を受け失われたと考えられ、南東端も消失しており造成時の規模は不明である。掘り込み壁高は0.85ｍを残す。残存平面規模は長辺（北西－南東）7.15ｍ、短辺（北東－南西）1.0ｍを測る。埋土は単層である。

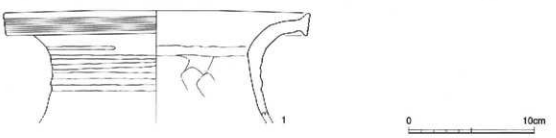
建物跡　　造成面より柱穴を３本と前面流失斜面に残存する１本を検出した。規模はＰ１（38×44－26）cm、Ｐ２（32×36－26）cm、Ｐ３（28×35－27）cm、Ｐ４（24×36－26）cmを測る。残存造成面は僅かで、柱穴の配置及び深さからしても建物の規模、棟数を判断することはできなかったが、本遺構に伴う何らかの関連施設があったと考えられる。

遺　物　　遺物は床付近より壷口縁部が出土した。

時　期　　出土遺物より本遺構は弥生時代後期前半と考える。



挿図56 第１段状遺構遺構図（１：60）



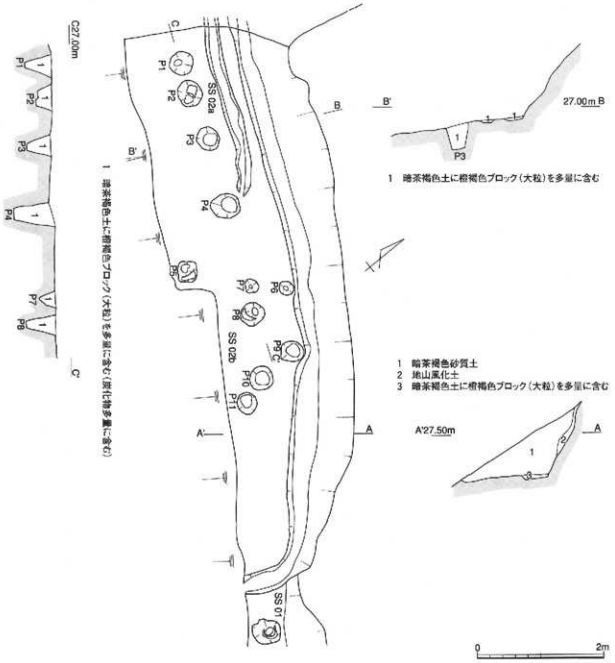
挿図57　第１段状遺構出土遺物実測図（１：３）

第２段状遺構（ＳＳ－02、挿図58・59、図版22・34）

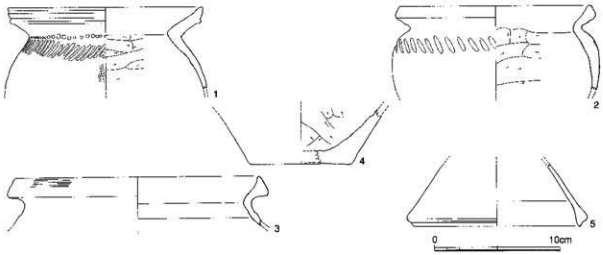
位　置　　調査区南西端に位置し急斜面に立地する。南東側はSS－01を切り込んでいる。底面の平均標高は27ｍを測る。

形　態　　側壁下側溝及び底面に溝が１本検出されており、底面２面が存在すると思われ、SS－02a・SS－02bの２遺構の重複が考えられる。

SS－02a　　SS－02bの側壁より内側へ約25cmの底面に検出された溝は、元は側壁下の側溝と考えられる。溝は幅約21cm前後、最深部6cmで長さは2.8ｍを測り、断面形は逆台形を呈することから、SS－02bの溝と同形状と考える。以上によりSS－02aは底面高は同じ



挿図58　第２段状遺構遺構図（１：60）



挿図59　第２－ｂ段状遺構出土遺物実測図（１：３）

レベルとしSS－02bにより掘削拡張され溝のみを残したと考えられる。前面は後世の掘削等で大半が消失し、溝の前底面より柱穴Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３を検出した。Ｐ１より弥生時代後期の甕口縁が出土したが、SS－02aに関連するものと判断することはできなかった。

SS－02b　等高線に沿うような形で斜面の上側を掘り込んで平坦面を造成したと思われる。前面の南西側は後世掘削を受け失われたと考えられ、北西端も近代の掘削により消失しており造成時の規模は不明である。掘り込み壁高1.1ｍを残し残存平面規模は長辺（北西－南東長）9.1ｍ、短辺（北東－南西長）1.8ｍを測る。側壁下より側溝を検出した。断面形は逆台形を呈し、最大幅は39ｃｍ、最深部11cmを測り溝底面は南東側へ緩やかに傾斜している。

遺存する造成底面より11本の柱穴を検出した。SS－02bの側溝より60cmの距離を置いて直列するＰ２・Ｐ４・Ｐ８の３本の柱穴はＰ２（38×42－24）cm、Ｐ４（40×45－62）cm、Ｐ８（36×40－45）cmである。柱穴間距離はＰ２～Ｐ４で1.8m、Ｐ４～Ｐ８で1.8ｍを測り、軸方向をＮ－67°－Ｗにとる。また、ほぼ同主軸内にＰ１・Ｐ３があり建替えなど関連のものとも考えられる。Ｐ１（38×38－42）cm、Ｐ３（36×37－37）cm、柱穴間距離はＰ１～Ｐ３で1.3ｍを測る。この他の柱穴については、建物跡を確定することができなかったが、本遺跡に伴う何らかの施設に伴うものであったと考える。各々の規模はＰ５（30×33－26）cm、Ｐ６（22×25－23）cm、Ｐ７（20×22－25）cm、Ｐ９（30×36－23）cm、P10（37×38－33）cm、P11（31×35－23）cmを測る。

遺　物　　遺物は床付近より甕口縁部が出土した。

時　期　　出土遺物より弥生時代後期前半と考える。

第３段状遺構（ＳＳ－03、挿図60・61、図版22・35）

位　置　　調査区南西端に位置し急斜面から緩斜面への変化点に立地する。SS－04を切り込んでおり、南西側へ下るとSI－06、北東側へ登るとSS－07が在る。底面の平均標高は34

mを測る。

形　態　　等高線に沿うような形で斜面の上側を「コ」の字状に掘り込んで平坦面を造成したと考えられる。前面の南西側は流失したと考えられ、造成時の規模は不明である。掘り込み壁高0.5mを残し、残存平面規模は長辺（北西－南東長）7.8m、短辺（北東－南西長）2.65mを測る。犠壁下より側溝を検出した。断面形は逆台形を呈し、最大幅は33cm、最深部5cmを測る。溝の北西側は壁帯コーナー付近で消失し南東側は途中で底面に同一になり消失しており、いずれも底面の流失によると考える。

遺存する底面より11本の柱穴を検出した。側溝より概ね1.2mの距離を置いて直列するP2・P4・P6・P10の4本の柱穴はP2（37×37－15）cm、P4（38×43－27）cm、P6（29×31－23）cm、P10（28×40－43）cmである。柱穴間距離はP2～P4で2.1m、P4～P6で1.8m、P6～P10で1.9mを測り、軸方向をN－57°－Wにとる。また、ほぼ同軸列中にP3・P4があり建替えなど関連のものと考えられる。P3（27×30－24）cm、P4（38×43－27）cm、柱穴間距離はP2～P3で0.8m、P3～P4で1.4m、P6～P7で0.75m、P7～P10で1.2mを測る。また、P2－P10の直列軸より南西側へ20cm平行するP5－P8の軸がある。P5（26×31－35）cm、P8（36×38－27）cm柱穴間距離は2.7mを測る。この他の柱穴については、建物跡を確定することができなかったが、本遺跡に伴う何らかの施設であったと考える。各々の規模はP1（37×37－15）cm、P9（33×37－16）cm、P11（20×21－12）cmを測る。

遺　物　　遺物はP7上面より土師器の高坏脚部が出土した。

時　期　　出土遺物により古墳時代中期と考える。

第4段状遺構（SS－04、挿図60・61、図版22・35）

位　置　　調査区南西端に位置し緩斜面に立地する。南西側へ下るとSI－06、北東側へ登るとSS－07が在る。南東側壁はSS－03が切り込んでいる。底面の平均標高は34mを測る。

形　態　　等高線に沿うような形で斜面の上側を「コ」の字状に掘り込んで平坦面を造成したと考えられる。前面の南西側は流失したと考えられ造成時の規模は不明である。掘り込み壁高0.15mを残し残存平面規模は長辺（北西－南東長）2.6m、短辺（北東－南西長）1.2mを測る。

建物跡　　造成面から柱穴は検出されなかった。

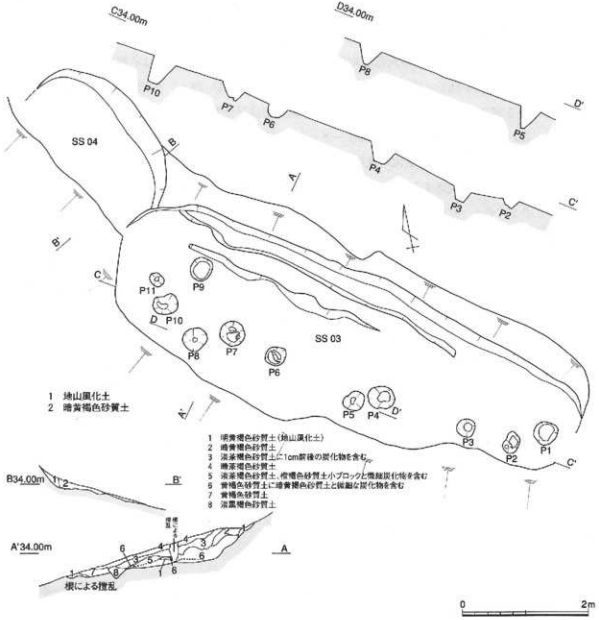
遺　物　　遺物は甕口縁部が出土した。

時　期　　出土遺物より弥生時代後期後半と考える。

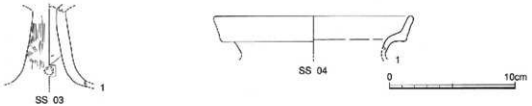
第5段状遺構（SS－05、挿図62・63、図版22・35）

位　置　　調査区北側に位置し緩斜面に立地する。中央をSI－03によって切り込まれている。床面の平均標高は34.4mを測る。

形　態　　等高線に沿うような形で斜面の上側を「コ」の字状に掘り込んで平坦面を造成したと

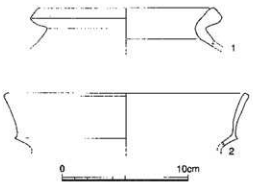


挿図60　第３・４段状遺構遺構図（１：60）



挿図61　第３・４段状遺構出土遺物実測図（１：３）

考えられる。前面西側は流失したと考えられ南端も消失しており造成時の規模は不明である。掘り込み壁高は僅かに遺存する北側で0.45mを残す。床面は概ね平坦で検出規模は長辺（南－北）10.1m、短辺（東－西）1.6mを測る。「 ⌐ 」形に遺存の側壁に添って側溝を検出した。断面「U」字形を呈し、最大幅は44cm、深さ6 cmを測り、長さは途中SI－03の切り込み等により消失する所もあるが10.6mを測る。

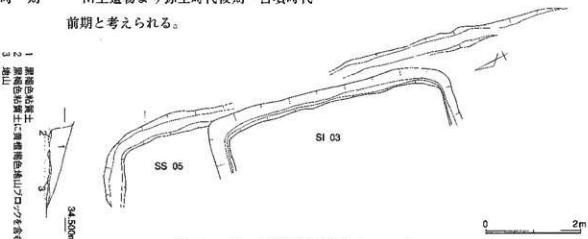


挿図62　第5段状遺構出土遺物実測図（1：3）

建物跡　造成面から柱穴は検出されなかった。

遺　物　遺物は床付近より甕口縁部が出土した。

時　期　出土遺物より弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。



挿図63　第5段状遺構遺構図（1：80）

第6段状遺構（ＳＳ－06、挿図65、図版22）

位　置　調査区の南東側に位置し、南西に流れる急斜面に立地する。下側はSS－07に掘り込まれている。底面の平均標高は36.5mを測る。

形　態　等高線に沿うような形で斜面の上側を掘り込んで平坦面を造成したと思われる。前面南西側はSS－07による掘り込みを受け北西・南東の両端とも消失しており造成時の規模は不明である。掘り込み壁高平均30cmを残し、残存底面規模は長辺（北西－南東）9.8m、北西端に残る短辺（北東－南西）1.5m、SS－07による掘り込み残地となる短辺幅（北東－南西）約0.2mを測る。床面は凸凹で風化が見られる。形状的には歩道の可能性も考えられる。

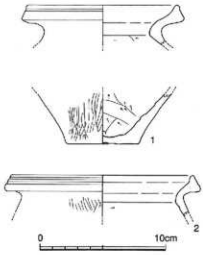
遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、SS－07より古いと考えられる。

第7段状遺構（ＳＳ－07、挿図64・65、図版22・35）

位　置　調査区の南東側に位置し、南西に流れる急斜面に立地する。上側はSS－06を掘り込んでいる。底面の平均標高は36.3mである。

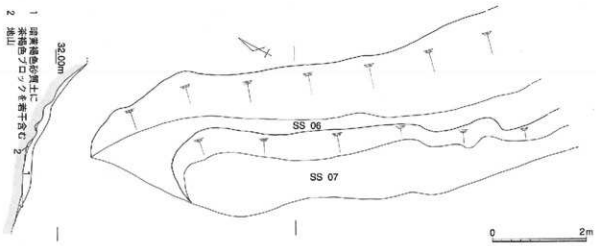
形　態　　等高線に沿うような形で上側SS－06を掘り込んで平坦地を造成したと思われる。前面南西側は流失したと考えられる。南東端は消失し、北西側は側壁が南西に「┐」形に曲り造成面の端を示しているが造成時の規模は不明である。掘り込み壁高12cmを残す。残存する加工面は風化により明瞭な線引きは難しいが底面規模は長辺（北西－南東長）８m、短辺（北東－南西長）1.3mを測る。埋土は単層である。



挿図64　第７段状遺構出土遺物実測図（１：３）

遺　物　　遺物は埋土中より弥生時代後期前半の甕が出土した。

時　期　　遺物は埋土中出土のため時期は不明である。



挿図65　第６・７段状遺構遺構図（１：80）

第８段状遺構（ＳＳ－08、挿図75、図版22）

位　置　　調査区北西端に位置し急斜面裾部近くに立地する。南側はSS－13に切り込まれている。底面の平均標高は24.8mを測る。

形　態　　等高線に沿うような形で斜面の上側を「コ」の字状に掘り込んで平坦面を造成したと思われる。前面西側は流失と後世の掘削により失われたと考えられる。側壁南端は南西側に僅かに弧を描きSS－13の側壁と交わる。側壁北端は「┌」形を呈している。掘り込み壁高は最大で42cmを残す。残存平均規模は長辺（南－北）2.6m、短辺（東－西）0.85mを測る。側溝は側壁下より検出するが北側末端は側壁を外れ平坦面内へ僅かに入り込んでいる。断面形は逆台形を呈し、最大幅 24cm、最深部4cmを測る。側壁と側溝の状態を見ると側壁を切り込んだことが考えられ、２遺構の重複が考えられる。柱穴等は検出されていない。

遺　物　　遺物は出土しなかった。

時　期　　遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、SS－13より古いと思われる。

第９段状遺構（ＳＳ－09、挿図66・67、図版23・35）

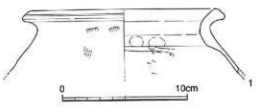
位　置　　調査区の北西端に位置し、北西向きの斜面に立地する。南西方向約２mにはSS－10が在る。底面の平均標高は31.7mを測る。

形　態　　等高線に沿うような形で斜面の上側を掘り込んで平坦面を造成したと思われる。調査前の地形は畑地跡と思われたが、堆積する表土は薄く近世から現代に山土を掘り取った跡とも考えられ、大きく加工を受けている。残存部分は僅かであるが「┘」字形に掘り込まれたことを窺うことができる。北西側は消失しており造成時の規模は不明である。残存平均規模は長辺（北東－南西）2.25m、短辺（南東－北西）1.7mを測る。埋土は単層である。

遺　物　　遺物は甕口縁部が出土した。

時　期　　出土遺物は弥生時代後期前半のものであるが、後世の攪乱を受けており、時期を確定できなかった。

挿図66　第９段状遺構遺構図（１：60）

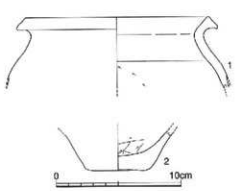


挿図67　第９段状遺構出土遺物実測図（１：３）

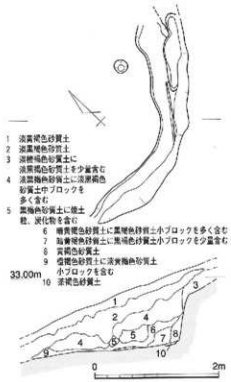
第10段状遺構（ＳＳ－10、挿図68・69、図版23・35）

位　置　　調査区の北西端に位置し、北西向きの斜面に立地する。北東方向約２mにはSS－09が在る。底面の平均標高は31.8mを測る。

形　態　　等高線に沿うような形で斜面の上側を掘り込んで平坦面を造成したと思われる。調査前



挿図69　第10段状遺構出土遺物実測図（１：３）

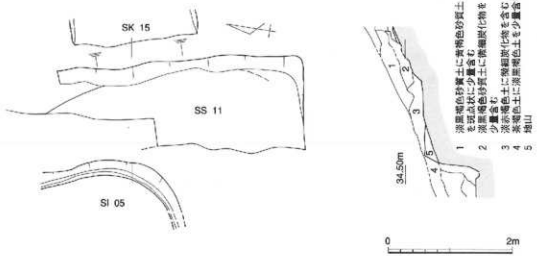


挿図68　第10段状遺構遺構図（１：60）

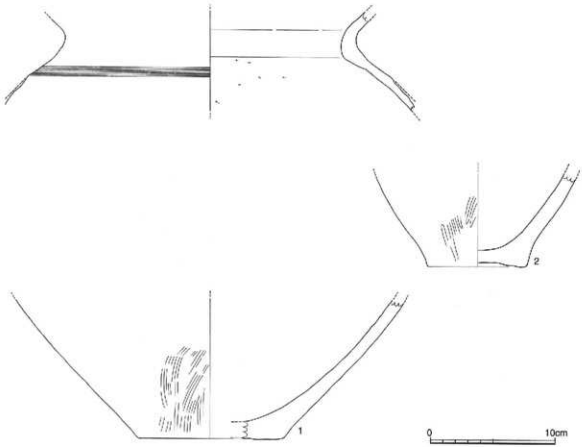
の地形は畑地跡と思われたが、堆積する表土は薄く近世から現代に山土を掘り取った跡とも考えられ、大きく加工を受けている。北東側は消失しており造成時の規模は不明である。掘り込み壁高は75cmを残す。残存平均規模は長辺（北東－南西）3.3m、短辺（南東－北西）1.45mを測る。床面はほぼ平坦であり柱穴1ヶ所を検出した。P1は（20×25－11）cmであり、他に柱穴は検出されず、この遺構に伴うものかどうか不明である。

遺　物　　遺物は床より甕口縁部と底部が出土した。

時　期　　出土遺物より弥生時代後期前半と考える。



挿図70　第11段状遺構遺構図（1：60）



挿図71　第11段状遺構出土遺物実測図（1：3）

第11段状遺構（ＳＳ－11、挿図70・71、図版35）

位　置　　調査区のほぼ中央より北側へ位置し、急斜面に立地する。底面の平均標高は34.2ｍを測る。

形　態　　等高線に沿うような形で斜面の上側を掘り込んで平坦面を造成したと思われる。前面西側は流失及び後世掘削を受け失われたと考えられる。北端は消失し、南端は側面が隅丸に「┐」形に曲り造成面端を示しているが、造成時の規模は不明である。掘り込み壁高は最大15cmを残す。底面は概ね平坦で、検出規模は長辺（南－北）４ｍ、短辺（東－西）1.3ｍを測る。

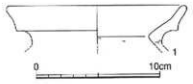
遺　物　　埋土中より甕類部と底部が出土した。

時　期　　出土遺物は埋上中のものであり、時期を確定することはできなかった。

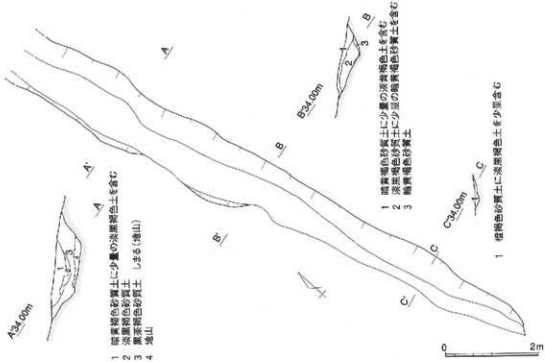
第12段状遺構（ＳＳ－12、挿図72・73、図版23・35）

位　置　　調査区のほぼ中央より南側へ位置し、緩斜面に立地する。底面の平均標高は33.8ｍを測る。

形　態　　等高線に沿うような形で斜面の上側を掘り込んで造成したと思われる。検出規模は南北長12ｍ、残存する幅は最大で84cm、最小で22cmを測る。南北中程より北側において山側（東）より前側（西）の断面で前側に僅かな地形の高まりが認められる。帯状にある平坦面の形状により歩道であったと考えられる。



挿図72　第12段状遺構出土遺物実測図（１：３）



挿図73　第12段状遺構遺構図（１：80）

遺　物　　遺物は甕口縁部が出土した。

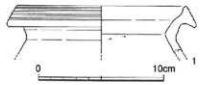
時　期　　出土遺物より弥生時代後期後半と考える。

第13段状遺構（ＳＳ－13、挿図74・75、図版22・35）

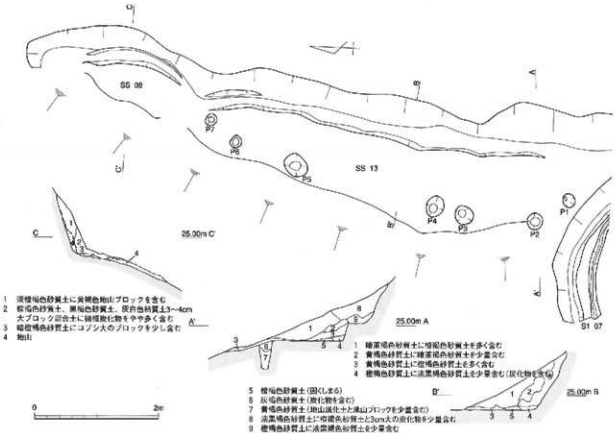
位　置　　調査区南西端に位置し、急斜面裾部近くに立地する。南側はSI－07により切り込まれ北側はSS－08を切り込んでいる。床面の平均標高は24.8ｍを測る。

形　態　　等高線に沿うような形で斜面の上側を掘り込んで平坦面を造成したと思われる。前面西側は流失と後世の掘削により失われたと考えられる。側壁南端はSI－07の周提上面を造るため山側を掘り込み弧状に続く側壁へ繋がる。側壁北端は北西側に僅かに弧を描きSS－08の側壁と交わる。掘り込み壁高は最大で90cmを残す。残存平面規模は長辺（南－北）6.6ｍ、短辺（東－西）1.7ｍを測る。側壁に沿い下側に側溝を検出した。断面形は逆台形を呈し最大幅18cm、最深部10cmを測る。溝底面は北西側へ緩やかに傾斜している。土層より張床の痕跡を窺うことができる。

遺存する造成底面より６本の柱穴を検出した。軸方向をＮ－２°－Ｅにより直列するＰ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６の４本の柱穴はＰ３（28×30－39）cm、Ｐ４（28×35－36）cm、Ｐ５（26×40－35）cm、Ｐ６（17×19－18）cmである。柱穴間距離はＰ３～Ｐ４で0.5m、Ｐ４～Ｐ５で2.3m、Ｐ５～Ｐ６で1.0mを測る。この他の柱穴については建物跡を確認することができなかったが、本遺跡に伴う何ら



挿図74　第13段状遺構出土遺物実測図（１：３）



挿図75　第８・13段状遺構遺構図（１：60）

かの施設であったと考える。各々の規模はＰ１（20×23－31）cm、Ｐ２（24×26－40）cm Ｐ７（15×18－10）cmを測る。

遺　物　　遺物は甕口縁部が出土した。

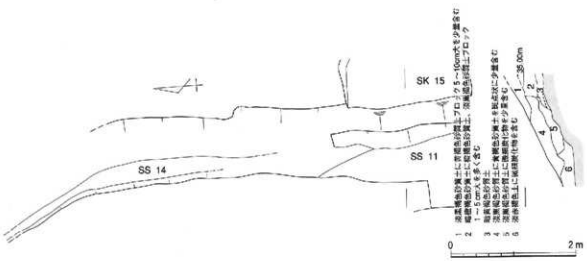
時　期　　出土遺物より弥生時代後期前半と考える。

第14段状遺構（ＳＳ－14、挿図76）

位　置　　調査区のほぼ中央より北側へ位置し、急斜面に立地する。底面の平均標高は34.4ｍを測る。

形　態　　等高線に沿うような形で斜面の上側を掘り込んで平坦面を造成したと思われる。掘り込まれた側壁は６ｍが残り、隣接のSK－15の前面を切り込んでいる。壁高は「30」cmを残す。側壁の北側半分は、下に帯状の凹地を確認するが、両端とも検出できなかった。この凹地は幅は最大で0.3m、長さは約4mを確認するが、形状等から考えると歩道と考えられる。また、土層から凹地状の断面が見え、帯状に凹地が続いて存在していたことが窺える。更に南側には歩道であったと考えられるSS－12があり、これに続いていたと思われる。

時　期　　出土遺物がないため時期は不明であるが、SS－12と一連の遺構と考えると弥生時代後期後半とすることができる。



挿図76　第14段状遺構遺構図（１：60）

第9節　溝状遺構

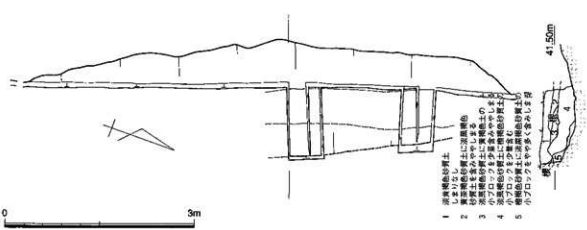
第1溝状遺構（ＳＤ－01、挿図77、図版5）

位　置　　調査区の頂部に位置し、東側調査区外との境界に立地する。標高は41.4ｍを測る。

形　態　　遺構は長さ7.62ｍの加工面を検出したが限られた範囲であり、拡張は諦め、小型のトレンチ2本により確認した。結果、溝状遺構と考えられる断面を検出した。溝幅は最大1.85ｍ、最小1.37ｍであり、深さは0.27ｍを測る。断面形は「U」字形を呈す。埋土は砂質土の色違いで2層を成す。

遺　物　　土師器の甕口縁部小片1点が出土した。小片のため図化することができなかった。

時　期　　土器片以前の遺構であり周辺の古墳の存在から古墳周溝の一部と考えられる。1号墳周溝の北東側を一部切っており、本遺構が新しいことを確認した。



挿図77　第1溝状遺構遺構図（1：60）

第2溝状遺構（ＳＤ－02、挿図78）

位　置　　調査区の北側に位置し、北西向きの斜面に立地する。中程をSD－03の側溝・側壁により切り込まれている。標高は36.9ｍを測る。

形　態　　斜面の上側へ弧を描き、規模は長さ2.4ｍ、幅0.15～0.2ｍ、深さ0.2ｍを測り、断面形は「U」字形を呈す。埋土は、暗褐色砂質土の単層で自然堆積であると考えられる。

遺　物　　遺物は出土しなかった。

時　期　　SD－03と切り合い、本遺構が古いことを確認した。切り合い関係からSD－03以前と推定される。

第3溝状遺構（ＳＤ－03、挿図78・79、図版35）

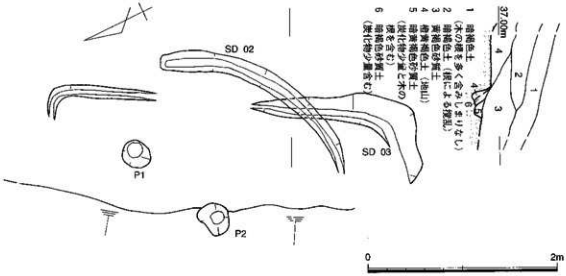
位　置　　調査区の北側に位置し北西向きの斜面に立地する。中程でSD－02を切り込んでいる。

標高は36.9mを測る。

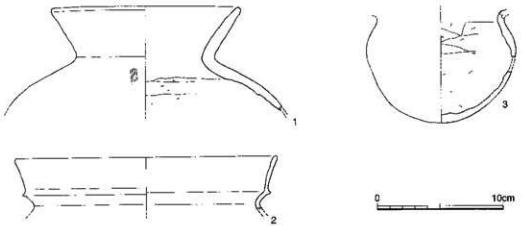
形　態　　等高線に沿うように主軸を北東－南西にとる。両端は前面に曲がり平面形は鍵形を呈す。規模は中程が削失しているが主軸両端間の長さは3.9m、幅0.12～0.16m、深さ0.1mを測り、断面形は「U」字形を呈す。南西側半分には山砥に立ち上がりが比較的多く残り側壁が存在したことが考えられる。埋土は暗黄褐色砂質土の単層で自然堆積であると考えられる。本遺構は溝状遺構とするが規模及び形状を考えると古墳時代の竪穴住居跡側溝と考えることができる。溝より約30cm前面に柱穴1本を検出し中に土器片を確認している。

遺　物　　南西側コーナーの溝前面及び柱穴内より土師器甕が出土している。

時　期　　出土遺物から本遺構の時期は古墳時代前期前半と考えられる。



挿図78　第2・3溝状遺構遺構図（1：40）



挿図79　第3溝状遺構出土遺物実測図（1：3）

第4溝状遺構（ＳＤ－04、挿図80・81、図版35）

位　置　　調査区の北側に位置し北西向きの斜面に立地する。中程をSD－05により切り込まれている。標高は36.4mを測る。

形　態　　等高線に沿うように主軸を北東－南西にとる。両端は前面に僅かに曲線を描き平面形は弓形を呈す。規模は長さ4.5m、幅32～28cm、深さ4～8cmを測り、断面形は「U」字形を呈す。埋土は淡橙褐色砂質土の単層で自然堆積であると考えられる。本遺構は溝状遺構とするが規模及び形状を考えると、段状遺構側溝と考えることができる。切り合い関係により、後にSD－05が造成されたことが窺える。

遺　物　　上層堆積土中より弥生土器・土師器・須恵器・黒曜石片の各種遺物が出土しているが、溝の埋土中よりは遺物は検出していない。

時　期　　遺物はいずれも上層堆積土混入のものであり、時期を特定することはできなかった。

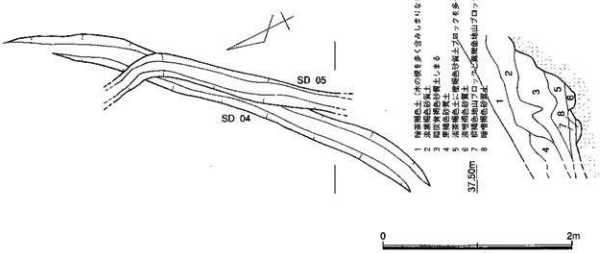
第5溝状遺構（ＳＤ－05、挿図80・81、図版35）

位　置　　調査区の北側に位置し北西向きの斜面に立地する。SD－04を切り込んでいる。標高は36.5mを測る。

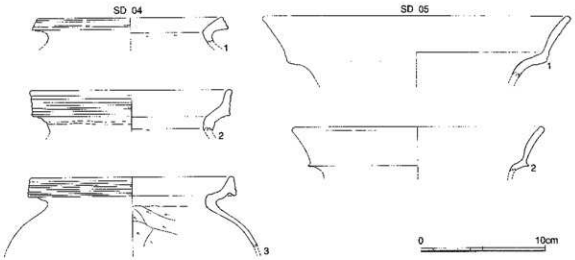
形　態　　等高線に沿うように主軸を北東－南西にとる。北東側末端は北西側にカーブする。規模は長さ2.5m、幅22～27cm、深さ4～6cmを測り、断面形は「U」字形を呈す。埋土は暗橙褐色砂質土の単層である。本遺構は溝状遺構とするが規模及び形状を考えると、段状遺構側溝と考えることができる。切り合い関係により、SD－04の後に造成されたことが窺える。

遺　物　　上層堆積土中より弥生土器・土師器の各種土器が出土しているが、溝の埋土中よりは遺物は検出していない。

時　期　　遺物はいずれも上層堆積土混入のものであり、時期を特定することはできなかった。



挿図80　第4・5溝状遺構遺構図（1：40）



挿図81　第4・5溝状遺構出土遺物実測図（1：3）

第10節　土坑

第1土坑（SK－01、挿図82、図版23）

位　置　　調査区の東側頂部に位置し、北側平坦面に立地し柱穴群内に在る。南側には1号墳が接近し標高40.5mを測る。

形　態　　上面形は不整形な楕円形を呈し、上縁部長径1.8m×短径0.75mを測る。底面形も不整な楕円形で、底部長径0.55m×短径0.16m、深さは0.67mである。断面形は歪な逆凹錐を呈する。主軸はN－60°－Wをとる。遺構の性格は不明である。

時　期　　遺物は全く出土しなかった。上面形は表土近くより観察されたことから近世以降のものと思われるが時期は不明である。

第2土坑（SK－02、挿図82、図版23）

位　置　　調査区の東側頂部に位置し、2号墳の残存墳丘基盤岩上に在る。南側に1.6mを隔てSK－03となり、検出面の標高は41.3mを測る。

形　態　　上面形は楕の実形を呈し、上縁部長径1.2m×短径1.02mを測る。底面形も同形を呈し底部長径0.97m×短径0.88m、深さは0.3mである。断面形は逆台形を呈し、主軸はN－46°－Wをとる。遺構の性格は不明である。

時　期　　遺物は全く出土しなかったが、環壕に伴う貯蔵穴と考えたい。

第3土坑（SK－03、挿図82、図版23）

位　置　　調査区の東側頂部に位置し、2号墳の残存墳丘基盤岩上に在る。北側に1.6mを隔てSK－02となり、検出面の標高は41.3mを測る。

形　態　　上面形は楕円形を呈し、上縁部長径1.16m×短径1.13mを測る。底面形も同形を呈し底部長径1.03m×短径0.97m、深さは0.35mである。断面形は逆台形を呈し、主軸はN－70°－Wをとる。遺構の性格は不明である。

時　期　　遺物は全く出土しなかったが、環壕に伴う貯蔵穴と考えたい。

第4土坑（SK－04、挿図82、図版23）

位　置　　調査区南西端に位置し、急斜面に立地する。北東斜面を登ると第1段状遺構（SS－01）が在る。検出面の標高は斜面中間で24.10mを測る。

形　態　　上面形は歪な楕円形を呈し、上縁部長径1.11m×短径0.75m、深さは検出面中央より0.82mである。断面形は逆台形を呈し、主軸はN－58°－Wをとる。底面中央に小ピットが掘り込まれており、規模は（105×83－101）cmを測る。狩猟用の落し穴であると考えられる。

時　期　遺物は全く出土しなかった。堆積土は黒褐色砂質土である。付近から弥生時代の住居跡を検出していることを考えると弥生時代以前と思われる。

第5土坑（SK－05、挿図82、図版23）

位　置　調査区の東側頂部に位置し、1号墳の残存墳丘基盤岩上に在る。北側に0.5mを隔てSK－06となり、検出面の標高は41.4mを測る。

形　態　上面形は歪な花形を呈し、上縁部長径1.35m×短径1.29mを測る。底面形も歪な隅丸方形で底部長径0.9m×短径0.86m、深さは0.33mである。断面形は逆台形を呈し、主軸はN－47°－Wをとる。遺構の性格は不明である。

時　期　遺物は全く出土しなかったが、環壕に伴う貯蔵穴と考えたい。

第6土坑（SK－06、挿図82、図版23）

位　置　調査区の東側頂部に位置し、1号墳の残存墳丘基盤岩上に在る。南側に0.5mを隔てSK－05となり、検出面の標高は41.50mを測る。

形　態　上面形は不整な円形を呈し、上縁部長径0.97m×短径0.9mを測る。底面形は隅丸方形で底部長径0.72m×短径0.64m、深さは0.41mである。断面形は逆台形を呈し、主軸はN－31°－Eをとる。遺構の性格は不明である。

時　期　遺物は全く出土しなかったが、環壕に伴う貯蔵穴と考えたい。

第7土坑（SK－07、挿図83、図版24）

位　置　調査区の東側頂部に位置し、1号墳の残存墳丘基盤岩上に在る。北側に0.2mを隔てSK－08となり、検出面の標高は41.47mを測る。

形　態　上面形は歪な花形を呈し、上縁部長径1.2m×短径1.15mを測る。底面形は不整な円形で底部長径0.97m×短径0.93m、深さは0.47mである。断面形は逆台形を呈し、主軸はN－24°－Wをとる。遺構の性格は不明である。

時　期　遺物は全く出土しなかったが、環壕に伴う貯蔵穴と考えたい。

第8土坑（SK－08、挿図83・86、図版24・36）

位　置　調査区の東側頂部に位置し、1号墳の残存墳丘基盤岩上に在る。南側に0.2mを隔てSK－07となり、検出面の標高は41.5mを測る。

形　態　上面形は不整な楕円形を呈し、上縁部長径2.42m×短径2.0mを測る。底面形は楕円形で底部長径1.9m×短径1.7m、深さは0.41mである。断面形は逆台形を呈し、主軸はN－40°－Eをとる。遺構の性格は不明である。

遺　物　遺物は埋土1～2層目より甕口縁部と高坏が出土した。

時　期　　出土遺物より古墳時代中期前半のものと考えられる。

第9土坑（SK－09、挿図83、図版24）

位　置　　調査区の東側頂部に位置し、1号墳の残存墳丘基盤岩上に在る。北側は一部1号墳の主体部で切り込まれており、本遺構が古いと考えられる。南側に0.9mを隔てSK－10となり、検出面の標高は41.35mを測る。

形　態　　上面形は不整な隅丸長方形を呈し、上縁部長径1.6m×短径1.18mを測る。底面形も不整な隅丸長方形で底部長径1.41m×短径0.83m、深さは0.3mである。断面形は逆台形を呈し、主軸はN－81°－Eをとる。遺構の性格は不明である。

時　期　　遺物は全く出土しなかったが、環濠に伴う貯蔵穴と考えたい。

第10土坑（SK－10、挿図83）

位　置　　調査区の東側頂部に位置し、1号墳の残存墳丘基盤岩上に在る。北東側に0.8mを隔てSK－09となり、検出面の標高は41.2mを測る。

形　態　　上面形は不整な楕円形を呈し、上縁部長径0.95m×短径0.9mを測る。底面形は不整な隅丸長方形で底部長径0.7m×短径0.58m、深さは0.17mである。断面形は逆台形を呈し、主軸はN－21°－Eをとる。遺構の性格は不明である。

時　期　　遺物は全く出土しなかったが、環濠に伴う貯蔵穴と考えたい。

第11土坑（SK－11、挿図83・86、図版24・36）

位　置　　調査区の西端に位置し、急斜面に立地する。西側は近代の墓道として切り取られている。底部の下にはSK－12が在る。検出面は斜面で標高は26.8～26.9mを測る。

形　態　　残存の上面形は不整形をなし、元の主軸はN－7°－Eをとると思われる。上縁部長径1.53m×短径1.23mを測る。底面形は残存面より元は隅丸の長方であったと思われる。残存の底部長径1.35m×短径1.13m、壁高（深さ）は0.6mである。埋土は2層に分層されるが何れも黒色土層であり火山灰土（通称黒ぼく土）で遺構面へ流入したことが明瞭である。規模などを考えると貯蔵穴であると考えられる。

遺　物　　埋土中より甕口縁・底部・高坏脚部が出土した。

時　期　　出土遺物より弥生時代後期前半のものと考える。

第12土坑（SK－12、挿図83・86、図版24・36）

位　置　　調査区の西端に位置し、急斜面に立地する。西側は近代の墓道として切り取られている。上面にはSK－11が在る。検出面の標高は26.7mを測る。

形　態　　上面形は不整な楕円形を呈し、上縁部長径0.95m×短径0.61mを測る。底面形は楕円

形で底部長径0.55m×短径0.41m、深さは0.26mである。断面形は逆台形を呈し、主軸はN－20°－Eをとる。上部は後世の掘削を受けている。埋土は2層で下層は淡黒褐色土に地山小ブロックを多く含む土が堆積する。遺構の性格は不明である。

遺　物　　埋土中1層目より甕口縁部が出土した。

時　期　　出土遺物より上面にあるSK－11と同じ時期の弥生時代後期前半のものと考える。

第13土坑（SK－13、挿図84、図版24・36）

位　置　　調査区の南端に位置し、急斜面に立地する。等高線に東へ0.9mを隔てSK－14となり、検出面は斜面で標高37.0～35.25mを測る。

形　態　　上面形は歪な楕円を呈し、上縁部長径2.2m×短径1.68mを測る。底面形は不整な楕円で底部長径2.05m×短径1.95m、深さは斜面の上側で1.68m、下側で0.17mである。断面形は、残存する山側で、壁の立ち上がりが内反し袋状を呈す。形態上の特徴から貯蔵穴であると考えられる。

遺　物　　埋土中より鉢口縁部が出土した。

時　期　　出土遺物より縄文時代晩期後半のものと考えられる。

第14土坑（SK－14、挿図84、図版24）

位　置　　調査区の南端に位置し、急斜面に立地する。等高線に西へ0.9mを隔てSK－13となり、検出面は斜面で標高37.3～35.8mを測る。

形　態　　上面形は不整な円形を呈し、上縁部長径1.52m×短径1.52mを測る。底面形は不整な円形で底部長径1.25m×短径1.25m、深さは斜面の上側で1.65m、下側で0.2mである。断面形は、残存する山側で、壁の立ち上がりが内反し袋状を呈す。形態上の特徴から貯蔵穴であると考えられる。

遺　物　　遺物は出土しなかった。

時　期　　遺物は出土しなかったが、西側にあるSK－13と同じ形態であり、同時期のものと考える。

第15土坑（SK－15、挿図85、図版25・36）

位　置　　調査区のほぼ中央に位置し、急斜面に立地する。前面はSS－12に切り込まれている。検出面の標高は34.7mを測る。

形　態　　残存の上面形からは隅丸方形が考えられ主軸はN－32°－Wをとると思われる。上縁部長径2.03m×短径1.32mを測る。底面形も元は隅丸方形であったと思われる。残存の底部長径1.93m×短径1.02m、壁高（深さ）は1.15mである。土層断面からは壁の立ち上がりが僅かに内反している。規模及び形態上の特徴から貯蔵穴であると考えられる。

遺　物　　埋土中より鉢口縁部が出土した。

時　期　　出土遺物により縄文時代晩期後半のものと考える。

第16土坑（ＳＫ－16、挿図85・87、図版25・36）

位　置　　調査区の北西端に位置し、西向きの斜面に立地する。等高線上を北側に約1.5ｍを隔てSS－10となり、検出面の標高は31.4ｍを測る。

形　態　　残存の上面形からは楕円形が考えられ主軸はＮ－25°－Ｅをとると思われる。上縁部長径2.75ｍ×短径1.3ｍを測る。底面形も楕円形であったと思われる。残存の底部長径2.0ｍ×短径0.9ｍ、壁高（深さ）は0.5ｍである。底面は中心部が僅かに丸みを帯び凹んでおり堆積土は灰黄褐色砂質土である。規模及び形態上の特徴から貯蔵穴であると考えられる。

遺　物　　埋土中より礫が出土した。

時　期　　出土遺物より弥生時代後期前半のものと考えられる。

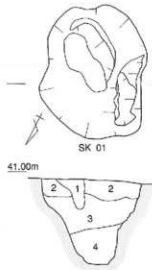
第17土坑（ＳＫ－17、挿図85、図版36）

位　置　　調査区の南端に位置し、北東から南西に向かって下る斜面中腹に立地し、南東側はSI－06山側堀込み斜面を切り込んでいる。検出面は斜面で標高31.1ｍを測る。

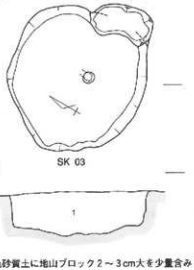
形　態　　南西側は流失し原形を留めていないが、残存の上面形からは円形が考えられ、底面形も円形と考えられる。残存の底部長径1.2ｍ×短辺0.5ｍ、壁高（深さ）は0.43ｍである。上層断面では山側の壁の立ち上がりは50°と急である。西側は失われて判明しないが、底部では西側が稍上がっており、中心部が稍凹んだ土坑であったと思われる。埋土は下層が暗茶褐色土に黄褐色地山ブロックと、炭化物を含む。埋め戻した埋土と考えられる。

遺　物　　底面上部埋土中より、弥生後期の甕口縁部が出土しているが、埋め戻し埋土に混入したと考えられる。

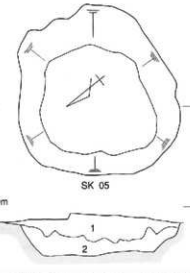
時　期　　検出した遺物は埋土中であり遺物により時期を確定することは難しい。掘り込みを見るとSI－06と同じ埋土の中に掘り込まれている。底部の径を推定すると1.2mと思われること、更に等高線状に北側に向かって近世墓が広がっていることなどから、近世の丸形桶樋埋葬墓の可能性がある。



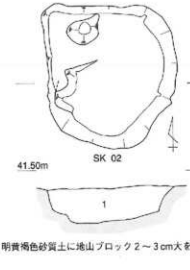
1 黒褐色粘質土に暗黄褐色砂質土を少量含みややしまる
2 淡黒褐色砂質土　しまる
3 淡黒褐色砂質土に少量の橙褐色砂質土を含みしまる
4 黒褐色土



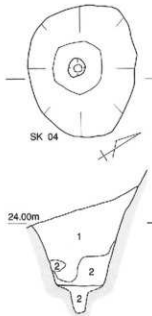
1 明黄褐色砂質土に地山ブロック2～3cm大を少量含みしまる



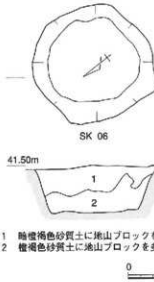
1 暗橙褐色砂質土に地山小ブロックを少量含む
2 橙褐色砂質土に地山ブロックを多く含む



1 明黄褐色砂質土に地山ブロック2～3cm大を含みしまる

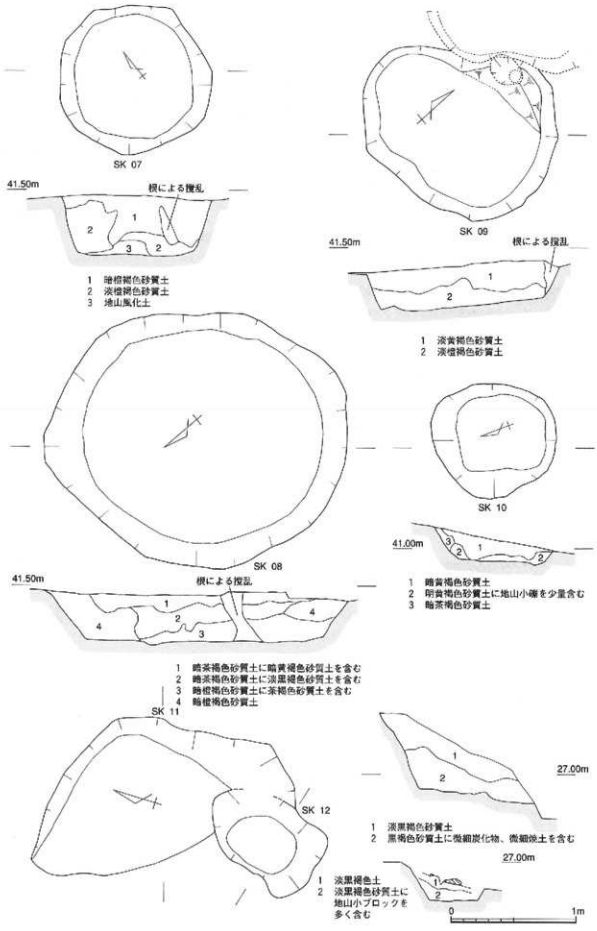


1 黒褐色砂質土　ややしまる
2 黒褐色砂質土に黄褐色砂質土の小ブロックをやや多く含みしまる

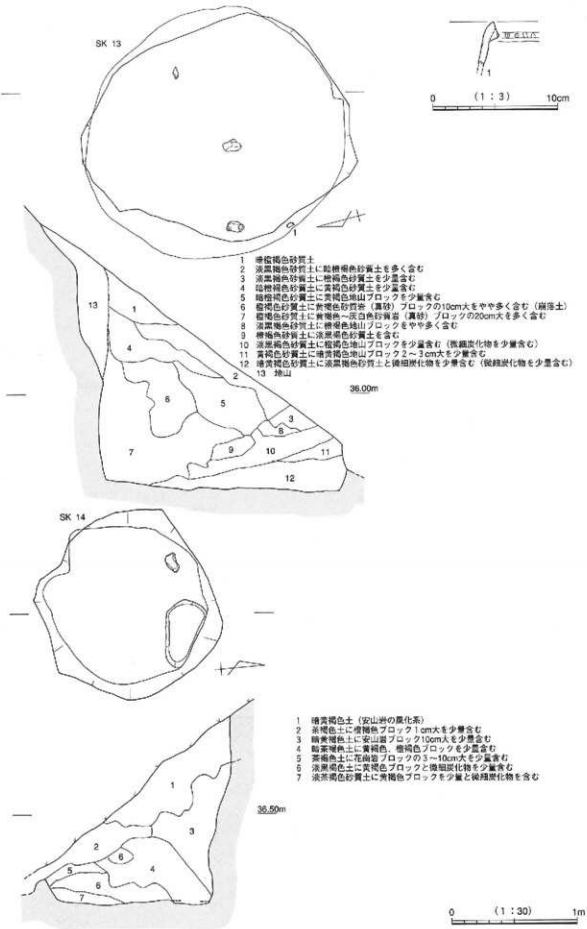


1 暗橙褐色砂質土に地山ブロックを少量含む
2 橙褐色砂質土に地山ブロックを多く含む

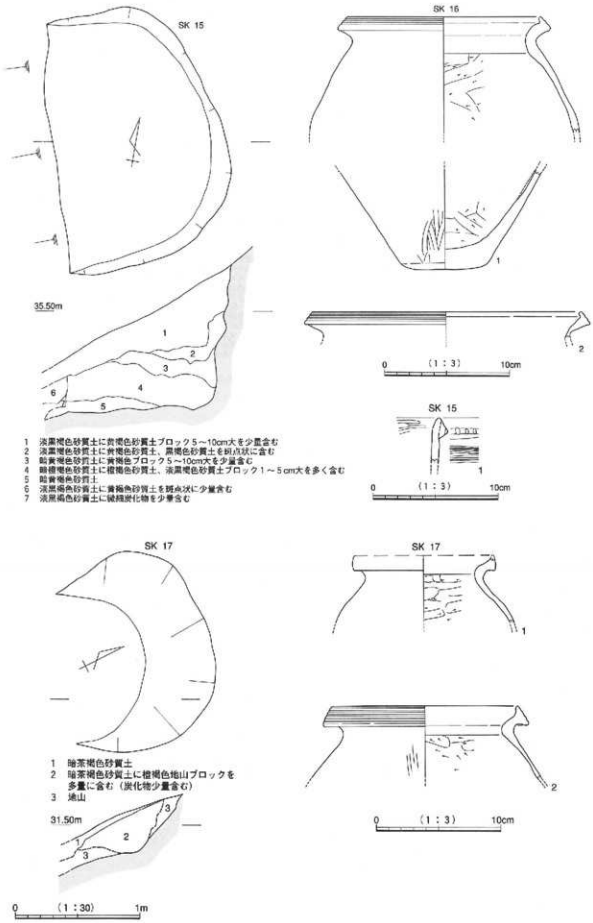
挿図82　第1・2・3・4・5・6土坑遺構図（1：30）



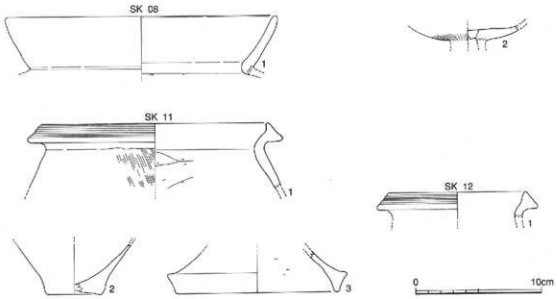
挿図83　第7・8・9・10・11・12土坑遺構図（1：30）



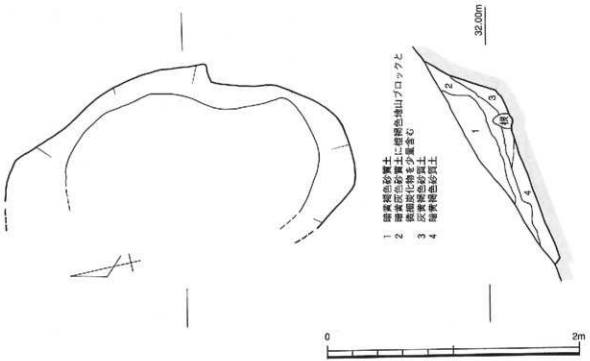
挿図84　第13・14土坑遺構図　第13土坑出土遺物実測図



挿図85　第15・17土坑遺構図・第15・16・17出土遺物実測図



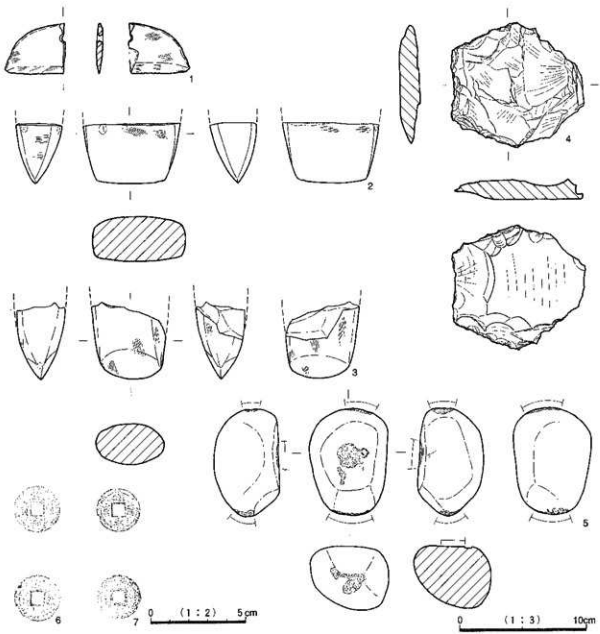
挿図86　第8・11・12土坑出土遺物実測図（1：3）



挿図87　第16土坑遺構図（1：30）

第11節　遺構外遺物

経塚鼻では遺構に伴わない遺物が出土している。個々の遺物の詳細は観察表に譲り、ここでは概略について述べる。1は磨製の石包丁で紐通し孔より折れた端部である。2は磨製石斧で両刃研ぎ出しによる刃の部分で、節理により折れたものである。3は2と同じ磨製石斧で両刃研ぎ出しによる刃の部分で破損したものである。4は亀甲形石核で打瘢剥離面を多数残している。5は敲石で安山岩質川原石で深い敲打痕を残す。6・7は古銭で寛永通寶の文字を刻す一文銭である。



挿図88　遺構外出土遺物実測図

第4章　ま　と　め

第1節　遺構について

調査の結果、本遺跡では環壕1条、古墳4基、竪穴住居跡7棟、段状遺構14基、柱穴群2ヶ所、柱穴列3列、溝状遺構5本、土坑17基、柵列跡1条を確認したが、本節では、これらの遺構を時代別に区分し、若干の考察を加えながら概観する。

1、縄文時代

調査区南端斜面で貯蔵穴の一部と思われる土坑2基を検出し、これらは位置的に2ヶ所に分かれる。1つはSK－13.14の丘陵突端部南側斜面の8合目あたりに掘り込まれたもの、もう1つはSK－15で丘陵突端西側斜面中央部7合目あたりに掘り込まれている。何れも後世の削平及び風化流失により上面を失い、底部付近のみが残るが、平面形は円形ないし楕円形を呈している。断面形はSK－13.14.15で残存の壁の立ち上がりが僅かに内反する部分があり、特徴から貯蔵穴であると考えられる。遺物はSK－13.15より縄文晩期後半の土器片が出土している。SK－14からは土器等遺物は出土していないが、SK－13に近く並んで在り、形状・規模も同様と思われ、縄文時代のものとしてここで取り扱った。またSS－01下の南西斜面よりSK－04を検出し、狩猟用の落とし穴と考えられ、遺物は出土していないが、縄文時代のものとした。

2、弥生時代前期末～後期

弥生時代の遺構として環壕1条、柵列跡1条、竪穴住居跡6棟、段状遺構8基、土坑11基、柱穴列2列を検出した。なお、柵列跡については環壕に沿うよう内側に造られており、環壕と一体をなすものとし、環壕の一部としてまとめてみることとする。

環壕の立地

本遺跡は伯太川と安田川に挟まれる丘陵支脈の一つで西に突き出る突端にあり、前面伯太川を眼下にし、北西下流域には能義平野を見下ろす眺望良好な立地にある。水田との比高差約21.9m前後で、南－西－北側の三方が急斜面となる舌状丘陵八合目から頂部平坦面にかけて造られている。頂部平坦面の標高は41.3m前後である。

環壕の形態

平面形は検出面で地形に沿って造られ弓形を呈している。規模は検出面で45mを測り、両端とも延びることを別件の発掘調査でトレンチにより確認している。断面形はV字形で、上幅最大部で6.1m、底部の幅は0.3m、深さは内壁4.2m、外壁1.6m、上幅最小部で2.8m、底部の幅は0.26m、深さは内壁1.8m、外壁0.64mを測り、底幅の最小は0.2mである。

環壕内側となる頂部の丘陵突端平坦面と環壕底部との比高差をみると、南側より北側に向かうA地点で3.34m、E地点で3.76m、G地点で4.74m、I地点で4.39m、K地点で4.16mとなり、外壁天端A'地点で2.7m、E'地点で2.3m、G'地点で3.14m、I'地点で2.88m、K'地点で2.78mとなる。

検出の環壕北端手前5m地点に幅約1.7mの土橋が環壕を分断する状態で存在する。土橋の構築

は盛り土ではなく、掘り出しの土橋といえる。両側を溝として掘り下げたことにより、土橋状に残したと考える。土橋の地山は花崗岩風化土（真砂土）と火山灰土（通称ミズマサ）との接合地脈状に造られており、軟らかで脆く風化しやすい地質である。土橋の主軸は北西－南東であり、通路としての前後については北西側はSI－01の周壁として切り込まれており、残存しない。南東側は環壕内側法面となる。この法面を南東方向に斜めに上るように花崗岩風化土と火山灰土が接し、層を成している。ここを土橋から環壕内上部への通路と考えるが、風化等により原状を留めておらず、検出面からは断定できなかった。しかし、環壕内側となる頂部平坦面突端に環壕と一体と考える柵列跡が、通路と考えられる軸方向に向かって接近していることなどから判断すると、通路が存在したと考えられる。土橋及び通路の位置については、地形・地質を考え決定したと思われる。この要因についての考察は後段に譲る。

環壕内埋土をみると、自然堆積と人為的な埋土がある。上層断面G－G′を例に大別すると4層となる。再下層第4層は環壕開削後早い段階に環壕としての機能は薄れ、人為的に埋め込まれたところ（12～17層）、第3層は環壕廃絶後長期にわたって堆積したところ（9～11層）、第2層は古墳築造時の掘削排土として堆積したところ（3～8層）、第1層は古墳築造後に堆積したところ（1～2層）である。第4層埋土には飛礫石が36個点在する。

環壕内側の丘陵頂部平坦面

検出面は舌状丘陵部の先端に留まり、平面形は下弦の月を表している。調査区外へ続く環壕の範囲に対する環壕内側の丘陵頂部平坦面の面積を考え比較すると、検出面は全体の15％程度と考えられる。検出面の南北両端間距離（長軸）約28m、東西間距離（短軸）約12mで平面積約300㎡となる。頂部平坦面には検出結果より古墳の周溝等による残丘を確認しており、変遷を考えると古墳が造られ更に後世丘陵上を平坦地に削平したことが窺える。

頂部平坦面に残る環壕築造時の遺構として柵列跡を検出している。柵列は平坦面の先端付近に検出した。北側及び3号墳西側の柵列跡は環壕内側法面上で平坦面との接点に位置していると言える。1号墳の西側にも平坦面から環壕に向かって傾斜する部分に約9mにわたって柵列跡があり、8本の柱穴を検出している。この柵列は土橋へ向かって僅かに下っており、土橋から環壕内側頂部平坦面への通路に当たる所と考えることができる。以上のことから環壕築造時北西側の頂部平坦面は柵列により囲まれていたと考えられる。また、円形ないし楕円形状の土坑が7基ある。何れも後世の掘削により残存部は僅かであり、性格を断定するには無理があるが、規模及びまとまって在ることから、環壕により守られていた貯蔵穴と考えることができる。1号墳の西側斜面部には一部環壕築造前の旧表土が残り、弥生時代前期の壺・甕等が検出されている。

柱穴群

頂部平坦面に残る環壕築造時の遺構として考えられるものに柱穴群がある。平坦面の北側に14本の柱穴が点在するが、中に2棟の掘立柱による建物が存在したと考えられる。規模は第1棟1.85m×1.64m、第2棟は1.84m×1.70mと何れも小さく柱穴も最大で25cmであり、小規模建物跡で倉庫等が他にも存在したと考えられる。時期を決定する遺物はないが、柱穴の残存状況及び小規模建物であることなどから環壕内には倉庫等の建物があったと考える。

柱穴列

頂部平坦面に残る環壕築造時の遺構として考えられるものに柱穴列がある。平坦面中央と東側に

各1列を確認し、何れも掘立柱による建物が存在したと考えられる。規模は第1列2間の3.59m、第2列は1間1.92mと何れも短く柱穴も最大で37㎝であり、小規模建物跡で倉庫等が存在したと考えられる。時期を決定する遺物はないが、柱穴の残存状況及び小規模建物であることなどから環壕内の倉庫跡と考えた。

遺物

環壕内より飛礫石、弥生土器壺・甕・鉢・把手・高坏・器台などが出土している。遺物は環壕内全体で出土しているが、西側から北側に多く見られた。先に堆積層を4層に大別しており、各層別出土状況を見る。第1層は弥生時代後期及び古墳時代前期から中期、第2層は弥生時代前期から後期、第3及び第4層は弥生時代前期から中期のものである。また環壕内側の丘陵上旧表土中より弥生時代前期の壺・甕が出土している。

経塚鼻遺跡環壕の特質

環壕は県内東部（出雲）で弥生前期末から中期前葉期のものとして松江市田和山、雲南市要害の2例があり、隣接の鳥取県西部には南部町の宮尾・清水谷・天王原・諸木、米子市尾高御建山、淀江町今津岸上、名和町人塚岩山の7例が知られているが、特に鳥取県西部に集中して見られる。ここでは環壕の持つ一般的な特性を基に本環壕の特質を考えてみたい。

◎はじめに立地を見たいが、今回の調査では区域外となっているが平坦面の続く丘陵東側に環壕が続くか、トレンチによる確認調査が別件の発掘調査事業で実施され、その調査結果から環壕の範囲は丘陵頂部にはち巻き状に両側面にも存在することが確認できた。

標高は37m前後、水田との比高差は21mで三方が斜面となる。頂部平坦面は高台であり、標高は41.3m前後、水田との比高差は26mで日照は良好であるが、風は強い。飲用水は麓に求めることになり、居住地としては不適地と言える。眺望は良好の地であり、見張り所・砦といった防御に適した地と考える。

◎形態をみると、本調査区検出面では弓形となるが、先に述べた別件調査による環壕範囲確認調査で検出された箇所をつなぐと南北両端とも東へ延び、平面形はU字形となると考えられる。断面形はV字形であり、他例と通有するタイプである。掘り込みは丘陵頂部平坦地から丘陵斜面部に変わる屑部に築造されており、全体的に外壁に比べ内壁は高位置から始まり、高さを比較すると2～2.5倍となる。

◎環壕の用途については戦闘防御施設・獣類防御施設・宗教的特殊区画・権威の象徴・拠点集落など様々なことが考えられるが、本環壕については全容ではなく一部の検出面である。これにより用途について言及することには無理があるが、検出結果により考察してみたい。環壕は丘陵先端頂部を囲み丘陵奥部へ続き、山容に対し鉢巻きをした様相であり、台地状頂部を斜面と区画する構造物であることは確実である。環壕の外側から内側へ進入することは動物でも困難と考えられ、仮に外壁から内壁に飛び移ることができても、法面は急峻であり登ることは不可能である。また法面上には機列があり、防御を更に強固にしている。加えて埋土中より飛礫石を総数389個、頂部先端部より40個以上が出土しており、戦闘用具と考えることができる。なお埋土中より出土の飛礫石は半数以上が古墳造成時に掻き出されたと考える層位で、土橋近くより多くを検出しており、土橋より環壕内側への通路を意識し機の近くに置かれていたものであったとも考えられる。土橋から環壕内側上部へ続く路線を見ると、花崗岩風化土（真砂土）と火山灰土（通称ミズマサ）が堆積した地

脈上に遺られており、軟らかで脆く風化しやすく浸食を受けやすい土質であることが判る。地脈を造るこの土層は、山頂北寄りから北側斜面中腹にかけて斜めに大きく層を成している。この様な所に通りを設けることは偶然ではなく、意図的に選定したと考えるべきと思われ、溝とした場合地脈で強度的に弱いとしたことが考えられる。防御を意識した通路としての利用であれば、使用に耐えることが可能とも考えられるが、擬似的通路の可能性も考えた。これらのことから戦闘防御を目的としたもので、比較的大規模地域間での食糧事情も要因の1つとした争乱に備えたものではなかろうか。

◎環壕築造と放棄の時期については、下層出土土器から弥生時代前期末に開削され、その後、中期前半以降は比較的早くに環壕としての機能は薄れ、人為的に埋め込まれた。その後、後期前半頃は溝は埋まりきらずに窪地として残っていたことが判り、環壕として機能していた期間は前期末から中期前半と短期間であったことが窺える。

以上、検出の遺構・遺物に基づき本環壕の特質と思われる事柄について述べてみたが、環壕がどのような目的によって開削され、また造らなければならなかった当時の社会情勢についてはどうかなど具体的に考えてみたかったが、環壕の内側は後世の削平等により築造当時の遺構は消滅してしまっていること、更に調査範囲は全体の一部に止まり、成果としてはあまりにも断片的であり、本質を窺うことができなかった。ただし、前期末から中期にかけて本遺跡を含め、鳥取県東部町（隣町）に4例と集中してみられることから、中山間地における食糧事情等を起因とした、社会情勢の変化の優劣は顕著であり、やがて、中期に入り、地域間の対立、或いは争乱は鎮静化したものであろう。いずれにしても、島根県では発見例の少ない弥生時代環壕の新事例として当地方の弥生時代前半の集落のあり方を考える上で貴重な事例となった。

竪穴住居跡

検出した弥生時代の竪穴住居跡は建替え等は含まず6棟であり、時期は弥生時代後期前半と後半の二時期である。いずれも斜面を造成して造られており、流失等により床面の残存が5割以下となるものが3棟で考察に難を残している。平面形は総じて円形を呈していると考えられ、SI－02とSI－06は床面の残存率も良く、4本柱に中央ピットを持つ形式である。SI－04は6本柱の可能性が高く中央ピットを持っている。各住居跡の標高は37.5m、35.2m、33.5m、33.4m、30.0m、24.0mであり、上下間の比高差は13.5mとなる。山容の中腹以上にある住居跡はSI－01～02·04～06であり、中腹以下にあるのはSI－07のみである。SI－07は建替え・拡張が行われ3棟の存在が考えられる。

後期前半のものはSI－02・05・06・07の4棟でSI－05を切り込んだSI－04は後期後半である。平面形もSI－04が隅丸多角形であるのに対し他は全て円形である。SIは山陰に通有の中央特殊ピットを持ち築造当初は何かしら唯一目的であったにせよ、当地では炉を含めて、時季により多目的であった可能性が考えられる。

当地では調査区の関係から斜面部でしか竪穴住居跡はみつかっていないけれども、後期前半にはSI－02・05・06・07の4棟はそれぞれほぼ等間隔に距離を置き配置されている。一時期に営まれた集落を形成するものと言えよう。SI－04は調査区では後期後半に単独で営まれるように見えるが、山陰では集落は最盛期を迎える時期でもあり、この1棟を以ってのみでは状況は判断できない。いずれにしても各地で丘陵上に集落が出現する時期であり、丘陵上に住まわざるを得ないと言う社

会情勢の不安定さや土地条件の制約があったものと考えられる。

段状遺構

検出した弥生時代の段状遺構は12基であり、時期は弥生後期前半～後半である。いずれも斜面を造成して造られており、流失等により盛り土部分は残存せず、地山の加工面を残すのみである。平面形は等高線に横長隅丸の長方形を呈していたと考える。SS－01・SS－02a・SS－02b・SS－10からは柱穴を検出し、SS－02b・SS－13については直列する柱穴を検出するが、いずれも建物跡の規模・棟数を判断することはできなかった。またSS－04・SS－06・SS－07・SS－08・SS－09・SS－11・SS－12・SS－14からは柱穴を検出していない。各段状遺構の標高は34m、36.5m、36.3m、24.8m、31.7m、34.2m、33.8m、34.4mであり、水田との比高差は21.4～9.7m、となる。山容の中腹より下にあるのはSS－01・SS－02a・b・SS－08・SS－13である。

土坑

弥生時代の土坑として考えられるものは、環壕内側の丘陵頂部平坦面より検出した7基である。出土遺物により弥生時代のものとして確定できるものはSK－12の1基のみで、底部は楕円形であるが上部は後世の掘削を受けており、遺構の性格を考えるには難を残している。規模及び周辺の状況から見ると竪穴住居跡及び段状遺構の近辺に位置しており、形態上の特徴を考えると貯蔵穴であると思われ、住居跡と一体をなすものであると考える。

3．古墳時代

古墳

検出した古墳は4基で古墳時代前期末～後期である。1～3号墳はいずれも円墳で丘陵頂部に築かれているが4号墳は西側斜面の7合目附近にあり、頂部古墳との比高差は9m弱である。いずれの古墳も後世の掘削を受けており築造時の墳丘盛土は3号墳に僅かに残るのみであり、墳形及び規模は地山を掘り込んだ周溝により形づくられる墳丘基盤面により推定した。時期及び新旧関係は周溝の切り合いと出土遺物により1号墳は前期末～中期前半、2号墳は切り合いにより1号墳築造以降で3号墳築造前となり、立地条件等から古墳時代中期頃とみて大過なかろう。築かれた位置を考えると1号墳及び2号墳は墳丘基盤が地山として頂部に残り極端に先端部に築かれていない。対して3号墳は先端部へ盛土を施し墳丘基盤を築いており出土遺物より時期は後期（6世紀後半）である。4号墳の検出は周溝のみであり長さ9.0mを測る。溝は後方斜面に掘り込まれ上幅2m、下幅0.35m、深さ1.2mを測る。築造は前方斜面を盛土し墳丘を形成したと考えるが多くは流失したと思われ、また、後世掘削を受けたと考えるが近世以来墓地として帯状に平坦地が造成されており、更に近現代の墓地整備により大きく掘削を受け周溝を残すのみとなったことがわかる。一辺10m前後の方墳と思われる。主体部は全く確認されず、周溝底部直上より須恵器壺坏が4点出土し時期は後期（6世紀前半）である。出土の須恵器は身3点、蓋2点である。内、3点（身1筒・蓋2筒）は総て受口を上に塊まって出土しており意図して置かれたものと思われ埋納・供献など儀礼的意味を持つものと考えられる。検出した4基の古墳は時代的にみると中期から後期へと1→2→4→3号墳の順に築造されている。立地でも丘陵頂上→斜面部→丘陵端部へと変遷する。

竪穴住居跡

検出した古墳時代の竪穴住居はSI－03の1棟であり、時期は古墳時代前期である。斜面を造成

して造られる前面となる盛土部分は流失したと考えられ、残存する形状は横長の長方形を呈している。もとは側溝が側壁下を全周したと考えられ、規模は1辺4.85mの方形で推定床面積は23.52㎡と考えられる。古墳時代の竪穴住居跡はこの1棟を確認するのみであるが調査区外となる北東側には等高線上に同様の地形が続き存在の可能性を残している。いずれにしても、弥生時代後期に続き、なお丘陵上に住まうと言う土地条件の制約や世情の不安定があったのではなかろうか。

段状遺構

検出した古墳時代の段状遺構は2基であり、SS－03とSS－05である。SS－03の時期は古墳時代中期である。SS－05は出土遺物が弥生時代後期～古墳時代前期の物が出土しているがここで扱った。SS－03からは11本の柱穴を確認し中には4本・2本の列を成すものであり建物跡の存在が考えられたが、前面が流出しており全容を知ることはできないが掘立ての住居跡等が存在したと考えられる。SS－05は中央をSI－03によって切り込まれ造成時の状況を知ることはできないがSI－03の床面より浅く、柱穴は検出されなかった。

第2節　遺物について

経塚鼻遺跡は縄文時代晩期から江戸時代にかけての複合遺跡である。時代的にみると所々、欠落する時もあるものの、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、玉類、鉄器、古銭等、様々な器種が出土している。その量はコンテナ60箱以上にのぼり、古い土器程風化の度合いが著しい。ここでは器種ごとに分類し、若干の考察を試みたい。

1、縄文土器

鉢が2点出土している。

鉢（SK－13－1・SK－15－1）

SK－13－1は外傾し、口縁部に刻み目突帯文を貼り付ける。SK－15－1はほぼ直立し、刻み目突帯文を貼り付ける。時期的にみると、共に縄文時代晩期後半である。

2、弥生時代

広口壺、長頸壺、無頸壺、甕、鉢、高坏、鼓形器台、蓋、土玉が出土している。

A、弥生時代前期末～中期中頃（ほとんどが環濠出土である）

広口壺（B_1－1・B_2－4・6・BY－1・T_2Y_2－1、旧表土中－1）

B_1－1は、扇斗状の口縁で、口縁端面に鋸歯文。内面に櫛描波状文を入れ、小さな円孔を穿つ。

B_2－4は、外反する口縁で端部は角張り、ヘラ描斜格子文を入れる。頸部に多条の櫛描直線文を巡らす。

B_2－6は、口縁下端に垂直する稜を持つ。

BY－1は、口縁部欠損、頸部に4条以上のヘラ描直線文を巡らす。

T_2Y_2－1は、頸部の破片。

旧表土中－1は、頸部～体部の破片で頸部に5条のヘラ描直線文。

長頸壺（B_2－2・B_2－3）

B_2－2は、やや外反する口縁で端部角張る。頸部に8条以上のヘラ描直線文を巡らす。

B_2-3は、口縁部欠損。頸部～体部に多条の櫛描直線文、刺突文、櫛描波状文、刺突文と上から下に向かって交互に、賑々しく飾る。底部は厚く平坦。

無頸壺（B_2-5）

B_2-5は、口縁部に3条の凹線文。肩部に二段の櫛状工具による刺突文を巡らす。内面ハケ調整。

時期的にみると前期末のものはBY－1・旧表土中－1・B_2-2。中期前半はB_1-1・B_2-4・B_2-3、中期中頃はB_2-5と考えられる。なお、B_2-3は胴部があまり張り出さないタイプの長頸壺で、口頸部から胴部中位まで余すことなく多条の櫛描直線文、刺突文、櫛描波状文、刺突文を交互に賑々しく飾っている。類例は飯梨川最下流域の磯近遺跡出土のものに求めることができるが、B_2-3はそれ以上に装飾は派手である。

甕（$B_1-2\cdot3$、$B_2-1\cdot8\cdot9$、BY－$2\cdot3\cdot4$、T_1Y_1-1、$T_2Y_2-2\cdot3$、旧表土中$2\cdot3\cdot4$）

Ⓐ口縁形態はゆるく外反するもの～やや強く外反するもの

B_1-3は、口縁端部に刻み目を入れる。

B_2-8は、口縁端面に1条の浅いヘラ描沈線文を入れる。

BY－2は、1条のヘラ描直線文を巡らす。

T_1Y_1-1は、口縁端部は角張り、頸部に2条のヘラ描直線文。

T_2Y_2-2は、口縁端部に刻み目。

旧表土中－2は、口縁端部角張る。

旧表土中－3は、口縁端部に刻み目。

旧表土中－4は、口縁端部に刻み目を入れ、頸部に4条のヘラ描直線文を巡らす。

Ⓑ口縁形態は逆L字状口縁で、端部に突帯を貼り付け、強く屈折するもの。

B_1-2、B_2-1、T_2Y_2-2、B_2-9は、口縁端部に刻み目、頸部に6条のヘラ描直線文、直下に刺突文。

BY－4は、体部はやや張り出し、頸部に多条の櫛描直線文。体部上位に刺突文。

BY－3は、体部はやや張り出す。

鉢（$B_2-11\cdot10$）

B_2-11は、口縁部は逆L字状に強く屈折し、体部は大きく張り出す。

B_2-10は、口縁部はゆるく外反し、端部に刻み目を入れ、頸部に16条のヘラ描直線文、刺突文を巡らす。

時期的にみると、中期前半はBY－4、他は全て前期末と考えられる。当遺跡では前期の外面頸部無文にはじまりヘラ描直線文の1～3条から16条へと多条化が進み、中期に入ると櫛描直線文の出現、多条化と言う流れを追うことができる。

B、弥生時代後期前半～後半

この時期の土器は実測掲載した数でも70点以上にのぼり、大半のものが後期前半である。ここでは上に、竪穴住居跡や段状遺構、溝、土坑から出土したものについて記述する。

壺は口縁形態から大まかにA～Gまで7分類した。

壺A、口縁端部は上下に拡張され、その平坦面が内傾するもの

SI－02－6は、平坦面に3条の凹線を巡らし、頸部から肩部にかけてヘラ描直線文と鋸歯文を交互に巡らす。肩部は大きく張り出し、小さい平底を持つ。頸部以下ケズリ。

SI－06－1は、4条の凹線文、口縁部直下に3条のヘラ描直線文を入れる。ナデ肩で頸部以下ケズリ。

壺B、口縁端部は上下に拡張され、平坦面が直立するもの。

SI－02－1は、2条の凹線文を巡らし、頸部に3条のヘラ描直線文、直下に刺突文を入れる。

壺C、口縁端部は上方に短く拡張され、平坦面が内傾するもの。

SI－05－1は、平坦面に2条の凹線文、頸部は短め。

壺D、口縁端部は下方に短く拡張され、平坦面が内傾するもの。

SI－07－1は、外面無文で、頸部は短め。肩部以下ケズリ。

壺E、複合口縁で平坦面がやや内傾するもの。

SI－01－1は、短めの複合口縁で、小型。

壺F、複合口縁で平坦面が直立するもの。

SS－01－1は4条の凹線文、頸部にヘラ描直線文。

壺G、複合口縁で外傾するもの。

SS－04－1は、外面無文。

環壕BY－8は、外面に櫛描文を巡らす。

時期的にみると、A～Eは後期前半、Fは後期前半～中、Gは後期後半である。

甕は口縁形態から壺同様大まかにA～Eまで5分類した。

甕A（口縁端部は上下に拡張され、その平坦面が内傾するもの）

SI－02－4は、口縁端部が下方に比べ上方に長めに拡張され、その外面に3条の凹線文を巡らす。肩部に刺突文。頸部以下ケズリ。

SI－05－2は、外面に4条の凹線文、頸部以下ケズリ。

SS－13－1は、4条の凹線文、頸部以下ケズリ。

SD－04－3は、4条の凹線文、肩部はやや張り出す。頸部以下ケズリ。

SK－11－1は、5条の凹線文、なで肩で、頸部以下ケズリ。

SK－17－2は、4条の凹線文、頸部以下ケズリ。

環壕BY－5は、3条の凹線文、肩部以下ケズリ。

甕B（口縁端部は上方に高く拡張され、平坦面が内傾するもの）

SI－06－4は、口縁外面に3条の凹線文、肩部以下ケズリ。

SI－07－2は、3条の凹線文。

SK－16－1は、上方に拡張されるが、高くはない。外面に2条の凹線文、肩部以下ケズリ。

環壕B_1－4は、4条の凹線文、肩部以下ケズリ。

環壕B_2－12は、4条の凹線文、肩部以下ケズリ。

甕C（口縁端部は下方に高く拡張され、平坦面は内傾するもの）

SI－06－2は、口縁外面に3条の凹線文、頸部以下ケズリ。

時期的にみると甕A・B・C・Dは弥生時代後期前半、Eは後期後半である。

甕D（複合口縁で、平坦面は直立するもの）

SS12－2は口縁外面に4条の凹線文。頸部以下ケズリ。

SS02－b－1は2条の凹線文。頸部に刺突文を巡らす。頸部以下ケズリ。

甕E（複合口縁で、平坦面は外傾するもの）

SS－04－1は外面無文。

SS－12－1は外面無文。

高坏（SI－07－4、環壕B_2－23、環壕T_1Y_1－3、環壕BY－11, SK－11－3）

SI－07－4は、脚柱部で脚裾部に上下2段、5方向円孔を穿つ。

環壕B_2－23は、坏部で複合状に稜を持ち、口縁端部平坦面に3条の凹線文を巡らす。

環壕T_1Y_1－3は、脚部で円孔を穿つ。

環壕BY－11は、脚部。

SK－11－3は、脚部。

時期はSI－07－4、環壕B_2－23が後期前半である。

鉢（環壕BY－10）

環壕BY－10は、「くの字」口縁で平底。頸部に円孔を穿ち、肩部刺突文。頸部以下ケズリ。後期後半。

蓋（環壕BY－12）

環壕BY－12は天井部突出し、後期後半。

鼓形器台（環壕DY－3、環壕DY－4）

環壕DY－3は、受部の破片で、直立、複合状を呈し下端の稜は斜め下方に鋭く突出。外面擬凹線文。

環壕DY－4は、受部、外傾、複合状を呈し、下端の稜は下方に短く突出。外面擬凹線文。後期中頃。

土玉（環壕DY－5）

環壕DY－5は、手捏成形による球形。

以上、弥生時代後期前半から後半までの土器について概観したが、甕、壺などの口縁形態は後期前半では口縁端部が上下に拡張され、その平坦面が内傾すると言う中期後半の系譜を引くもので、外面には2条～4条の凹線文を巡らすものが多い。内面の削りは肩部から頸部への流れがみられる。前半新相では口縁端部が直立するいわゆる複合口縁が出現し、続く中頃～後半には複合口縁が外傾、外反している。内面調整は頸部以下ケズリである。

3、土師器

壺（SD－05－1）

SD－05－1は外反気味に開く複合口縁で、端部はやや丸味を持つ。下端の稜は甘い。

甕（1号墳－2、3号墳－3・4、SI－03－1・2・3、SD－03－1・2・3、SD－05－2、SK－08－1・4）

1号墳－2は、やや外反気味の「くの字」口縁、端面丸い。頸部以下ケズリ。

3号墳－3は、外反する「くの字」口縁、端部は丸みを持つ。頸部以下ケズリ。

3号墳－4は、小型の「くの字」口縁。

SI－03－1は、やや外傾する複合口縁で、端部は外方に短く突出し丸みを持つ。下端の稜は外方に突出。

SI－03－3は、外傾する複合口縁で、下端の稜は丸みを持つ。

SI－03－2は、外傾する複合口縁で、端部はすぼまる。下端の稜は外方に突出。

SD－03－1は、外傾する「くの字」口縁、端部は丸みを持つ。

SD－03－2は、やや外傾する複合口縁で、端部は丸い。下端の稜は水平方向に鋭く突出。

SD－03－3は、小型の球状体部で口縁部欠損。

SD－05－2は、やや外反気味に開く複合口縁で、端部は角張る。下端の稜は水平方向に突出。

SK－08－1は、やや内湾気味に開く「くの字」口縁。

SI－03－4は、外傾する複合口縁で、端部はすぼまる。下端の稜は水平方向に大きく突出。

小型丸底壺（1号墳－6・7）

1号墳－6は、口縁は内湾気味に大きく外方に開き、端部はすぼまる。頸部のくびれは強く、体部は倒卵形で小さい。頸部以下ケズリ。

1号墳－7は、口縁部欠損。体部は小さく倒卵形。

高坏（1号墳－3・4、3号墳－5・6・7・8・9、SS－03－1、SK－08－2）

1号墳－3は、椀状の坏部。内外面ミガキ。

1号墳－4は、脚柱部。三方円形透かし孔穿つ。

3号墳－5は、坏底部～脚柱部。二方向円形透かし孔。

3号墳－6は、坏部破片。口縁部欠損。

3号墳－7は、脚部。

3号墳－8は、脚部。

3号墳－9は、脚部。

SS－03－1は、脚柱部、円形透かし孔。

SK－08－2は、坏部破片、口縁部欠損。

鼓形器台（SI－03－6）

SI－03－6は、ハの字状に開く脚台部。

坏（1号墳－5）

1号墳－5は、椀状の坏部。

小型丸底鉢（SI－03－5）

SI－03－5は、外反する短めの複合状口縁を持ち、体部は浅く湾曲し、内外面ミガキ。

時期的には古墳時代前期前半が甕SD－03,1・2・3、SK－08,1でいわゆる小谷2式に比定される。古墳時代前期中～後半が壺SD－05,1、甕SD－05,2、SI－03,1・2・3・4、鼓形器台SI－03－6、小型丸底鉢SI－03－5で小谷2式。古墳時代前期末～中期前半が小型丸底壺1号墳－6で、口縁部の外傾度合、頸部の強いくびれ、小型の体部の特徴から新相を示すものと位置付けた。古墳時代中期後半は高坏1号墳－3、坏1号墳－5が挙げられる。いずれも坏部は椀状である。古

墳時代後期後半は共伴須恵器TK－43併行期より、壺3号墳－3・4、高坏3号墳－5・6・7・8・9が挙げられる。

当遺跡で特徴的なものは古墳時代前期中～後半の小型丸底鉢SI－03－5である。丁寧に体部内外面全面をヘラミガキし、精巧で堅固な作りである。布留式土器中段階のものであり、類例は夫敷遺跡下層出土土器に求めることができる。

4、須恵器

坏身、蓋坏、坏が出土している。

坏身（4号墳－1・2・5、3号墳－1b・2b・10b・11・12・13）

4号墳－1は立ち上がりは比較的高く、内傾し、肉薄で端部は尖る。受部は短めで端部はにぶい。深めで丸い体部。丁寧な回転ヘラ削りが体部の1/2程施される。受部径13.2cmと大型。

4号墳－2は立ち上がりは比較的高く、やや内傾し、内面に段を持つ。受部は水平方向に突出し、丸味を持つ。ヘラ削り1/2、受部径14.4cmの大型。

4号墳－5は立ち上がりは短めで、内傾し、端部は丸味を持つ。受部は水平方向に大きく突出し、後は尖り気味。ヘラ削り1/2未満、受部径14.6cmの大型。

3号墳－1bは立ち上がりは低く、やや内傾し、端部はすぼまる。受部はにぶく、底部中心からの回転ヘラ削り、1aとセット関係。

3号墳－2bは立ち上がりは低く、大きく内傾し、端部はすぼまる。受部はナナメ上方に突出し、端部は丸味を持つ。中心から3周半のヘラ削り。2aとセット関係。

3号墳－10bは立ち上がりは比較的高く、内傾し、端面は角張る。肉厚で堅固である。受部はにぶく、体部は深めで丸い。中心から4周のヘラ削り。受部径13.4cmと大型である。「X」のヘラ記号有り。

3号墳－11・12・13は破片で、11は立ち上がりは比較的高く、中心からのヘラ削り。ヘラ記号有り。12は立ち上がりは低い。13は立ち上がりは低く、内湾し、肉薄で端部は尖る。

時期的にみると4号墳1・2は陶邑編年MT－15型式並行で6世紀前半。5はTK－10型式並行。1b・2b・10b・11・12はTK－43並行で6世紀後半。13は形態上は新相を呈し、TK－209以降7世紀代のものと考えられる。

蓋坏（4号墳－3・4、3号墳－1a・2a・10a）

4号墳－3は口縁部はやや内傾し、端部内面に段を持つ。天井部と口縁部との境はにぶい稜で区別される。天井部に1/2を占める割り合いの回転ヘラ削り。口径13.7cmの大型。

4号墳－4は口縁部は直立し、端部内面に段。天井部と口縁部の境は1条の深い沈線により区別。天井部1/2のヘラ削り。口径13.5cmの大型。

3号墳－1aは口縁部は直立し、端部は尖り、内面ににぶい段。境は強いナデによる凹みを造り出し区別。天井部は低く、中心から3周半のヘラ削り。ヘラ記号有り。

3号墳－2aは口縁部はやや外湾気味、端部は尖り、境はにぶい稜で区別される。中心からのヘラ削り。口径14.2cmの大型。

3号墳－10aは口縁部は内傾し、天井部と口縁部との境は天井部中心からの回転ヘラ削りを天井部全面に施し、その終了箇所を以って、にぶい稜を造り出し区別している。器壁も肉厚である。ゆがみがあるものの最大径14.7cmの大型。

時期的にみると4号墳3はMT－15型式並行。4はTK－10型式並行。3号墳1a・2a・10aはTK－43型式並行で、前述1b・2b・10bとそれぞれセット関係である。なお、10a・10bについては、この時期、器の大きさは小型化し、続くTK－209並行期には最も小型化する。10a・10b共にそれぞれ14.7cm、13.4cmと極めて大型であり、形態、特に10aの天井全面回転ヘラ削りと言う手法上の特徴は当地域ではみられないものである。他地域からの搬入品と考えられる。その地域については今のところ調査中であるが、この時期鳥取県東部、特に旧河原町、旧郡家町周辺での古墳調査等で大型化したものが出土している。これらの出土品との対比は今後の課題としたい。

坏（3号墳－14）

3号墳－14は坏部は椀状で、やや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸味をもつ。平底で、ハの字形に開くやや高めの高台を貼り付ける。内端面で接地。時期的には、つまみ付の蓋の口縁端部が短く折り曲げられ下垂する頃、7世紀末～8世紀初めとみて大過なかろう。

5、円筒埴輪

1号墳8、3号墳15～25、4号墳6が出土しているが、これらのものは人為的二次移動があったものと考えられる。これらのうち1号墳－8は全体の60%、ほぼ完形品は3号墳－18のみである。全て普通円筒埴輪である。

1号墳－8は、口径21cm、器高台40.6cm2条突帯3段からなり口縁部はやや外傾し、口縁端部は「コ」の字形。突帯は断面台形状で水平方向に高く突出。2段目に円形透かし孔を穿つ。外面全面にナデ調整が施され、第1次調整タテハケはみられない。底部は薄く調整し、端部は丸味を持つ。

3号墳－18は、口径30.0cm、器高41.2cm（復元高）、2条突帯3段からなり、2段目中央に2個の対向する円形透かし孔を穿つ。口縁部は上方に向かってやや外反気味に開き、口縁端部で外方にやや折り曲げる。断面「コ」の字形で、端面は強くナデ凹ませる。突帯は断面台形状で水平方向に高く突出する。底部は薄く調整し端部はすぼまる方向をとる。外面1～3段まで第1次調整タテハケを施す。内面1,2段にヨコハケメ。

3号墳－15は、1段目の破片で、口縁部はやや外傾し、端部は丸味を持つ。突帯は断面台形状で水平方向に突出する。外面第1次調整タテハケ、内面ナナメハケメ。

その他のものは全て口縁断面「コ」の字形。高く突出する突帯を持ち、外面第1次調整タテハケを施している。

時期的にみると口縁端部形態「コ」の字形、高く突出する突帯、二段目円孔、底部再調整により薄く尖り気味。いわゆるカット技法はみられない。外面第1次調整タテハケがみられるものがほとんどで川西埴輪編年V期に比定され、6世紀後半頃のものと思われる。なお、1号墳－8は外面全面ナデでタテハケ調整はみられない。3号墳－15は口縁端部形態が丸く納められており、この中でも古相を示すものと言えよう。

6、鉄器

3号墳－F1は、残存長9.6cmの刀子で刀身長約5.0cm、茎部4.6cmの小型。茎部に木質、刀関は明瞭に残る。

3号墳－F2は、刀子で刀身長11.0cm、茎部5.9cmのフクラ付。鞘の一部の木質が認められ、

いわゆる呑口式と考えられる。両関で刀関の残りは良好であるが、棟関の残りは良くない。

1号墳－Ｆ１は、残存長5.9cmの鉄鏃茎部。

2号墳－Ｆ１は、残存長3.2cmの柳葉式鉄鏃鏃身切先部。幅2.6cm。

7、玉類

3号墳主体部から出土している。

勾玉はめのう製で長さ2.2cm、幅1.7cm。

切子玉は水晶製断面六角形。長さ2.9cm、幅1.7cm。

小玉は4点出土している。めのう製1点。ガラス製3点。

8、銅銭

寛永通宝2点が出土している。径2.2cmのものは18世紀代、他は17～18世紀代と考えられる。

9、石器

旧表土中－Ｓ１は敲石（安山岩）敲き打痕有り。

遺構外－5は敲石（安山岩）卵形で両端面に敲き打痕有り。

SI－07－Ｓ１は敲石（安山岩）敲き打痕有り。

SI－01－Ｓ１は砥石（黒雲母花崗岩）直方体で断面梯形。砥面は平坦で、使用条痕3面に有り。

遺構外－1は磨製石包丁（安山岩）両刃で紐通し孔を穿つ。

遺構外－3は磨製石斧（安山岩）研磨により側面稜線が明瞭に残る。条痕有り。

遺構外－2は磨製石斧（蛇灰岩）研磨により側面稜線が明瞭に残る。条痕有り。

遺構外－4は石核（安山岩）フィッシャー、リング痕が有り。

なお、石材については当遺跡周辺に普遍的に見られるものである。当遺跡の岩脈については母岩は深成岩（黒雲母花崗岩）からなり、断面の露出した所には地表から地下に向かって斜め方向に深成岩の急冷相と噴出岩（火山岩）の徐冷相による貫入脈状層がみられる。遺構外2はこの脈石に酷似しており、やや軟質で表面全体に蛇の皮模様のようなまだらが浮かび出ている。

註・参考文献

「日本海をのぞむ弥生の国々　～環壕から見える弥生社会とは？～」
第３回妻木晩田弥生文化シンポジームテキスト
鳥取県教育委員会　2002年
「宮山古墳群の研究」　島根県教育委員会・島根県古代文化センター　2003年
「清水谷遺跡」　鳥取県西伯町教育委員会　1992年
松本岩雄・正岡陸夫　「弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編」1992年
「妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅲ」　大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団
鳥取県大山町教育委員会　2000年
「伯太町誌」伯太町　2000年
安来市造山古墳群発掘調査報告書　島根県安来市教育委員会　1992年
大王原遺跡発掘調査報告書　鳥取県会見町教育委員会　1994年
宮尾遺跡発掘調査報告書　鳥取県会見町教育委員会　1982年
今津岸ノ上遺跡発掘調査報告書　鳥取県淀江町教育委員会　1992年
都出比呂志「環壕集落の成立と解体」『考古学研究』　1983年
藤田三郎「弥生時代の土坑について」『考古学研究』　1983年
平井典子「中四国における弥生時代の石器について」『考古学ジャーナル』　1988年
川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64－2　1978年
寺西健一「円筒埴輪の地域性」鳥取県博物館報告　1985年
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年
山本　清「山陰の須恵器」（島根大学開学10周年記念論文集）　1960年
渡辺貞幸「古墳時代の出雲」『明日香風』22号　1987年
松山智弘「小谷式再検討」『島根考古学会誌』第17集　2000年
大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994年

遺物観察表

経塚鼻遺跡出土土器遺物観察表（下線は復元径）

遺構名	博図番号	器種	口径(cm)	現高(cm)	底径(cm)	形態・文様の特徴	調整（内面）	調整（外面）	色調	備考
1号墳	8-1	土師器 鉢	36.2	11.4		複合口縁	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ	淡橙褐色	赤色物塗布
1号墳	8-2	土師器 甕	14.6	13.4		「くの字」口縁	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ4～5条／cm	淡橙色	内外面煤付着・赤色物塗布・ゆがみあり
1号墳	8-3	土師器 高坏	14.8	7.4			ヨコナデ・ヨコヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラミガキ	橙褐色	内外面赤色物塗布
1号墳	8-4	土師器 高坏		5.2	脚端部 9.7	円形透かし3方	ヨコナデ・一部指頭圧痕・ヘラケズリ	不整方向の指ナデ・ヘラミガキか	橙褐色～黄褐色	内外面赤色物塗布
1号墳	8-5	土師器 坏	11.1	4.9			ナデ後一部ヘラミガキ	ナデ後ヘラミガキ	赤橙色	
1号墳	8-6	土師器 小型丸底壺	9.8	7.1			ヨコナデ・ナデ後ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ7条／cm	橙褐色	
1号墳	8-7	土師器 小型丸底壺		3.5			摩滅により不明	摩滅により不明	白橙色	かなり風化している
1号墳	9-8	普通円筒埴輪	21.0	40.6		口縁部はやや外傾し、口縁端部は「コ」の字型をとり、端面は凹面を成す。突帯は断面台形を呈す。第2段に透かし孔を穿つ。	ナデ	ナデ	橙茶色	一段目ヘラ記号
3号墳	15-1a	須恵器 坏蓋	12.5	4.0		外面天井部にヘラ記号×	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	淡青灰色	
3号墳	15-1b	須恵器 坏身	10.7	4.4			回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	淡青灰色	
3号墳	15-2a	須恵器 坏蓋	14.2	4.4			回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	青灰色	
3号墳	15-2b	須恵器 坏身	12.4	4.1			回転ナデ・ランダムなナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	暗青灰色	
3号墳	15-3	土師器 甕	20.0	5.3		単純口縁	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナナメハケメ5条／cm	橙褐色	
3号墳	15-4	土師器 甕	9.7	2.4		単純口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	暗橙褐色	外面煤付着
3号墳	15-5	土師器 高坏			坏部2.1 脚部4.7	坏底部を充填・脚部に2方向円形の透かし	ヨコナデ？タテヘラケズリ・絞り目	ヨコナデ？指ナデ	橙褐色	かなり風化している
3号墳	15-6	土師器 高坏		2.3		坏底部に刺突痕	ナデ	タテハケメ8条／cm	赤橙褐色	かなり風化している
3号墳	15-7	土師器 高坏		1.3	脚端部径 12.2	脚端部に凹線1条	ヨコナデ	ヨコナデ	橙褐色	
3号墳	15-8	土師器 高坏		2.1	脚端部径 10.2		ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色～黒褐色	ゆがみあり・赤色物塗布
3号墳	15-9	土師器 高坏		1.7	脚端部径 9.4	円形の透かし孔	ヨコナデ	ナナメハケメ7条／cm	暗赤褐褐色	
3号墳	15-10a	須恵器 坏蓋	14.7-13.3	4.2			回転ナデ・ランダムなナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	青灰色～灰色	ゆがみあり
3号墳	15-10b	須恵器 坏身	10.9	5.2		外面底部にヘラ記号×	回転ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	暗灰色	
3号墳	15-11	須恵器 坏身	11.6	4.7		外面底部にヘラ記号／	回転ナデ・ランダムなヨコナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	淡青灰色	
3号墳	15-12	須恵器 坏身	12.6	3.8			回転ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	青灰色～灰色	
3号墳	15-13	須恵器 坏身	12.1?	2.5			回転ナデ	回転ナデ	青灰色	ゆがみあり
3号墳	15-14	須恵器 高台付坏	13.6	5.1	8.0	外面底部　板目糸痕	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	青灰色	
3号墳	16-15	普通円筒埴輪	20.0	19.1		口縁部は直立し、口縁端部は丸みをもつ。突帯は断面台形を呈す	斜め横方向のハケメ	タテハケ一次調整	赤褐色	

3号墳	16-16	普通円筒埴輪	23.0	18.3		口縁部は外傾し、口縁端部はやや凹面をとる。突帯は断面台形を呈す。第２段に透かし孔を穿つ。	斜めハケメ	左上がりの斜めハケメ・口縁端部ヨコナデ・突帯貼り付け後ヨコナデ	赤褐色	
3号墳	16-17	普通円筒埴輪	23.0	20.5		口縁部は内傾し、口縁端部はやや凹面を成す。突帯は断面台形を呈す。第２段に透かし孔を穿つ。	ヨコハケメ	左上がり斜めハケメ→次調整・口縁端部ヨコナデ・第２段外面タテハケメ・第２段突帯貼付け後、ヨコナデ	赤褐色～淡	
3号墳	17-18	普通円筒埴輪	30.0	40.8		２条突帯３段からなり２段目中央に２個の対向する円孔透かし孔を穿つ。上方に向けてやや外反気味に開き、口縁端部は外方に折り曲げる。「コ」の字型をとり、端面は強くナデ回主せる。突帯は断面台形状で水平方向に高く突出する。	ヨコハケメ	斜めハケメ・口縁端部ヨコナデ・第２段外面斜めハケメ・第２・１段突帯貼付け後、ヨコナデ・基部タテハケメ、ナデ	橙色	
3号墳	17-19	普通円筒埴輪	19.2	16.2		口縁部はやや外傾し、口縁端部は角張る。突帯は断面台形を呈す。	ナデ	左上方向のタテハケメ	濃灰色～淡褐灰色	須恵質
3号墳	17-20	普通円筒埴輪		13.5		体部は外傾し、突帯は断面台形を呈す。透かし孔を穿つ。	ヨコハケメ	基部はタテハケメ・突帯貼り付け後ヨコナデ	淡赤褐色	
3号墳	18-21	普通円筒埴輪	28.6	18.6		口縁部は外傾し、外面に１条の凹線を巡らす。口縁端部は面をとる。突帯は断面台形を呈す。	ヨコハケメ、ナデ	タテハケメ→次調整・口縁端部ヨコナデ・第２段突帯貼付け後、ヨコナデ	濃灰色	須恵質
3号墳	18-22	普通円筒埴輪	24.4	21.0		口縁部は外傾し、口縁端部はやや凹面をとる。突帯は断面台形を呈す。第２段に透かし孔を穿つ。	ヨコハケメ・ナデ・第２段指頭圧痕	斜めハケメ・口縁端部はヨコナデ・第２段ヨコハケメ・ヘラケズリ・突帯貼り付け後ヨコナデ	黄橙色	
3号墳	18-23	普通円筒埴輪	32.0	20.0		口縁部は外傾し、口縁端部は面をとる。突帯は断面台形を呈す。	ヨコハケメ後ナデ・第２段タテナデ	左上方向のタテハケメ・口縁端部はヨコナデ・第２段左方向タテハケメ・突帯貼付け後ヨコナデ	濃灰色	須恵質
3号墳	19-24	普通円筒埴輪	27.4	11.0		口縁部は外傾し、口縁端部はやや凹面を成す。		斜めハケメ	赤褐色	
3号墳	19-25	普通円筒埴輪		9.4		体部は外傾する。突帯は断面台形を呈す。透かし孔を穿つ。	ヨコハケメ	基部はハケメ・突帯貼り付け後ヨコナデ	赤褐色	
4号墳	21-1	須恵器坏身	11.0	6.2			回転ナデ他不明	回転ナデ・ヘラケズリ・他不明	黄白色	
4号墳	21-2	須恵器坏身	11.9	5.0			回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ・ヘラ切り後ヘラケズリ	青灰色	
4号墳	21-3	須恵器杯蓋	13.7	4.8			回転ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ・ヘラ切り後ナデ	青灰色	

4号壇	21-4	須恵器坏蓋	13.4	5.2		肩部に沈線1条	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ・ナデ	淡青灰色	
4号壇	21-5	須恵器坏身	14.6	3.7			回転ナデ・ランダムなナデ	回転ナデ・ヘラケズリ・ヘラ状工具によるナデ	青灰色	
4号壇	22-6	普通円筒埴輪	28.0	15.0		口縁部はやや外傾し、口縁端部は尖る。	斜めハケ・指頭圧痕	斜めハケ	淡赤褐色	
環壕DY	29DY-1	弥生土器壺	16.6	4.2			ヨコナデ	ヨコナデ	明橙褐色	
環壕DY	29DY-2	弥生土器壺	17.4	5.5		複合口縁	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ他不明	淡橙褐色	外面煤付着
環壕DY	29DY-3	弥生土器鼓形器台		4.8		器受部は複合口縁状・口縁部外面擬凹線文8条以上	ヨコヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラミガキ	明橙褐色	
環壕DY	29DY-4	弥生土器鼓形器台	21.1	5.8		器受部は複合口縁状・口縁部外面擬凹線文20条	ヨコヘラミガキ	ヨコナデ他不明	淡橙褐色	
環壕DY	29DY-5	土玉	幅2.6			手捏成形		ナデ	暗茶褐色	
環壕BY	29BY-1	弥生土器広口壺		5.6		頸部ヘラ描き直線文4条以上	不明	不明	橙褐色	かなり風化している
環壕BY	29BY-2	弥生土器壺	20.6	4.0		頸部ヘラ描き直線文1条	ヨコナデ	ヨコナデ・指頭圧痕	灰褐色	
環壕BY	29BY-3	弥生土器壺	19.0	4.4		逆L字状口縁・貼り付突帯	ナデ	ヨコナデ・ハケメ6条／cm	淡橙褐色	
環壕BY	29BY-4	弥生土器壺	17.0	10.4		逆L字状口縁・貼り付突帯・胴部刺突文	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ヨコハケメ9条／cm他不明		外面煤付着
環壕BY	29BY-5	弥生土器壺	16.8	4.7		口縁端部外面凹線3条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	黄白色	
環壕BY	29BY-6	弥生土器壺	13.5	4.0		口縁端部外面凹線3条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ他不明	白橙色	外面煤付着
環壕BY	29BY-7	弥生土器壺	15.5	4.8		口縁端部外面凹線3条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	淡橙褐色	外面煤付着
環壕BY	29BY-8	弥生土器壺	24.8	5.7		複合口縁・口縁部外面櫛描直線文10条以上	ヨコナデ・指頭圧痕・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヨコヘラミガキ他不明	淡茶褐色	
環壕BY	29BY-9	弥生土器底部		6.7	6.6		指頭圧痕・ヘラケズリ	ナデ・タテヘラミガキ	白橙色	
環壕BY	29BY-10	弥生土器小型鉢	10.0？	7.3	4.8～4.3	口縁端部凹線1条・頸部穿孔・貝殻腹縁による刺突文	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヨコハケメ7条／cm・タテハケメ8条／cm・指頭圧痕・ナデ	淡茶褐色	ゆがみあり
環壕BY	29BY-11	弥生土器高坏		2.5	脚端部9.5	「くの字」口縁・平底	ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラミガキ	淡茶褐色	
環壕BY	29BY-12	弥生土器蓋	10.2？	3.4		現状では1カ所穿孔	ナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	淡茶褐色	ゆがみあり
環壕B1	30B1-1	弥生土器広口壺	16.8？	1.1		口縁端面鋸歯文・内面櫛描波状文と小さな円孔・櫛描直線文6条以上	ヨコナデ	ヨコナデ・指頭圧痕	橙褐色	
環壕B1	30B1-2	弥生土器壺		1.6		逆L字状口縁貼り付突帯	ヨコヘラミガキ	ヨコナデ	橙褐色	
環壕B1	30B1-3	弥生土器壺	26.2？	6.2		口縁端部刻み目	ナデ	ナデ	淡灰褐色～橙白色	
環壕B1	30B1-4	弥生土器壺	17.6	6.2		口縁端部外面凹線4条	ヨコナデ	ヨコナデ・タテハケメ6条／cm	灰褐色～茶褐色	外面煤付着
環壕B1	30B1-5	弥生土器壺	11.7	6.9		口縁端部外面凹線4条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・タテハケメ6条／cm	橙褐色	外面煤付着

環壕B1	30B1-6	弥生土器 壺	12.7	5.3		口縁端部外面凹線3条・胴部に櫛状工具による刺突文	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・タテハケメ11条／cm	橙褐色	
環壕B1	30B1-7	弥生土器 壺	19.1	4.5		口縁端部外面凹線5条	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ他不明	暗茶褐色	
環壕B1	30B1-8	弥生土器 壺	24.97	3.7		口縁端部外面凹線3条	ヨコナデ	ヨコナデ	橙褐色	かなり風化している
環壕B1	30B1-9	弥生土器 底部		3.3	6.6		ヨコヘラミガキ	タテハケメ後タテヘラミガキ・ナデ	淡灰褐色～茶白色	
環壕B1	30B1-10	弥生土器 底部		4.2	8.1		ヘラケズリ	タテヘラミガキ・ナデ	灰褐色～暗褐色	
環壕B1	30B1-11	弥生土器 底部		5.6	7.1		ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後タテヘラミガキ・ナデ？	黒褐色～暗褐色	
環壕B1	30B1-12	弥生土器 甕					不明	ヘラケズリ	赤褐色	
環壕B2	30B2-1	弥生土器 壺	14.12	2.9		逆Ｌ字状口縁貼り付突帯	磨滅により不明	磨滅により不明	淡橙白色	かなり風化している
環壕B2	30B2-2	弥生土器 壺		6.8		頸部ヘラ描き直線文8条以上	不明	不明	淡茶白色	かなり風化している
環壕B2	30B2-3	弥生土器 壺	22.8	19.1		頸部円形刺突文・頸部から胴部に多条の櫛描直線文・三角形刺突文・櫛描波状文	ヘラミガキ・タテハケメ	ヨコヘラミガキ他不明	橙褐色～灰褐色	接合できない破片を図面上で合成
環壕B2	31B2-4	弥生土器 広口壺	20.4	口頸部19.1 底部12.9	10.4	口縁端部ヘラ描斜格子文・櫛描直線文30条以上・櫛描波状文	ヨコナデ？ヨコハケメ10条／cm	ヨコナデ？タテハケメ・底面ナデ	淡橙褐色	ゆがみあり
環壕B2	31B2-5	弥生土器 無頸壺	10.1	18.67	8.2	口縁部凹線3条・穿孔2カ所・口縁端部凹線1条・櫛状工具による刺突文	ヨコナデ・ハケメ3条／cm	ヨコナデ・タテ方向のナデ・タテヘラミガキ	茶褐色～灰褐色	接合できない破片を図面上で合成
環壕B2	31B2-6	弥生土器 広口壺	14.37	1.3		口縁下端に垂直する鍛をもつ	不明	ヨコナデ他不明	橙白色	かなり風化している
環壕B2	31B2-7	弥生土器 壺	12.0	6.7		口縁端部外面凹線2条	ヨコナデ・ヘラケズリ・タテヘラミガキ	ヨコナデ・ヨコハケメ・タテヘラミガキ	淡橙～灰褐色	外面煤付着
環壕B2	31B2-8	弥生土器 甕	21.77	7.3		口縁端面にヘラ描き沈線文1条	ヨコナデ・ヨコヘラミガキ	ヨコナデ・ハケメ後ヨコヘラミガキ・指頭圧痕	橙褐色	
環壕B2	31B2-9	弥生土器 壺	16.47	3.9		逆Ｌ字状口縁貼り付突帯上に刻み目・胴部ヘラ描直線文6条・刺突文	ヘラミガキ	ヨコナデ・ハケメ後ヘラミガキ？	灰褐色	
環壕B2	31B2-10	弥生土器 鉢	14.9	8.7		口縁端部刻み目・ヘラ描直線文16条・三角形刺突文	ヘラミガキ	ヨコナデ・タテハケメ	淡橙褐色	
環壕B2	31B2-11	弥生土器 鉢	22.8	4.9		口縁を逆Ｌ字状に強く屈折	ヘラミガキか	ヨコナデ・タテハケメ12条／cm	橙褐色	外面煤付着
環壕B2	31B2-12	弥生土器 壺		3.4		口縁端部外面凹線4条以上	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・タテハケメ	橙褐色	外面煤付着

環壜B2	31B2-13	弥生土器 甕	13.1	5.4			ヨコナデ・ヨコヘラミガキ	ヨコナデ他不明	灰褐色～茶褐色	
環壜B2	31B2-14	弥生土器 甕	13.6	2.2		口縁端部凹線2～3条・頸部に櫛状工具による刺突文	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	灰褐色	かなり風化している
環壜B2	32B2-15	底部		5.0	9.5		タテハケメ6条／cm	ナデ・ヘラミガキ	茶白色	
環壜B2	32B2-16	底部		5.2	5.1		不明	ナデ・タテハケメ5条／cm後タテヘラミガキ	茶褐色～黒褐色	
環壜B2	32B2-17	底部		2.1	8.6		ヨコヘラミガキ	ナデ・タテハケメ後ヘラミガキ	茶白色	
環壜B2	32B2-18	底部		4.4	10.2		タテヘラミガキ	ナデ・タテヘラミガキ	橙褐色～暗茶褐色	
環壜B2	32B2-19	底部		3.2	5.6		不明	底面は丁寧なナデ・他不明	橙褐色	かなり風化している
環壜B2	32B2-20	底部		10.1	6.9		ヘラケズリ	ナデ・タテヘラミガキ	橙褐色～暗茶褐色	
環壜B2	32B2-21	底部		11.0	6.3		タテヘラミガキ	ナデ・タテハケメ・タテヘラミガキ	灰褐色～淡赤褐色	
環壜B2	32B2-22	底部		9.6	9.5		ヨコヘラミガキ・タテハケメ	ナデ・タテハケメ8条／cm	橙灰褐色～黒褐色	
環壜B2	32B2-23	弥生土器 高坏	20.3	2.6		口縁端部上面に凹線3条	ヨコヘラミガキ	不明	黄白色	内面煤付着
環壜	32T1Y1-1	弥生土器 甕	18.1	2.2		頸部下にヘラ描き直線文2条以上	ヨコナデ他不明	ヨコナデ・ヘラミガキ	灰褐色～暗褐色	
環壜	32T1Y1-2	弥生土器 底部		4.8	6.7		不明	粗いナデ・ヘラミガキ	橙褐色	
環壜	32T1Y1-3	弥生土器 高坏		1.7	脚端部 11.1	円形透かし現状で3方	粗いヨコヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラミガキ	明橙褐色	
環壜	32T2Y2-1	弥生土器 壺		3.1			ヘラミガキ	タテハケメ6条／cm後ヘラミガキ	赤褐色	
環壜	32T2Y2-2	弥生土器 甕	28.2	1.6		口縁端部に刻み目	不明	不明	淡茶褐色	外面煤付着
環壜	32T2Y2-3	弥生土器 甕	16.3	1.6		逆し字状口縁・口縁端部粘土貼付・瀬戸内	不明	指頭圧痕他不明	淡橙褐色	
環壜	32T2Y2-4	弥生土器 底部		6.9	14.2		ナデ	ナデ	黄橙褐色～黒褐褐色	
旧表土中	33-1	弥生土器 広口壺				頸部ヘラ描き直線文5条	ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	茶褐色	
旧表土中	33-2	弥生土器 甕	26.9?	27.2		口縁端部角張る	不明	ヨコナデ・指頭圧痕・ヨコハケメ5条／cm・タテヘラミガキ	淡茶色～黒褐色	ゆがみあり
旧表土中	33-3	弥生土器 甕	21.2	21.7	6.6	口縁端部に刻み目	不明	ヨコヘラミガキ他不明	淡茶色～黒褐色	外面煤付着・ゆがみあり
旧表土中	33-4	弥生土器 甕	24.1?			口縁端部に刻み目・頸部下にヘラ描き直線文4条	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰褐色	外面煤付着
旧表土中	33-5	弥生土器 底部			8.0?		ヘラミガキ	タテハケメ後タテヘラミガキかナデ		
旧表土中	33-6	弥生土器 底部			6.0～8.4		不明	底面はナデ後ランダムなヘラ状工具によるナデ・タテハケメ6条／cm	橙褐色	
SI01	41-1	弥生土器 壺	8.1	2.0		短かめの複合口縁	不明	不明	橙褐色	小型

SI01	41-2	弥生土器底部		4.0	7.6			ヘラケズリ	タテヘラミガキ・ナデ	黒褐色～茶褐色	
SI02	44-1	弥生土器広口壺	22.3	11.1			口縁端部凹線2条・頸部ヘラ描き直線文3条・刺突文	ヨコナデ・ハケメ？	ヨコナデ・タテハケメ6～7条／cm・タテハケメ後ヨコナデ	橙褐色	
SI02	44-2	弥生土器壺	26.2	2.2			口縁部凹線3条	ヨコヘラミガキ	ヨコナデ	灰褐色～黒褐色	外面煤付着
SI02	44-3	弥生土器壺	11.9	2.8			口縁部凹線3条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	淡橙褐色	外面煤付着
SI02	44-4	弥生土器壺	14.1	5.3			口縁端部外面凹線3条・胴部ヘラ状工具による刺突文	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ他不明	橙褐色～茶褐色	外面煤付着
SI02	44-5	弥生土器壺	13.6	4.0			口縁部凹線3条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヨコハケメ	茶褐色～黒褐色	
SI02	44-6	弥生土器壺	13.5	15.3	5.8		口縁端部凹線3条・頸部から肩部ヘラ描直線文・鋸歯文	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ	橙灰褐色～黒褐色	
SI02	44-7	弥生土器底部		3.9	5.6			ヘラケズリ	不明	橙褐色	ゆがみあり
SI03	46-1	土師器甕	16.6	5.2			複合口縁	ヨコナデ他不明	不明	茶白色	
SI03	46-2	土師器甕	16.3	3.5			複合口縁	不明	不明	橙褐色	
SI03	46-3	土師器甕	13.5	3.2			複合口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙褐色	外面煤付着
SI03	46-4	土師器甕	13.3	3.2			複合口縁・口縁端部外面に幅広の凹線状のくぼみを入れる	ヨコナデか	ヨコナデか	橙白色	
SI03	46-5	土師器小型丸底鉢	15.1?	4.9?			複合口縁状	ナデ後ヘラミガキ	ヨコナデかヨコハケメかヘラミガキ	茶褐色	ゆがみあり・径、底部は不確実
SI03	46-6	弥生土器鉢形器台		2.6			脚台部	ヘラケズリ	ヨコナデ	橙褐色	
SI03	46-7	土師器低脚坏	14.1	2.4				不明	不明	橙白色	
SI04	47-1	弥生土器底部		4.2	7.2			ヘラケズリ	不明	茶白色	
SI05	49-1	弥生土器壺	15.2	4.5			口縁端部外面凹線2条	不明	ヨコナデ・タテハケメ4条／cm	灰褐色～淡橙白色	
SI05	49-2	弥生土器壺	15.3	5.0			口縁端部外面凹線4条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ他不明	淡橙褐色	外面わずかに煤付着
SI05	49-3	弥生土器壺	14.0	2.2			口縁端部外面凹線2条	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙褐色	外面煤付着
SI05	49-4	弥生土器壺	18.4?	3.0			複合口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	茶白色	外面煤付着
SI05	49-5	弥生土器底部		2.3	8.0			ナデ・ヘラケズリか	ナデ	赤白色～白茶色	
SI06	51-1	弥生土器広口壺	19.0	16.8			口縁端部凹線4条・口縁直下ヘラ描き直線文3条	ヨコナデ・ヨコハケメ6条／cm・ヘラケズリ	ヨコナデ・タテハケメ8条／cm他不明	茶褐色	
SI06	51-2	弥生土器壺	14.0	3.4			口縁端部外面凹線3条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメか	橙褐色	外面煤付着
SI06	51-3	弥生土器壺	20.0	3.6			口縁端部外面凹線5条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	灰褐色～黄白色	
SI06	51-4	弥生土器壺	14.2	6.7			口縁端部外面凹線3条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・タテハケメ	橙褐色	かなり風化している
SI06	51-5	弥生土器底部		7.6	6.8			ヘラケズリ	ナデ・タテハケメ6条／cm	淡黒褐色～黒褐色	
SI07	54-1	弥生土器壺	18.1	6.4			外面箱文	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	淡茶褐色	かなり風化している・外面煤付着

SI07	54-2	弥生土器 壺	17.07	2.5		口縁端部外面凹線3条	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色	外面煤付着
SI07	54-3	弥生土器 底部		1.9	5.5		ヘラケズリ	ナデ・タテヘラミガキ	黒褐色	
SI07	54-4	弥生土器 高杯		11.4	脚端部 10.4	脚部に上下2段・5方向に円形透かし	ヘラケズリ	ヨコナデ・タテヘラミガキ	橙褐色	
SS01	57-1	弥生土師 広口壺	24.3	8.3		口縁端部凹線4条・頸部ヘラ描き直線文5条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ他不明	赤褐色～ 橙褐色	
SS02b	59-1	弥生土器 壺	15.4	6.6		口縁端部凹線2条・頸部円形刺突文・頸部から肩部ヘラ状工具による刺突文	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・タテハケメ	灰褐色～ 黒褐色	外面煤付着
SS02b	59-2	弥生土器 壺	15.0	5.0		頸部にヘラかハケ原体による列点文	ヘラケズリ他不明	ヨコナデ他不明	灰褐色～ 茶白色	外面煤付着
SS02b	59-3	弥生土器 壺	19.3	3.9		口縁部凹線3条以上	不明	不明	淡橙褐色	かなり風化 している
SS02b	59-4	弥生土器 底部		4.3	8.0		ヘラケズリ	ヘラケズリ	淡橙褐色	
SS02b	59-5	弥生土器 高坏		5.0	脚端部 13.27	脚端部に凹線？1条	ヘラケズリ・ヨコヘラミガキ	不明	茶白色	
SS03	61-03-1	土師器 高坏		6.1		現状では1カ所円形の透かし	ヘラケズリ・回転ナデ	タテハケメ7条／cm	暗茶褐色	
SS04	61-04-1	弥生土器 壺	15.57	2.9		複合口縁・外面無文	ヨコナデ	ヨコナデ	橙褐色	外面煤付着
SS05	62-1	弥生土器 壺	13.77	3.1		口縁部凹線2条以上	ヘラケズリ他不明	不明	茶白色	かなり風化 している
SS05	62-2	土師器 壺	18.87	4.3		複合口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色	外面煤付着
SS07	64-1	弥生土器 壺	11.7	口縁部 3.2 底部4.0	5.8	口縁部凹線1条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ハケメ後タテヘラミガキ・ヨコナデ・ハケ	黒褐色～ 橙褐色	外面煤付着
SS07	64-2	弥生土器 壺	14.3	3.3		口縁部凹線2条?	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・タテハケメ5条／cm	橙褐色	外面煤付着
SS09	67-1	弥生土器 壺	14.47	5.2		口縁部凹線1条	ヨコナデ・指頭圧痕・ヘラケズリ	ヨコナデ・タテハケメ6条／cm	茶白色	かなり風化 している
SS10	69-1	弥生土器 壺	14.6	5.7			ヘラケズリ	ヨコナデ他不明	橙白色	かなり風化 している
SS10	69-2	弥生土器 底部		3.1	5.2		ヘラケズリ他不明	不明	黒褐色～ 灰茶色	
SS11	71-1	弥生土器 壺		頸部8.0 底部11.1	11.8	頸部下に櫛描き直線文6条以上	ヘラケズリ他不明	ヨコナデ・タテハケメ5条／cm・ナデ？	灰褐色～ 淡橙白色	
SS11	71-2	弥生土器 底部		7.4	7.9		ヘラミガキ・ヘラケズリ	ナデ・タテヘラミガキ	橙褐色～ 黒褐色	
SS12	72-1	弥生土器 壺	14.07	3.2		複合口縁	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	灰褐色	外面煤付着
SS13	74-1	弥生土器 壺	13.3	3.8		口縁端部外面凹線4条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ他不明	橙褐色	
SD03	79-1	土師器 壺	15.0	8.3		単純口縁	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・タテハケメ	橙褐色～ 黒褐色	
SD03	79-2	土師器 壺	20.57	3.2		複合口縁	不明	不明	淡茶白色	
SD03	79-3	土師器 壺		8.8		丸底	ヘラケズリ他不明	不明	橙色～ 灰褐色	外面煤付着
SD04	81-04-1	弥生土器 壺	14.8	2.1		口縁部ヘラ描き沈線2条・沈線を描いた後にヨコナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	暗茶褐色	外面わずかに煤付着
SD04	81-04-2	弥生土器 壺	16.0	3.3		複合口縁・口縁部凹線4条・頸部にヘラ描き沈線1条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	橙白色	外面わずかに煤付着

SD04	81-04-3	弥生土器 壺	16.1	5.6		口縁端部外面凹線4条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ他不明	灰褐色～ 黒褐色	外面煤付着
SD05	81-05-1	土師器 甕	24.6	4.9		複合口縁	不明	不明	黄白色～ 淡橙色	かなり風化 している
SD05	81-05-2	土師器 甕	20.2?	3.5		複合口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色～ 黒褐色	外面煤付着
SK08	86-08-1	土師器 甕	21.3	4.7		「くの字」口縁	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	橙褐色	
SK08	86-08-2	土師器 高坏		1.2		坏底部を充填	不明	タテハケメ5条／cm	橙褐色	
SK11	86-11-1	弥生土器 甕	18.0	5.3		口縁端部外面凹線5条	ヨコナデ？ヘラケズリ	ヨコナデ・タテハケメ7条／cm	橙褐色	外面煤付着
SK11	86-11-2	弥生土器 底部		3.9	4.3		不明	不明	橙褐色～ 暗茶褐色	
SK11	86-11-3	弥生土器 高坏		3.2	脚端部 12.6		ヘラケズリ	不明	灰褐色～ 淡茶褐色	
SK12	86-12-1	弥生土器 壺	10.7?	2.1		口縁部凹線4条	ヘラミガキ	ヨコナデ	橙褐色	
SK13	84-1	縄文 鉢		3.6		口縁部刻み目突帯文	不明	ナデ他不明	橙白色	貼り付
SK15	85-15-1	縄文 鉢		3.6		口縁部刻み目突帯文・頸部下に楕状工具による平行沈線文6条以上	ヨコヘラミガキ	不明	淡橙白色	貼り付
SK16	85-16-1	弥生土器 壺	15.4	口縁部 9.2 底部7.9	7.0	口縁端部外面凹線2条	ヘラケズリ他不明	タテヘラミガキ・ヨコナデ他不明	黒褐色～ 橙褐色	外面煤付着
SK16	85-16-2	弥生土器 壺	21.6?	2.0		口縁端部外面凹線3条	ヨコナデ他不明	ヨコナデ他不明	茶白色	外面煤付着
SK17	85-17-1	弥生土器 壺	11.2	5.2			ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ他不明	橙褐色	かなり風化 している
SK17	85-17-2	弥生土器 壺	14.9	5.8		口縁端部外面凹線4条	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・タテハケメ	茶褐色	外面煤付着

経塚鼻遺跡出土石器・石製品観察表

遺構名	挿図番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形態上の特徴	石材	色調	備考
旧表土中	34-S1	敲石	10.5	7.8	4.7	347.8	やや扁平な卵形を呈す。表裏中央部・上下先端部に敲石打痕あり。			
SI01	42-1	砥石	11.7	4.2	4.2	397.7	直方体を呈し、断面は梯形。砥面は3面使用され、面は平坦。	花崗岩		
SI06	51-S1	石錘	3.2	1.7	1.7	9.2			灰白色	
SI07	55-S1	敲石	18.8	11.2	7.5	2180.4	敲打痕あり。	安山岩		
遺構外	88-1	石包丁(磨製)	4.8	4.0	0.5	16.8	両刃で穿通し穴を穿つ。両面に研磨が施され擦痕が残る。両刃。	安山岩		
遺構外	88-2	磨製石斧	4.8	7.6	3.7	198.6	側面に面を持ち、研磨により側面の稜線が明瞭に残る。	黒雲母花崗岩		
遺構外	88-3	磨製石斧	7.0	5.6	3.5	155.0	刃縁はやや緩やかに湾曲する。側面に面をもたず、断面は楕円形を呈す。	安山岩	黄褐色	
遺構外	88-4	石核	10.6	9.9	1.6	189.6		安山岩		
遺構外	88-5	敲石	8.7	6.2	5.0	407.1	卵形を呈す。両端部に敲打痕あり。	安山岩	黄褐色	

経塚鼻遺跡出土玉類観察表

遺構名	挿図番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形態上の特徴	石材	色調	備考
3号墳	13-J1	勾玉	2.2	1.7	0.9	4.51	弧状を呈し断面円形	めのう		
3号墳	13-J2	小玉	1.3	1.4	0.8	2.51		めのう		一部欠損
3号墳	13-J3	切子玉	2.9	1.7	1.5	6.70		水晶		一部欠損
3号墳	13-J4	小玉	0.6	0.6	0.4	0.23		ガラス	濃青色	
3号墳	13-J5	小玉	0.7	0.8	0.35	0.22		ガラス	濃青色	
3号墳	13-J6	小玉	0.7	0.7	0.55	0.29		ガラス	濃青色	

経塚鼻遺跡出土鉄器・古銭観察表

遺構名	挿図番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形態上の特徴	備考
1号墳	9-1-F1	鉄鏃	5.9	1.5	0.55	8.97		茎部のみ
2号墳	9-2-F1	鉄鏃	3.2	2.6	1	9.99		先端部分のみ
3号墳	13-F1	刀子	9.6	2.1	0.4～1.6	19.71		
3号墳	16-F2	刀子	16.9	1.25～1.85	0.7	27.40		
遺構外	88-6	古銭	2.4	2.4	0.1	2.45	「寛永通寶」銘	銅貨
遺構外	88-7	古銭	2.3	2.3	0.1	2.25	「寛永通寶」銘	銅貨

写　真　図　版

図版1

調査地全景（北西上空から）

調査地頂部近景（西側上空から）

調査地全景（西側上空から）

図版 3

調査前風景（北西から）

調査地全景（南側上空から）

1号墳
土層ベルト
（東から）

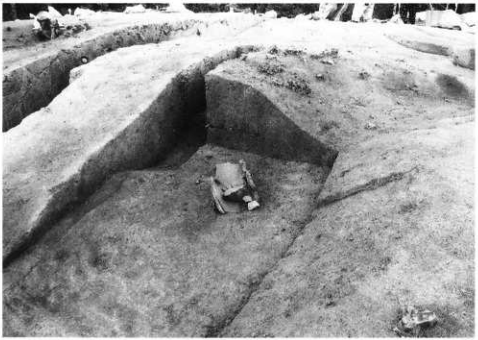
1号墳
東西土層ベルト東側
（南西から）

1号墳
東西土層ベルト西側
（南東から）

図版 5

1 号墳
東側周溝土層断面
（南東から）
1 号墳周溝と SD01 の
切合

1 号墳
南東側周溝遺物検出状況
（北東から）



1 号墳
周溝西側終焉付近
埴輪検出状況
（西から）

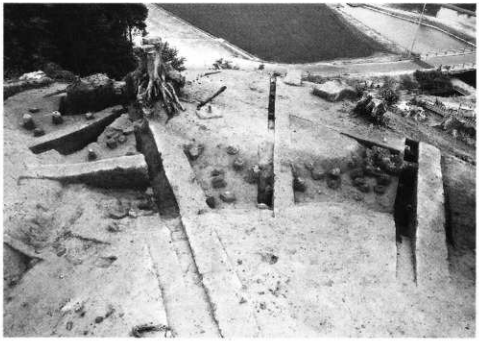
1号墳
主体部完掘状況
（東から）

1号墳
完掘後の全景
（北から）

2号墳
周溝土層断面
（南西から
調査地境を望む）

図版 7

2号墳
完掘後の全景
（北西から）

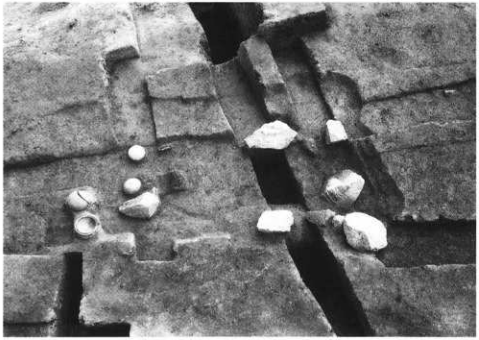


3号墳
周溝遺物出土状況
（北西より）

3号墳
埴輪出土状況
（北東から）

3号墳
主体部検出状況
（北東から）

3号墳
主体部土層断面
（南西から）



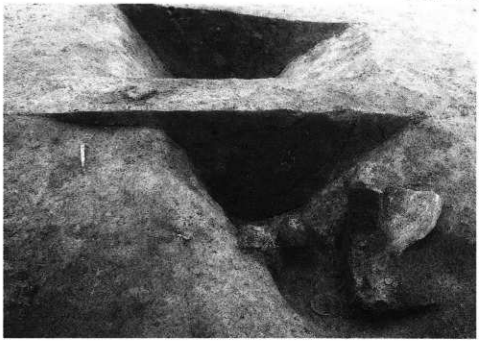
3号墳
主体部床面検出
（北東から）

図版 9

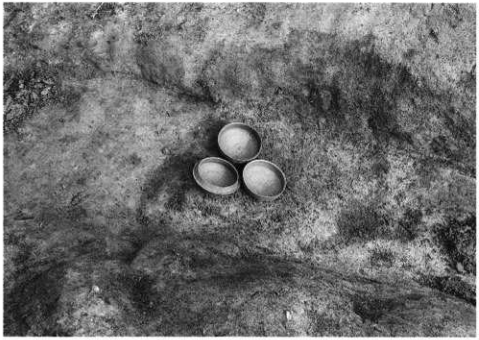
3 号墳
主体部検出状況全景
（北西から）

3 号墳
主体部完掘状況
（北東から）

3 号墳
完掘後の全景
（北西から）



4号墳
周溝土層断面
（北西から）



4号墳
周溝底部遺物出土状況
（南西から）

4号墳
完掘状況
（西から）